

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書 2

— 木更津市沢間 1・沢間 2 遺跡 —

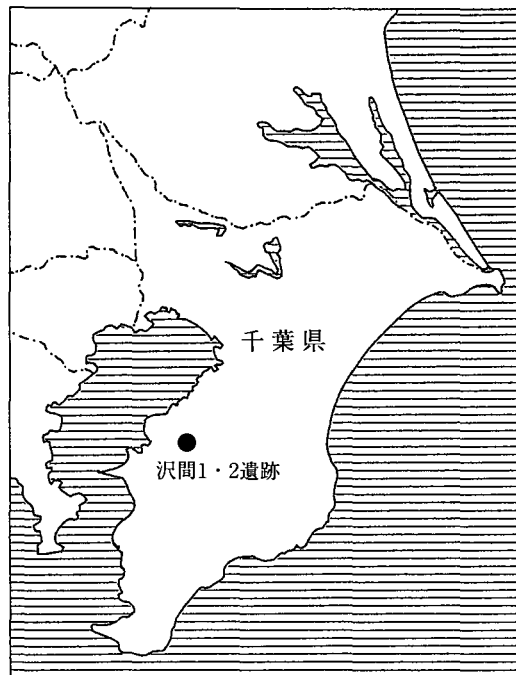
平成 17 年 3 月

国 土 交 通 省

財団法人 千葉県文化財センター

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書 2

— 木更津市^{さわま}沢間 1・^{さわま}沢間 2 遺跡 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第511集として、国土交通省の首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した木更津市沢間1・沢間2遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、沢間1遺跡において古墳時代前期と奈良・平安時代の耕作跡と考えられる遺構やそれらに関連する溝跡、竪穴住居跡などが発見され、この地域の古代の土地利用を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また地域の歴史資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成17年3月25日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 清水 新 次

凡 例

- 1 本書は国土交通省による首都圏中央連絡自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書は下記の遺跡を収録したものである。
 - 沢間1遺跡 千葉県木更津市下郡字立ノ台1533ほか（遺跡コード206-024）
 - 沢間2遺跡 〃 木更津市下郡字山王方前1762-2ほか（遺跡コード206-027）
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員伊藤智樹が担当した。
- 6 土壌サンプルの花粉分析・プラントオパール分析については、株式会社パレオ・ラボに委託し、その成果は付章に掲載した。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局、木更津市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
 - 第1図 木更津市発行 1/2,500地形図（IX-LE34-4）を改図転載
 - 第2図 国土地理院発行 1/25,000地形図「上総横田」（NI-54-19-16-4）
- 9 周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和45年4月撮影のものを使用した。
- 10 本書で使用した図面の方位は、すべて日本測地系による座標北である。
- 11 土器実測図の断面については、須恵器は黒塗りとし、それ以外は白抜きとした。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の経過	1
第2節	遺跡の地理的環境と周辺の遺跡	3
1	地理的環境	3
2	周辺の遺跡	3
第2章	沢間1遺跡	7
第1節	調査の概要	7
1	調査の方法と経過	7
2	基本層序と遺構検出面の概観	7
第2節	検出した遺構と遺物	11
1	第1面の遺構と遺物	11
2	第2面の遺構と遺物	15
3	第3面の遺構と遺物	21
4	グリッド出土遺物	33
5	トレンチ出土遺物	39
第3章	沢間2遺跡	41
第1節	調査の概要	41
1	調査の方法と経過	41
2	基本層序	41
3	トレンチ	41
4	出土遺物	43
5	小結	44
第4章	まとめ	45
1	各面の概観	45
2	自然科学分析から見た栽培作物	47
3	まとめ	47
付章	沢間1遺跡の自然科学分析	49
第1節	沢間1遺跡のプラント・オパール	49
第2節	沢間1遺跡の花粉化石	55

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	2	第18図	SB002・003	30
第2図	沢間1・2遺跡と周辺の遺跡	4	第19図	SH040・041・042・043・044・045・047・048・050・051	32
第3図	沢間1遺跡グリッド設定図及び確認調査トレンチ配置図	8	第20図	第2面～3面遺物分布図	34
第4図	沢間1遺跡地形及び土層断面図(1)	9	第21図	グリッド出土遺物(1)	36
第5図	沢間1遺跡土層断面図(2)	10	第22図	グリッド出土遺物(2)	37
第6図	第1面遺構分布図	12	第23図	グリッド出土遺物(3)	38
第7図	SI001・SD002A・SK002	13	第24図	トレンチ出土遺物	40
第8図	第2面遺構分布図(1)	16	第25図	沢間2遺跡トレンチ配置図	42
第9図	第2面遺構分布図(2)	18	第26図	沢間2遺跡基本層序	42
第10図	SH001・009・027・030・031・039・SK001	19	第27図	沢間2遺跡トレンチ内遺構検出状況	43
第11図	SD008出土遺物	19	第28図	沢間2遺跡出土遺物	43
第12図	第3面遺構分布図	22	第29図	試料採取地点位置図	49
第13図	SD003遺物分布図	23	第30図	地点①(SD006)のプラント・オパール分布図	51
第14図	SD003・004・005・SH054出土遺物	25	第31図	地点②(SD008)のプラント・オパール分布図	51
第15図	SD003・004・005土層断面図	28	第32図	地点③(SD009)のプラント・オパール分布図	51
第16図	SD009土層断面図	28			
第17図	SB001	29			

表 目 次

表1	第2面ピット一覧表	20
表2	試料1g当たりのプラント・オパール個数	50
表3	産出花粉化石一覧表	56

図 版 目 次

図版1	沢間1・2遺跡周辺航空写真	SD002A・B
図版2	沢間1遺跡全景	図版4 SD002A・B, SD001
図版3	沢間1遺跡調査後全景 SI001	SD006検出状況
		図版5 SD006

- 図版 6 SD008 第 3 面西側部分航空写真
- 図版 7 SD008断面 図版13 第 3 面航空写真
第 3 面遺構群検出状況 図版14 沢間 2 遺跡遠景
SB001 第 3 トレンチ, 第 1 トレンチ断面
- 図版 8 SD003 図版15 第 2 トレンチ, 第 7 トレンチ
SD003遺物出土状況 図版16 沢間 1 遺跡遺構内出土遺物
- 図版 9 SD004, SD005 図版17 沢間 1 遺跡遺構内・グリッド出土遺物
- 図版10 第12トレンチ断面 (部分) 図版18 沢間 1 遺跡グリッド出土遺物
SD009検出状況 図版19 沢間 1 遺跡グリッド出土遺物
- 図版11 SD009南東部分 図版20 沢間 1 遺跡グリッド・トレンチ出土遺物,
3C73グリッド遺物出土状況 沢間 2 遺跡出土遺物
- 図版12 SB001-P11断面 図版21 沢間 1 遺跡のプラント・オパール
SH009, SH040 図版22 沢間 1 遺跡の花粉化石
SH054遺物出土状況

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、都心から半径およそ40km～60kmの位置に計画された総延長約300kmに及ぶ環状の自動車専用道路である。千葉県内は、平成9年に開通した東京湾アクアラインで神奈川県と繋がり、房総半島を横断して太平洋側の茂原市に至り、東上総の台地を北上し、山武地域へと繋がっていく。この路線のうち、袖ヶ浦市から木更津市の区間がまず事業化された。用地内には数多くの遺跡が所在することから、その取扱いについて、千葉県教育委員会と国土交通省・日本道路公団との間で慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な部分については、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。木更津JCTから約25kmの区間は日本道路公団が事業主体となり、財団法人君津郡市文化財センターが発掘調査を実施し、それより東の区間については国土交通省が事業主体となり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

2 調査の経過

今回報告する沢間1遺跡・沢間2遺跡の発掘調査は、平成12年度から平成15年度にかけて断続的に行われた。整理作業は、平成15年度・平成16年度に実施し、平成16年度に報告書を刊行した。発掘調査および整理作業に関わる各年度の作業内容および担当職員は以下のとおりである。

(1) 発掘調査

○平成12年度

沢間1遺跡

期 間 平成13年3月5日～平成13年3月30日

内 容 確認調査 上層134㎡／1,233㎡, 下層134㎡／1,233㎡

本調査 上層610㎡

担当者 南部調査事務所長 高田 博 上席研究員 渡邊昭宏

○平成14年度

沢間2遺跡

期 間 平成14年4月1日～平成14年4月30日

内 容 確認調査 上層318㎡／3,175㎡, 下層－㎡／－㎡

本調査 上層0㎡, 下層0㎡

担当者 南部調査事務所長 鈴木定明 研究員 城田義友

○平成15年度

沢間1遺跡

期 間 平成15年7月1日～平成15年9月30日



第1図 遺跡の位置

0 200m
(1/5,000)

内 容 確認調査 上層第1面260㎡/2,600㎡, 第2面260㎡/2,600㎡, 下層 - ㎡/- ㎡

本調査 上層1,170㎡(2面分), 下層 0 ㎡

担当者 南部調査事務所長 鈴木定明 上席研究員 地引尚幸

(2) 整理作業

○平成15年度

沢間1遺跡

期 間 平成16年2月1日～平成16年3月31日

内 容 水洗・注記～トレースの一部

担当者 南部調査事務所長 鈴木定明 上席研究員 伊藤智樹

○平成16年度

沢間1遺跡・沢間2遺跡

期 間 平成16年4月1日～平成16年7月31日

内 容 水洗・注記～報告書刊行

担当者 南部調査事務所長 高田 博 上席研究員 伊藤智樹

第2節 遺跡の地理的環境と周辺の遺跡

1 地理的環境

沢間1・沢間2遺跡は木更津市大字下郡に所在し、小櫃川中流域河岸の標高20m～21m前後の自然堤防上と段丘上に立地している。小櫃川は、房総丘陵南部の清澄山系に源を發し幾多の蛇行を繰り返しながら北流し、遺跡から約2km程下流の袖ヶ浦市根岸付近で大きく西に流路を変え、袖ヶ浦沖積低地から東京湾へと注いでいる。

流域の上根岸・今間・辻地区など遺跡付近一帯は、昭和45年6月、集中豪雨による増水のため甚大な被害を受け、それを契機として沢間1遺跡の西側付近から下流の上根岸地先まで延長1,200mの新河川が造られたほか、流域の護岸工事も実施されるなど大規模な河川改修がなされ現在の流路となっている¹⁾。沢間1遺跡の東側から北側には蛇行する旧本流の名残が留められている。

周辺の地形は、小櫃川が形成した沖積低地を挟んで段丘が発達する。さらに標高を次第に増し左岸に木更津台地、右岸は木更津市東部から市原市域へと伸びる上総丘陵へと続き、総じて標高100mを越える急峻な山地状の地形を形成する。一方、右岸下流域は広大な沖積低地の北側に低地との比高も少なく、平坦部が比較的広い袖ヶ浦台地が形成されている。また、台地縁辺には中小河川によって開折された谷が樹枝状に入り、複雑な景観を呈している。

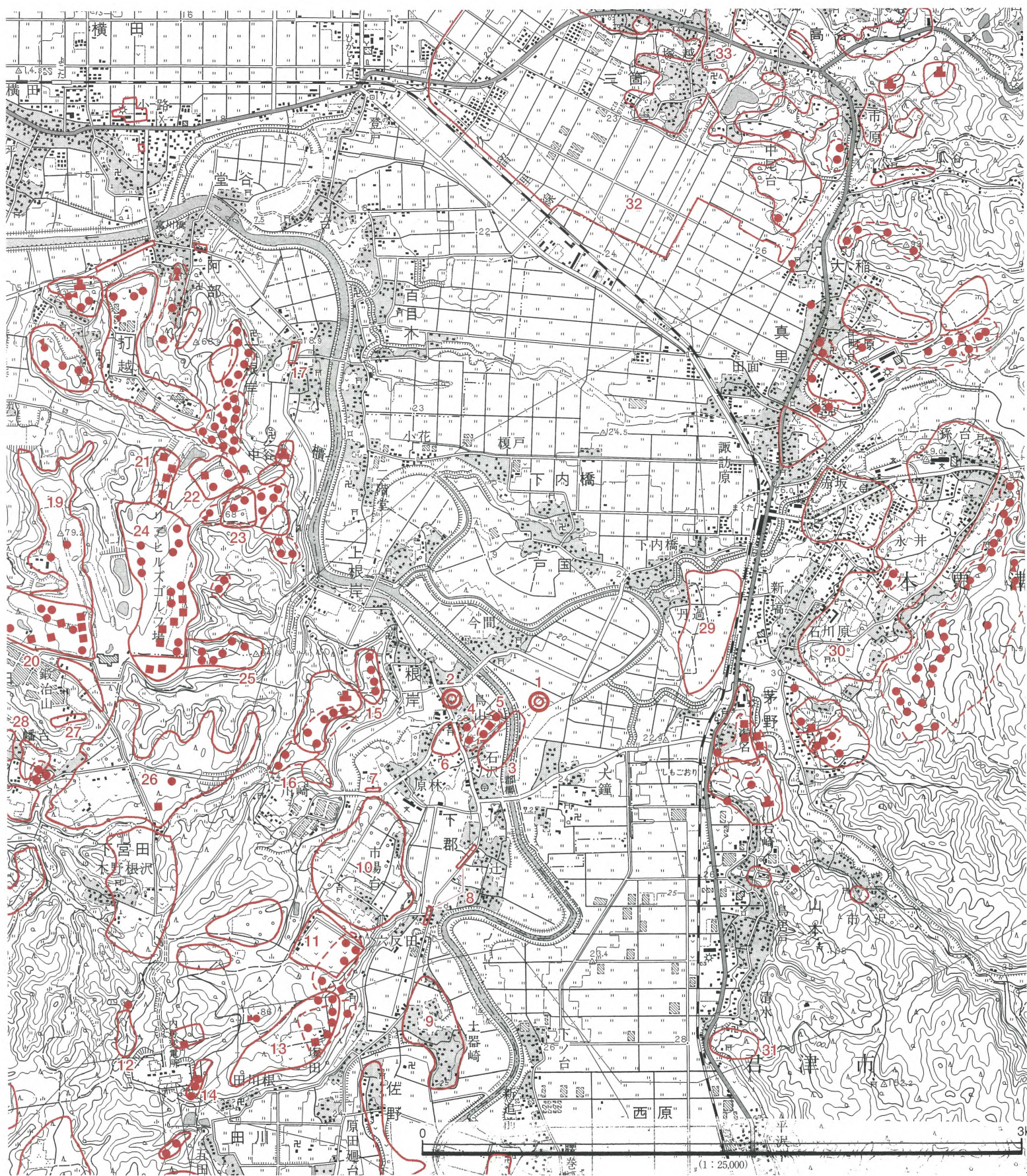
2 周辺の遺跡

前述した多様な地理的状況は、流域における遺跡の多様性に影響を与えており、沖積低地・段丘上から台地上にかけて数多くの遺跡が存在している。特に流域に接した段丘上や台地上には多数の古墳群が形成されていることも特徴の一つである。

まず、小櫃川左岸の段丘面の遺跡からみると、沢間2遺跡の南に山王台遺跡、石塚古墳群、石塚塚群、南西に上ノ山遺跡、さらにその上流域に門田遺跡、土器崎遺跡が続く。山王台遺跡は弥生時代中期の方形周溝墓群、奈良時代の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、溝状遺構などが発見されている^{2・3)}。上ノ山遺跡は縄文時代早期末葉の炉穴のほか旧石器時代、古墳時代、中近世の遺物が発見されている。旧石器時代では散在的ではあるが、石核・焼礫が出土しており、低位の段丘上に早くから人の活動が及んでいたことを示している。古墳時代では初期須恵器の特徴を備えた長頸壺が出土していることも注目される⁴⁾。門田遺跡は古墳時代の遺物包含層が確認され周辺に集落の存在が想定される⁵⁾。また、土器崎遺跡では縄文時代の朱塗りの櫛が発見されている⁶⁾。

上ノ山遺跡の南に続く台地上には縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代の遺物包蔵地として市場台遺跡、滝台遺跡、さらにその北西奥部に赤坂台遺跡、上ノ台遺跡、熊野台遺跡（田川遺跡群第1・2地点）が存在する。赤坂台遺跡では大浦式・平坂式など撚糸文終末期の土器や三戸式・田戸下層式土器など沈線文系土器群が多数出土しており、特に撚糸文終末期の無文土器の存在は炉穴の出現期を探る上で興味深い遺跡である⁷⁾。縄文時代早期の炉穴や礫群、古墳時代前期の集落跡や方形周溝墓が調査された熊野台遺跡は、この地域の考古学研究の先鞭をつけた遺跡の一つでもある⁸⁾。

一方左岸下流域では根岸根遺跡、重常遺跡がある。根岸根遺跡は古墳時代の竪穴住居跡、円墳周溝、平安時代の掘立柱建物跡、道路状遺構、中世から近世のピットや溝状遺構ほか弥生時代後期の土器片などが発見され、弥生時代後期から定住的な集落が営まれたことが知られている⁹⁾。沢間2遺跡の西側台地上に



- 1 沢間1遺跡, 2 沢間2遺跡, 3 沢間遺跡, 4 石塚古墳群, 5 石塚塚群, 6 山王台遺跡, 7 上ノ山遺跡, 8 門田遺跡,
- 9 土器崎遺跡, 10 市場台遺跡, 11 滝台遺跡・滝台古墳群, 12 赤坂台遺跡, 13 上ノ台遺跡, 14 熊野台遺跡, 15 三重台遺跡,
- 16 根岸古墳群・根岸小妻遺跡, 17 根岸根遺跡, 18 重常遺跡, 19 糸田遺跡, 20 三ツ田台遺跡・三ツ田台古墳群, 21 二又堀遺跡,
- 22 尾畑台遺跡, 23 内出原遺跡, 24 向神納里遺跡・向神納里古墳群, 25 狐谷遺跡, 26 林遺跡, 27 猪尻遺跡, 28 上宮田台遺跡,
- 29 丹遺跡, 30 内屋敷遺跡, 31 寺の台遺跡, 32 三箇遺跡, 33 荒久遺跡

第2図 沢間1・沢間2遺跡と周辺の遺跡

は重三台遺跡や根岸古墳群・根岸小妻遺跡、小支谷を挟んだ西側の台地上には大竹古墳群、大竹遺跡群や林、上宮田台遺跡など集落跡や古墳群が密集している。根岸古墳群・根岸小妻遺跡では円墳14基、方墳2基のほか盛土の整った弥生時代中期の方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代中期の集落跡が発見されている¹⁰⁾。大竹遺跡群では、縄文時代から奈良・平安時代に至る各時代で集落或いは墓域が形成されている。中でも向神納里遺跡は総数140基を越える弥生時代中期から後期の方形周溝墓群が形成された遺跡として著名である。同期のまとまった集落は発見されていないが、小数ながら竪穴住居跡が検出された筑田遺跡や二又堀遺跡、土器片を多く出土した内出原、尾畑台の各遺跡との有機的な関係が指摘されている。時代は前後するが縄文時代では中期から後期の集落が筑田、三ッ田台、向神納里遺跡などで確認されている。弥生時代後期から古墳時代では尾畑台、二又堀、三ッ田台遺跡で集落が形成され、古墳群のほか竪穴住居跡の密集度が最も高くなる時期である。二又堀遺跡では竪穴住居跡から重圏文鏡が出土している。次の奈良・平安時代には骨蔵器を伴う火葬墓や方形区画墓が二又堀遺跡、向神納里遺跡、筑田遺跡等で造営されていく。¹¹⁻¹²⁻¹³⁾

沢間1遺跡の東側、小櫃川右岸に目を転じると、約1km離れた段丘上に丹過遺跡が存在する。この遺跡は縄文時代後期から中・近世に及ぶ複合遺跡であり、弥生時代中期の環壕、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳時代終末期から奈良時代の掘立柱建物跡や区画溝などが発見されている。中でも古墳時代終末期から奈良時代の遺構は高い企画性の基に整然と造られ、畿内産の土師器も出土したことから官衙遺跡、殊に畔蒜郡衙との関係で注目されている¹⁴⁾。丹過遺跡から東約0.5kmの台地上には縄文時代早期から奈良・平安時代の複合遺跡である内屋敷1遺跡、内屋敷2遺跡が、南東約2kmには縄文時代早期の集石遺構が発見された寺の台遺跡がある¹⁵⁾。内屋敷2遺跡では縄文時代早期の陥し穴、弥生時代後期～奈良・平安時代に至る集落跡が発見され、古墳時代中期の竪穴住居跡からは鉄鋌が出土しており注目を集めている¹⁶⁾。

小櫃川右岸下流域では、沢間1遺跡から北約3kmの沖積低地に三箇遺跡群が、さらにその北東側に接する台地上には荒久遺跡ほか多くの包蔵地が存在する。三箇遺跡群では、遺構の検出例は少ないものの縄文時代から中・近世に及ぶ土器、陶磁器類が広範に散布することで知られている¹⁷⁾。荒久遺跡は旧石器時代から中世に及ぶ複合遺跡で、弥生時代中期末から後期初頭にはガラス小玉、銅釧等を副葬品とする方形周溝墓群が濃密な分布を示す。また中世では、掘立柱建物跡、溝、地下式壙等の遺構や梵字の記された地鎮祭祀関連の埋納土器、陶磁器類、銭貨、鉄滓等豊富な遺物類の検討及び隣接する寺院・延命寺との関連から、推定鎌倉街道に面した居住域と作業場や貯蔵区域で構成された「門前に開けた宿」という景観が想定されている¹⁸⁾。

注1 『木更津市史 富来田編』木更津市 1982

2 『君津郡市文化財センター年報No.7 -昭和63年度-』(財)君津郡市文化財センター 1989

3 『君津郡市文化財センター年報No.14 -平成7年度-』(財)君津郡市文化財センター 1997

4 『千葉県木更津市上ノ山遺跡』(財)君津郡市文化財センター 1988

5 『一般県道長浦上総線(木更津市下郡)埋蔵文化財調査報告書-木更津市門田遺跡・和田内遺跡-』(財)千葉県文化財センター 1999

6 平成15年度に当センターが実施した県道改良事業に伴う調査において出土した。

- 7 『-千葉県木更津市-赤坂台遺跡-送電線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書-』(財)君津郡市文化財センター 1999
- 8 『田川遺跡群-千葉県木更津市田川遺跡群発掘調査報告書』田川遺跡群発掘調査会 1980
- 9 『袖ヶ浦市根岸根遺跡-一般県道長浦上総線県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書-』(財)千葉県文化財センター 1999
- 10 『木更津市根岸古墳群・根岸小妻遺跡現地説明会資料』(財)千葉県文化財センター 2003
- 11 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅰ 笱田・三ッ田台遺跡・大竹古墳群』(財)君津郡市文化財センター 1990
- 12 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 二又堀遺跡・大竹古墳群』(財)君津郡市文化財センター 1993
- 13 『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ 向神納里遺跡・上南原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群』(財)君津郡市文化財センター 1995
- 14 『千葉県文化財センター年報No.28 平成14年度』(財)財団法人千葉県文化財センター 2004
- 15 『君津市内遺跡群確認調査報告書-寺の台遺跡・豊田遺跡・丹後塚古墳・和田古墳-』君津市教育委員会 1990
- 16 平成15年度当センター調査。
- 17 『-千葉県袖ヶ浦市-三箇遺跡群Ⅰ』(財)君津郡市文化財センター 1985
『-千葉県袖ヶ浦市-三箇遺跡群Ⅱ』(財)君津郡市文化財センター 1986
『-千葉県袖ヶ浦市-三箇遺跡群Ⅲ』(財)君津郡市文化財センター 1987
『-千葉県袖ヶ浦市-三箇遺跡群Ⅳ』(財)君津郡市文化財センター 1988
- 18 『袖ヶ浦市荒久遺跡(2)-主要地方道千葉鴨川線埋蔵文化財調査報告書2-』(財)千葉県文化財センター 1998
『一般国道410号埋蔵文化財調査報告書-袖ヶ浦市荒久(1)遺跡・三箇遺跡-』(財)千葉県文化財センター 1999

第2章 沢間1遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法と経過

第1章に記したとおり、沢間1遺跡の調査は平成12年度と平成15年度の2次にわたって実施した。発掘区の設定は、国土地理院国家座標を基準とし、20m×20mの方眼の大グリッドを設定し、西から東に向かってA・B・C…、北から南に向かって1・2・3…とした。また、大グリッド内を2m方眼の小グリッドに分割し、西から東へ00・10・20…、北から南に00・01・02…とした。各小グリッドは、例えば1A-00と呼称した。

平成12年度は、調査対象地域の南西側、面積1,233㎡を対象として確認調査と本調査の一部を行った。確認調査は、調査対象面積の10%の割合で任意にトレンチを設定した。トレンチ調査の初期段階で上層から下層までの間に複数の生活面と遺物包含層が存在することが判明した為、各生活面の層位とその広がり把握することに努めた。

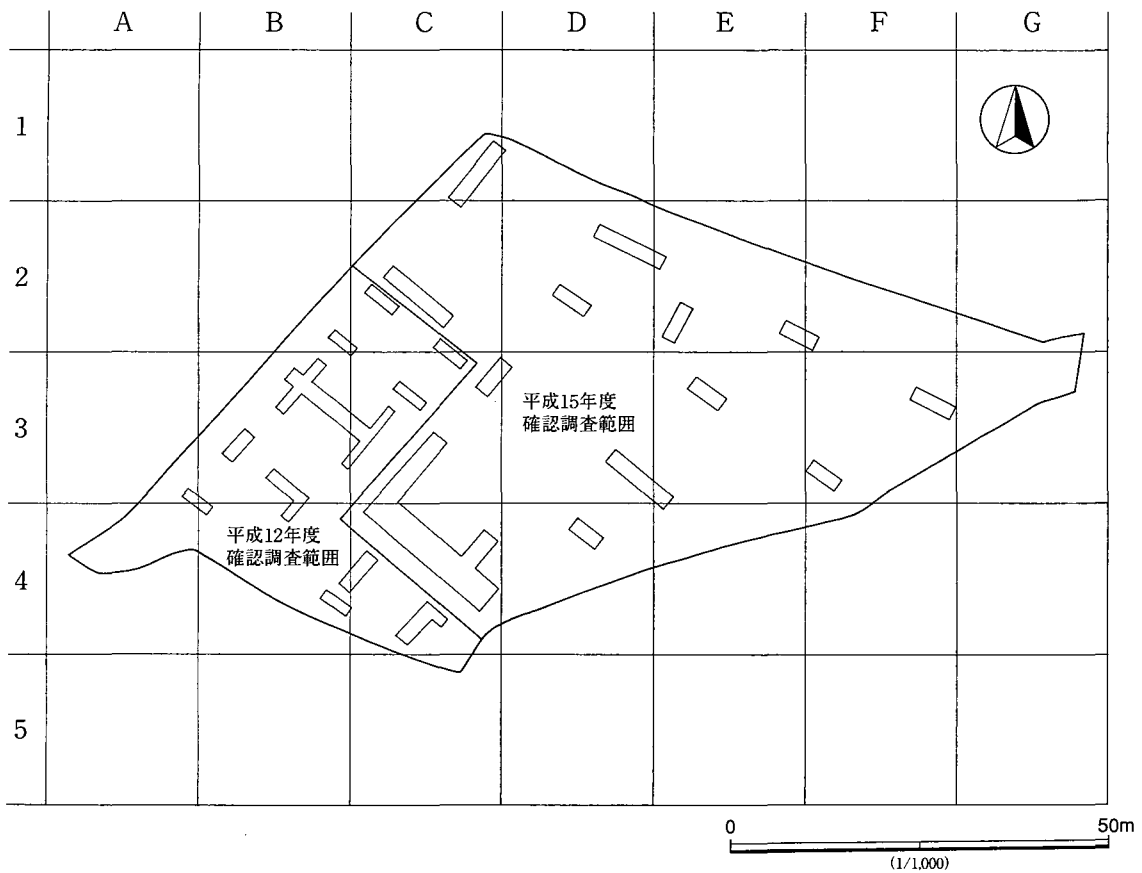
その結果、①旧地形は低地部分と微高地部分からなり、低地部分に弥生時代末から古墳時代前期及び奈良・平安時代の少なくとも2時期の生活面、畠跡が2層から3層にわたって存在すること、②調査対象範囲の南西端と北西端は、地形改良のため削平・盛土され遺構等が存在しないこと、③遺構と遺物は低地部分に集中する傾向があるものの、微高地上にも遺構が存在する可能性が高いこと等が確認された。このため調査期間と下層の遺構の状況を考慮して、先ず上層部分610㎡の本調査を実施した。

平成15年度の調査は、これらの結果をふまえて、先ず調査対象地域のうち残り2,600㎡の確認調査を行い、低地部南東側と微高地部の遺構範囲の把握に努めた。その結果、①低地部の遺構検出面は概ねⅢa層、Ⅳa層、Ⅴa・Ⅵb層の3層に区分できること、②調査区の大部分を占める北東側微高地部には遺構が存在しないこと、③微高地部北端から東端と低地部南端にかけては、北西端と同様の地形改良が行われていたこと等が確認された。これを受けて、調査対象区域の南東側に広がる低地部分を中心とした範囲280㎡及び1次調査の下層部分を合わせた合計1,170㎡の本調査を行った。

2 基本層序と遺構検出面の概観

本遺跡の土層堆積状況は基本的にⅠ層～Ⅵ層まで区分した。微高地部と低地部ではその堆積状況にかなり違いがあるが地山層は同じ層で形成される。上層部は表土層がほぼ水平に堆積するが、荒蕪地が広がる北側から東側は現表土層をⅠa層として区分し、畑として利用されている南西側表土層はⅠb層とした。北東側の微高地部は現表土下に地山のⅤa層黄白色シルト層とⅥb層乳白色シルト層が存在し、場所によって耕作土と地山層が混じってⅠd層を形成するところが認められる。

南西側の低地部は、現耕作土Ⅰb層の下層には暗褐色砂質土を主体とするⅡa層、Ⅱb層が堆積する。層厚は一様ではないがⅡa層が20cm～30cm、Ⅱb層が10cm～20cmで、Ⅱa層とⅡb層の境に耕作による層の乱れが生じている。Ⅱb層は南東側で顕著に認められるが、微高地に向かう北東側及び北西側から西側では次第に消滅し、分層が困難となる。このⅡa層とⅡb層は第1面の耕作土にあたる層で、Ⅲa層上位に淡黄色



第3図 沢間1遺跡グリッド設定図及び確認調査トレンチ配置図

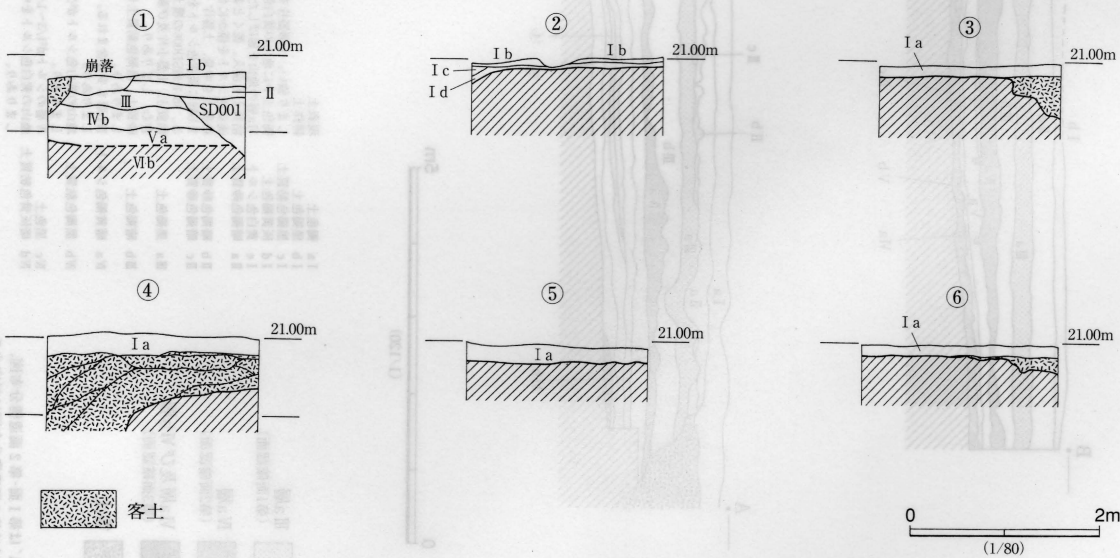
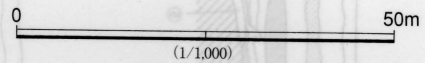
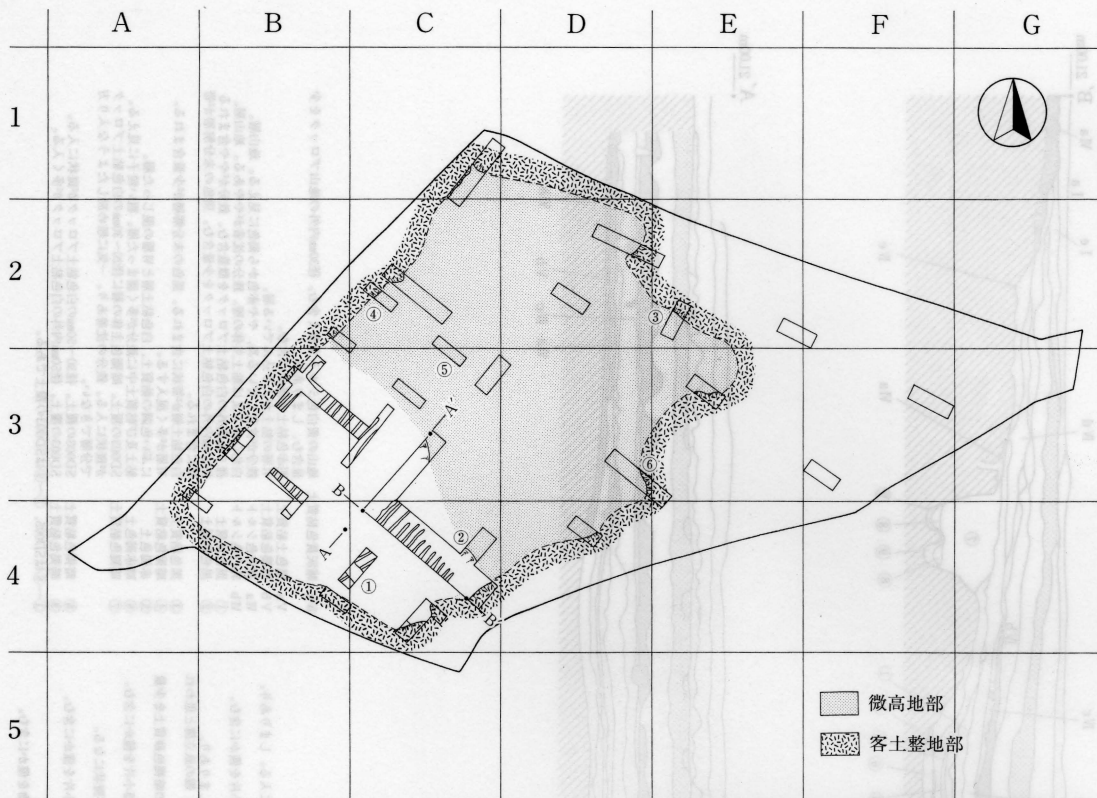
シルトを多く含むⅡc層が畝溝として掘り込まれ、SD006を形成している。

Ⅲa, Ⅲb層も全体に一様ではなく、北西側から西側ではこの2層の分層が困難で、平成12年度の調査では一部Ⅲ層として認識していた。SD001はこのⅢ層上面から掘り込まれている。Ⅲa層の厚さは20cm~25cm, Ⅲb層の厚さは50cm前後である。この層には古墳時代前期や奈良・平安時代に相当する土師器類が多く混入しているが、主体となるのは奈良・平安時代の土師器類である。

次のⅣa層上面ではⅢb層との境に耕作による堆積の乱れが認められる。これが、第2面SD008である。北側の微高地に向かってⅣb, Ⅳc, Ⅳd, Ⅳe層が堆積し、低地部から微高地への駆け上がり部分では地山Ⅵb層の直上にⅣe層が堆積する。

Ⅴa層, Ⅴb層は黒色を基調とする粘質土の層で、2層に分層される。中央付近では、Ⅴa層の下層に北西から南東方向に延びる溝状遺構SD005の覆土が堆積し、Ⅴb層の一部を取り込んでいる。Ⅴa層, Ⅴb層には古墳時代前期の土器片が多く混入している。

最下層は第3面の遺構検出面となる層で黄白色シルトのⅥa層と乳白色シルトのⅥb層が堆積する。Ⅵa層は低地部北東端から微高地にかけての基盤層となる層だが、微高地部では厚く、低地部では薄く堆積している。なお、Ⅵa層上面と微高地部との比高は約1.5mである。



Ia 褐色土 現表土
 Ib 黒褐色土 耕作土
 Ic 黒褐色粘質土 しまり強い。土器片を含む。
 Id 灰黄褐色土 褐色土中に地山の黄白色シルトが波状又は斑状に入る。しまりあり。
 IIa 暗褐色砂質土 粘質土も混入。乾くと非常に固くする。土器小片を僅かに含む。
 淡黄色シルトを僅かに含む。

IIIa 黒褐色粘質土 土器小片及び炭化物を少量含む。IIIb層の暗褐色砂質土を少量含む
 が場所により分層は困難。しまりあり。
 IVa 暗黄褐色シルト IIIb層も少量含まれる。北東の地山側はシルトが斑状になる。
 しまりあり。
 Va 黒色土 粘質土。明赤色粘土を僅かに含む。
 VIa 黄白色シルト 鉄分が沈着している為、やや赤色から褐色に見える。地山層。
 VIb 乳白色シルト 白色シルト又は粘土主体の層。鉄分の沈着がややある。地山層。

第4図 沢間1遺跡地形及び土層断面図(1)

第2節 検出した遺構と遺物

1 第1面の遺構と遺物

概観

第1面の遺構検出面はⅢa層黒褐色粘質土上面からⅢb層暗褐色砂質土上面で検出されている。Ⅲa層は低地部では概ね20cm程度の厚さで堆積しているが、北側の微高地側にいくに従って徐々に薄くなっている。また、場所によっては下位のⅢb層との区別が付きにくく、第1次調査時（平成12年度）にはⅢ層として一つの層にとらえた経緯がある。このため、第1面としてまとめた遺構の検出レベル及び層位は多少ばらつきが生じている。遺構検出面の標高は平均20.3m～20.5m前後である。

遺構は竪穴住居跡1軒，溝跡1条，畠跡2群，ピット1基である。

1) 竪穴住居跡

SI001（第6・7図，図版3・16）

調査区の北側，3B-07グリッド付近に位置する竪穴住居跡である。検出面はSD002Aと同じレベルであるがⅢb層下位からⅣa層上面である。遺存状況は全体に悪い。主軸方位はN-42°-Wで，北西壁のやや東寄りにカマドをもつ。平面形は方形を呈し，規模は東西2.7m，南北3.1mである。壁は北壁及び南壁の一部をわずかに確認したに過ぎない。検出面からの深さは8cm～14cmである。床は全体に軟質で硬化面がなく，サブトレンチ内での土層堆積状況や下層との土質の違い，遺物の出土レベルなどから判断した。柱穴は検出されていない。断面の観察では壁溝らしい窪みが観察できたが，平面的には検出できなかった。なお，下層には第3面の遺構SD003が存在する。

カマドは中央部から右袖側が残る。袖は暗黄褐色の砂質土，いわゆる山砂を使用して造られている。焚き口付近には焼土や炭化粒，灰などが混じり合った土が堆積している。なお，中央部から左袖側はトレンチ調査の際に削ってしまった。

遺物は土師器の杯・甕類などが217点出土している。そのほとんどを覆土一括で取り上げたが，特に甕類の胴部小破片が多い。また古墳時代前期の土器片も全体の約2割程度混入していた。

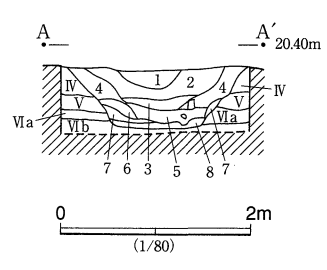
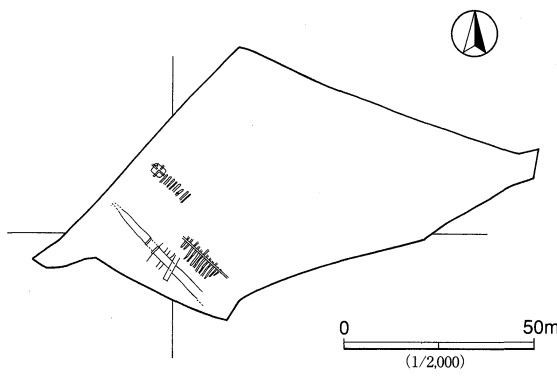
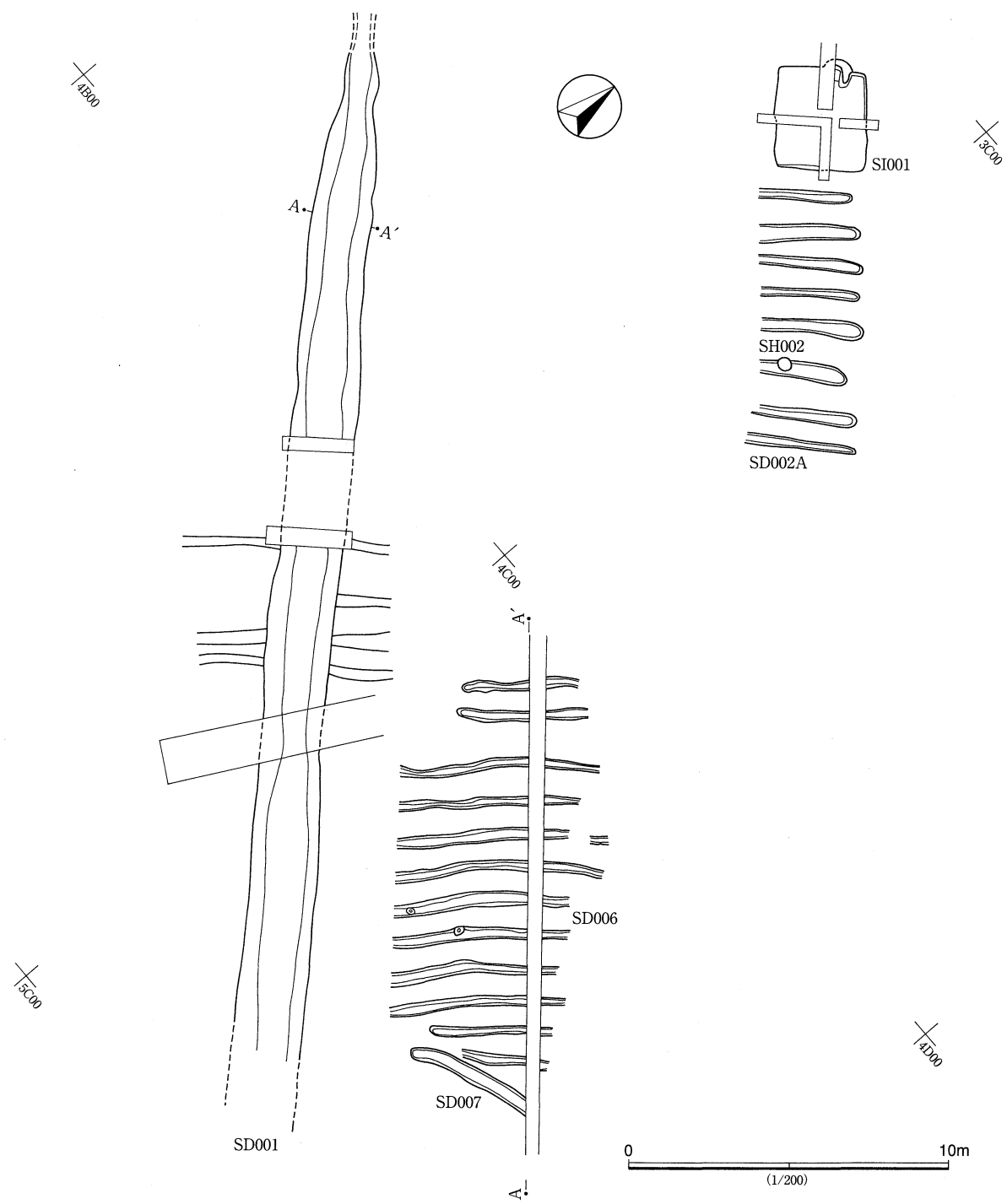
1は土師器杯である。住居中央付近の床面よりやや上で出土した。全体の約1/3が残存する。器形は体部が底部から内湾ぎみに立ち上がり，口縁が直立する。整形は外面体部を横方向のヘラケズリ，口唇部はヨコナデする。内面底部には体部との境に稜をもつ。また，胎土中には白色針状物質がわずかに混入している。推定口径12.5cm，推定底径8.4cm，器高3.9cmである。2は土師器甕の胴部下半の破片である。器壁が薄く，外面は幅の広い工具で縦方向にヘラケズリが施される。3はS字状口縁をもつ土師器甕の口縁部小破片である。口唇部上端が強く屈曲し，胴部との境は刷毛整形の後，角頭状の工具を用いて明瞭な稜を作り出している。口唇部内外面は丁寧なヨコナデされる。胎土は細砂粒を含み緻密である。

本遺構の時期は，1の杯から8世紀後半と考えられる。

2) 溝跡

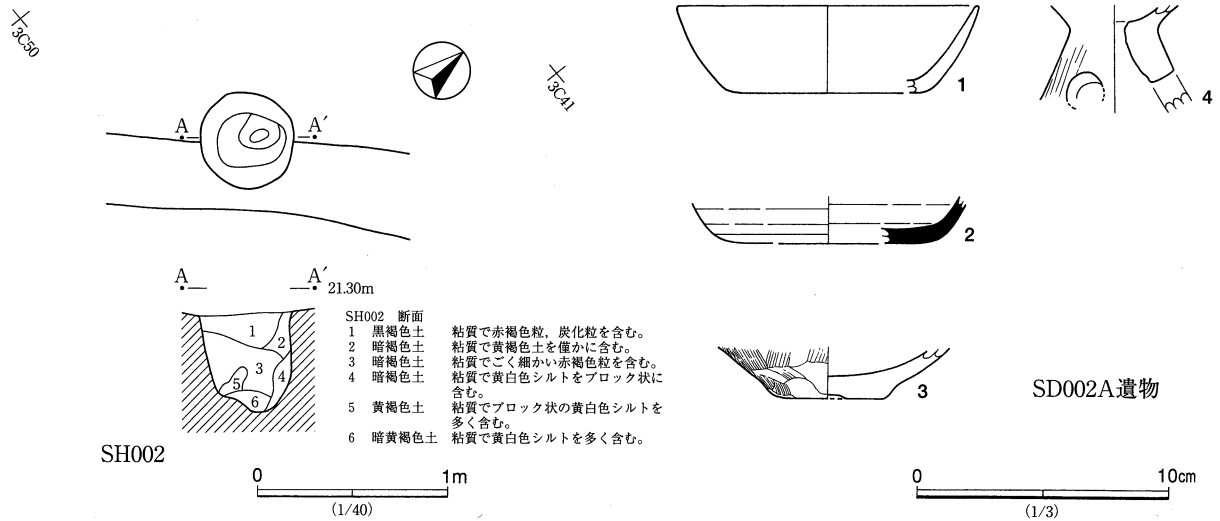
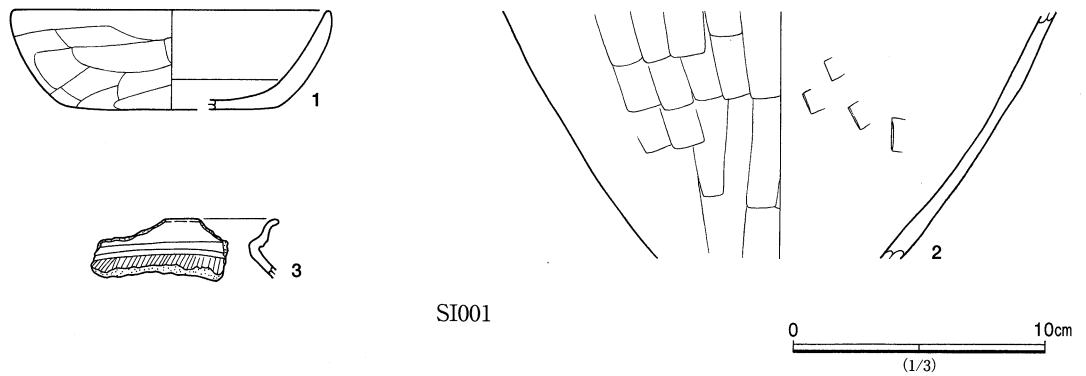
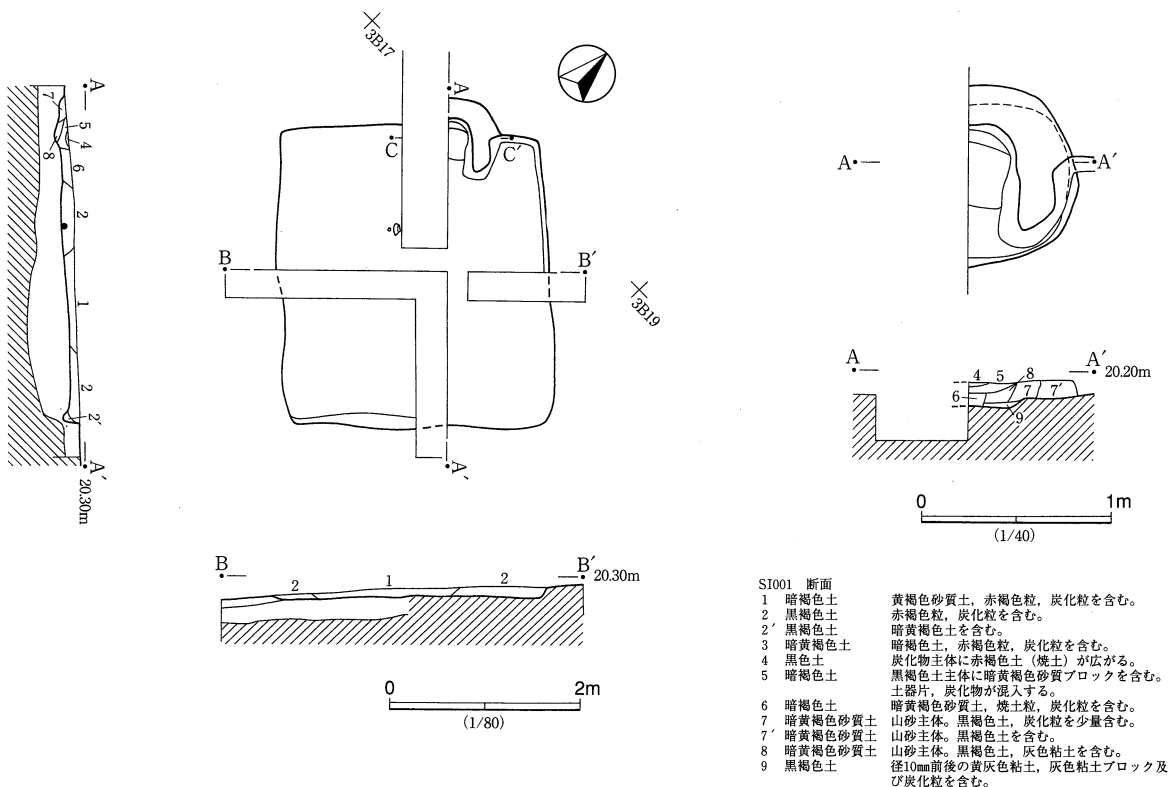
SD001（第6図，図版4）

調査区の南西端を北西～南東方向に延びる溝である。トレンチ調査での土層観察ではⅡa層下部からⅢa層上面で掘り込まれ，底面がⅥb層に達していることを確認していたが，本調査の際やや多めに上位の層



- SD001 断面
- 1 暗褐色砂質土 赤化色粒が僅かに混入する。
 - 2 暗褐色砂質土 1層よりもシルト質。
 - 3 暗褐色砂質土 黄白色シルトとシルト質の暗黄褐色土を僅かに含む。炭化粒が混入する。
 - 4 暗褐色砂質土 シルト質の暗黄褐色土、乳白色シルト、橙色粘土をブロック状に含む。
 - 5 暗褐色土 暗褐色砂質土が主体だが1~4層に比べ粘性がある。黒色粘質土、黄白色シルト、乳白色シルト、橙色粘土の小ブロックを含む。炭化粒が混入する。
 - 6 暗褐色土 シルト質の暗黄褐色土を多く含む。
 - 7 暗褐色土 黒色粘質土を含むため、粘性がある。
 - 8 茶褐色土 粘質土。黄白色シルト、乳白色シルトの小ブロックを含む。

第6図 第1面遺構分布図



第7図 SI001・SD002A・SK002

を除去してしまい、結果的に溝全体を検出したのは3b層上面であった。

溝の幅は北西端で0.8m、南東端で2.16mを測り、南東端に向かって次第に幅広になっていく。検出面からの深さは44cm～75cmと幅があるが、これは検出面の高低差によるものであり、底面自体の掘形はほぼ平坦である。掘り方の断面はほぼ逆台形状で、部分的に立ち上がりの角度が変化している。

遺物は土師器の甕・杯などの破片27点、須恵器杯の底部破片1点が出土している。何れも小片で器種を特定できるものは極めて少なく、図示できるものも無い。

溝の年代は、掘り込まれた層位や出土遺物の様相からみて8世紀後半から9世紀代と思われる。

3) 畝跡

SD002A (第6・7図, 図版3・4・16)

SI001の南東側、3C-30グリッド付近に展開する畝間溝である。溝は南西から北東方向に直線的に掘り込まれており、長さ2.5m～3.5m、幅25cm～60cmの小溝が55cm～95cmの間隔で8条並行する。Ⅲa層を覆土としてⅢb層上位に掘り込まれている。検出面からの深さは4.3cm～12cmである。調査の際にはトレンチを挟んで南西側に位置する小溝群SD002Bに連なる遺構として全体をSD002として扱ったが、土層断面の再検討の結果Ⅲb層とⅣa層に分かれて2面の遺構が存在することが判明し、検出レベルの差が20cm～30cmあり且つ溝の延長もズレがあったため、両者を分離し上層(Ⅲb層)の遺構をSD002A、下層(Ⅳa層)の遺構をSD002Bとした。なお、遺物はSD002一括で取り上げており分離不可能であったため、報告では第1面出土として扱うことにした。

遺物は土器類157点及び礫77点が出土している。土器類の内訳は土師器153点、須恵器4点で、中でも土師器壺・甕類の胴部破片が約7割を占めている。何れも小破片で時期の判別が困難であるが、ほとんどが奈良・平安時代に含まれ、わずかに古墳時代前期のものが混じるといった状況である。

1は土師器杯で、口縁部から底部の一部分を残すのみである。底部から体部が内湾ぎみに立ち上がる器形である。調整は器面が磨滅していてよく分からないが、底部付近にわずかにヘラケズリの痕跡が認められる。推定口径11.9cm、推定底径8.1cm、器高3.4cmである。時期は、底径と口径との差が比較的少なく器高も低いことから8世紀後半と思われる。2は須恵器杯の底部破片である。回転ヘラ切り離しの後底部周縁を回転ヘラ削りする。胎土は緻密で白色粒子が目立つ。推定底径8.2cmである。時期は8世紀後半に相当する。3は土師器器台の脚部である。底面の穿孔は楕円形で、やや雑な開け方である。脚部には2か所の透かし穴が確認される。その位置からみると全体で3か所の透かし穴を持つものと思われる。外面の器面調整は縦方向のミガキが施されるが工具痕が目立つなど全体に粗い印象を受ける。4は土師器の小型甕あるいは小型壺の底部である。成型の際底面部分に粘土を継ぎ足して突出させ、刷毛調整も細部までの手間を省いて雑な仕上げとなっている。底径は4.4cmである。3・4の時期は古墳時代前期に相当する。

SD006 (第6図, 図版4・5)

SD001の北東側に展開する畝間溝である。検出面はⅡa層の下部からⅢa層上面で、淡黄色シルトを含む溝を検出した。淡黄色シルトは検出面にも薄く広がっていた。

溝は北東から南西方向に直線上に掘り込まれ、長さ3.0m～6.5m、幅約0.4m内外、間隔は0.6m～1.1mで12条が並行する。掘り込みはⅢa層上部に達しており、深さ約8cm～10cm、断面はかまぼこ形または逆台形状を呈する。

覆土はⅡa層の暗褐色砂質土に淡黄色シルトが混入した土で、この淡黄色シルトの有無で溝の痕跡を確認した。

遺物は土師器の甕の小片が3点出土している。何れも磨滅しているが時期的には8世紀後半に相当する。

1次調査の際、西側のSD001の壁面でも溝の痕跡が6条程度確認されていることから、本来はもう少し広い範囲、北東側の微高地との境付近からSD001の南西側まで広がっていたと思われる。また、SD002Aとほぼ平行することから同じ畑地を形成していたと見て間違いのないであろう。

SD007（第6図，図版5）

SD006の南東側の溝端で検出された。覆土は灰褐色砂質土でほぼ一様に入っていた。長さ3.9m，幅43cm～48cm，深さ10cm前後である。断面形は上端に向かって開くかまぼこ形を呈する。

4) ピット

SH002（第6・7図）

3C-40グリッドに位置し、SD002Aと重複するピットである。平面形はほぼ円形で、底面の片側がやや深く楕円形に掘り込まれる。径50cm，検出面からの深さは56.4cmである。覆土は暗褐色土が主体で、全体に粘質でしまりが良い土質である。出土遺物は無い。SD002Aの畝間溝を切って掘り込まれるためSD002Aより新しい遺構であるが、時期的には大差ないと思われる。

2 第2面の遺構と遺物

概観

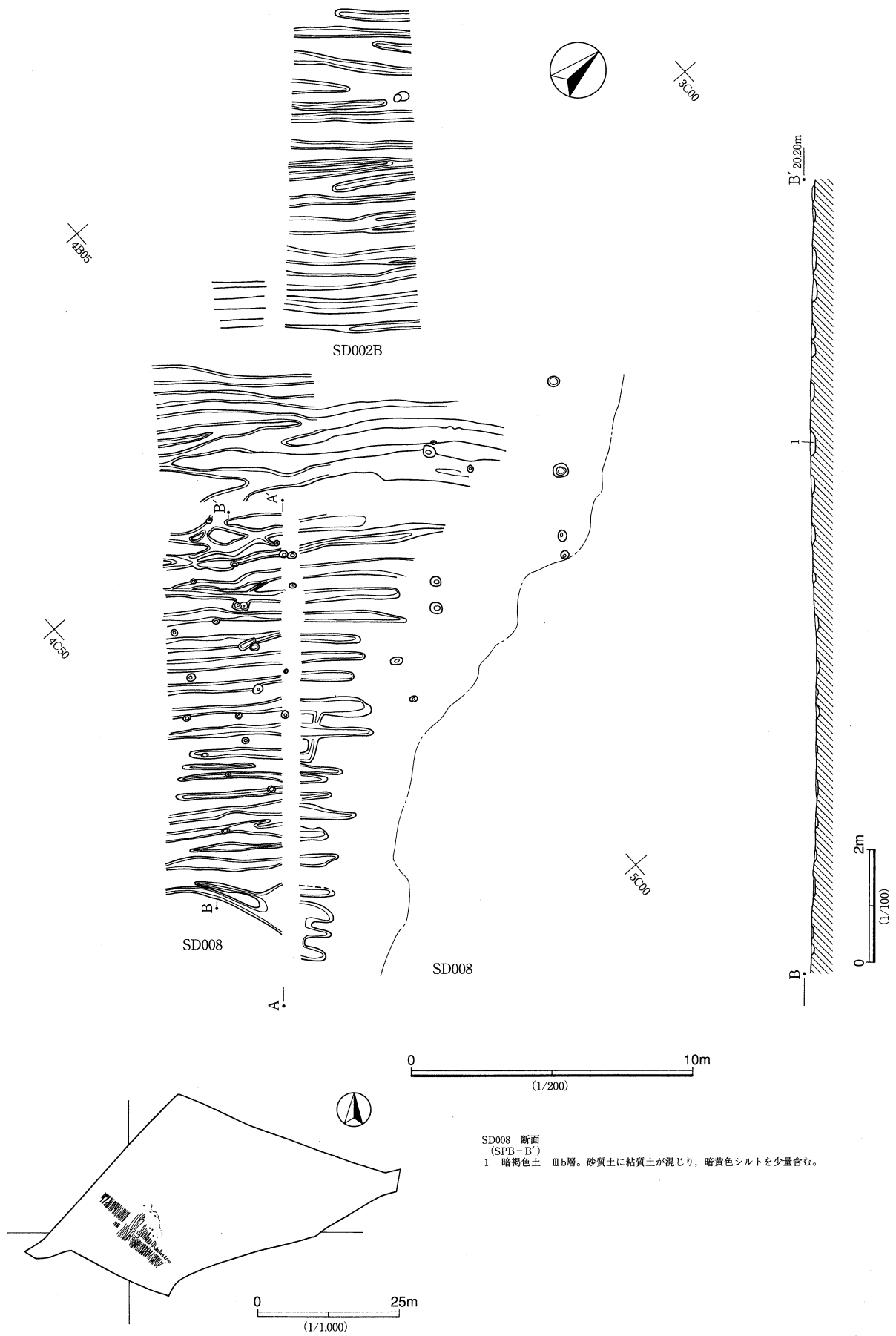
第2面の遺構検出面はⅣa層暗黄褐色シルト及びⅣb層黒褐色粘質土上面を基準とした。従って遺構が掘り込まれた層は厳密に言えばⅢb層中からⅣa層・Ⅳb層上面である。遺構検出面の標高は20.0m～20.4mで、概ね北から南に緩やかに傾斜しており、低地部に暗黄褐色シルト（Ⅳa層）が堆積し、微高地側の緩斜面に黒褐色粘質土（Ⅳb層）が堆積している。

グリッド出土遺物として取り上げた遺物（遺構外で出土した）の多くはⅢb層出土のものである。これらの遺物については本節4で詳述する。

遺構は第一面と同様に調査区南西側の低地部に集中しており、その主なものは畝間溝が並行に群集する畝跡SD002BとSD008である。その他土坑1基，ピット34基，掘立柱建物跡1棟などがある。

土坑とピットの多くは畝間溝を切って掘り込まれることから、新旧関係の上では一応畝跡より新しいものであるが時期的には大差のないものであろう。ピットの多くは小規模なものであったため、精査時にその規模と断面形状，覆土の状況などを調査メモ的に記録し、第9図に示した平面図以外の土層断面あるいはエレベーション図などの作成を省略した。次項で詳述するもの以外は別表により簡略化して報告することにする。また、低地部と微高地部との境付近では焼土・炭化物，炭化材（SX001～SX003）が出土している。

なお、掘立柱建物跡SB001は検出当初から第3面の遺構として調査を行った遺構であるが、精査時に柱穴の一部が調査区境の壁面にかかり再度土層観察を行った結果、柱穴がⅢb層中から掘り込まれていることが判明したため、第2面の遺構として扱うこととした。ただ、上記のような理由で検出から精査及び平面図等の記録を第3面の遺構群と共に行っているため、その詳細については次項で触れることとする。



第8図 第2面遺構分布図(1)

1) 畠跡

SD002B (第8図, 図版3・4)

調査区の南西側, 3B-35グリッドから3B-88グリッドに広がる畝間溝である。先述したように検出した層位とレベル差によりSD002Aと分離したものであり, IIIb層下位から掘り込まれている。

溝は南西から北東方向に直線的に18条から20条並行するが, 複数が重複していたり途切れたりする箇所が認められる。方位はN-40°-Eである。溝の規模は長さ1.4m~4.7m, 幅25cm~62cm, 検出面からの深さは4cm~13cmである。溝の間隔は25cm~70cmと一定していない。溝同士の間隔が詰まる箇所や重複する箇所の検討から2回ないし3回の起耕あるいは掘り返しが行われていたと思われる。

なお, 出土遺物はSD002Aと一括で取り上げてある。

SD008 (第8・11図, 図版6・16)

調査区の南西側, 4C-01グリッドから4C-57グリッドに展開する畝間溝である。検出した層はIVa層上面で, 上位層のIIIb層下位から掘り込まれている。この層はシルトを多く含む砂質土で北西に厚く南東, 北東, 南西に薄く堆積しており, 従って明確に溝がとらえられるのは堆積の厚い北西部分である。溝群の南東側は旧河川に続く傾斜面になり, 川砂が露呈していた。このためこの付近の畑地は河川の影響により流出したものである。

溝は概ね南西から北東方向に直線的に並行するが, SD002Bと同様に複数の溝が重複している箇所も認められる。方位はN-40°-Eである。溝の規模は長さ3.3m~9.1m, 幅25cm~75cm, 検出面からの深さは3cm~10cmである。溝の間隔は24cm~65cmと一定しないが, 平均40cm前後の間隔で並行する。

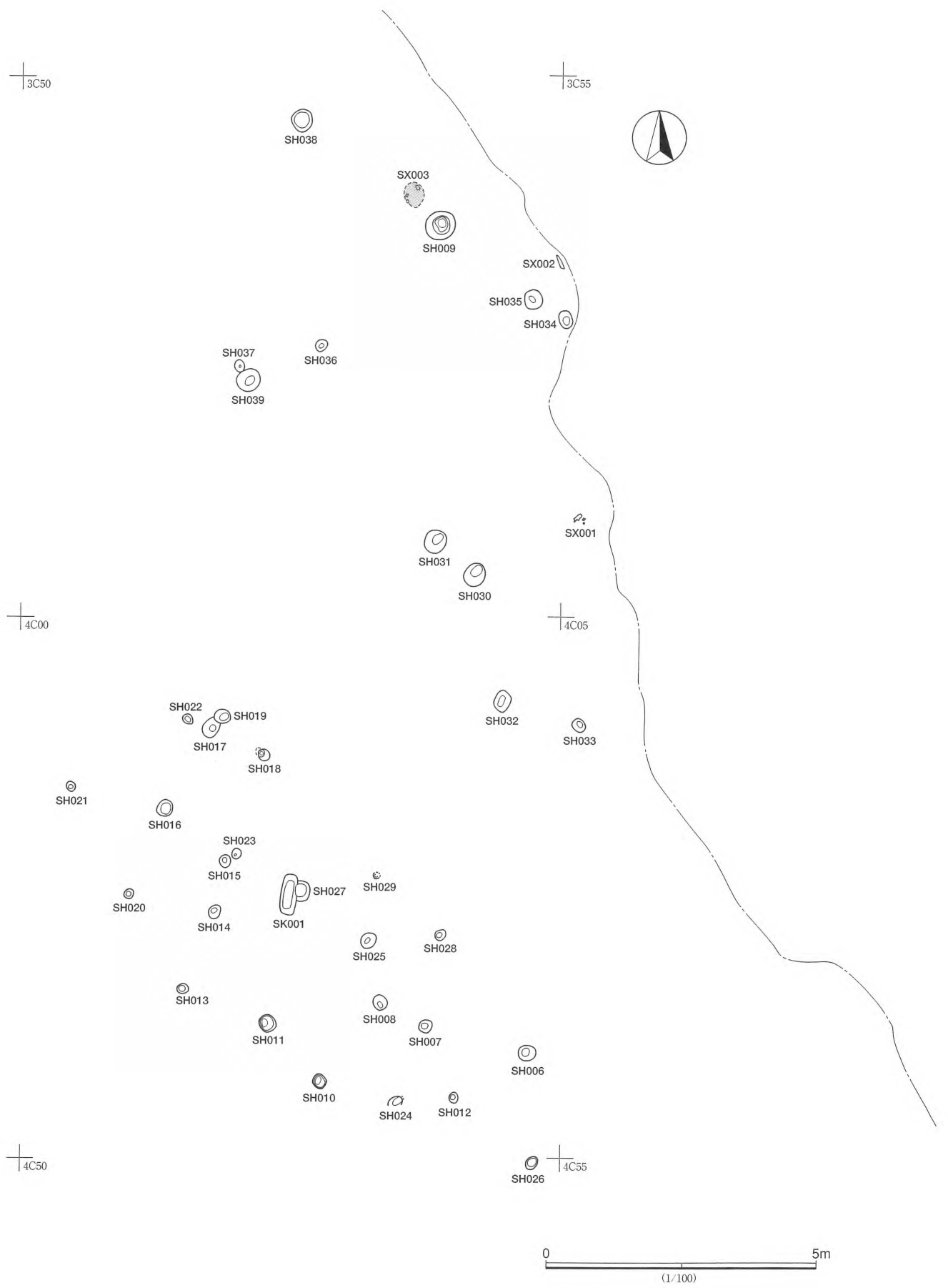
遺物は土器類が162点, 礫が10点出土した。土器類の内訳は弥生土器1点, 土師器が151点, 須恵器が9点で土師器が全体の9割以上を占めている。器種別では土師器, 須恵器ともに壺・甕類の胴部破片が大部分を占めている。何れも小破片で磨滅しており, かつ時期の判別が困難なものが多いが, 傾向としては古墳時代前期と古墳時代後期後半から奈良・平安時代のものに大別でき, 奈良・平安時代のものが最も多く認められる。なお, 須恵器の甕は全体が白っぽく変色していることも特徴の一つである。ただし, 図示できたものは全体でわずか2点である。

1は須恵器蓋杯である。口縁部から体部の約1/5が残存している。口縁部は内外面ともにヨコナデがされている。色調は黄灰色で一部は焼成不良のためにくすんだ黄褐色である。胎土に白色粒をわずかに含む。推定口径11.0cmである。2は須恵器甕または甑の胴部破片である。外面は平行タタキとナデ, 内面はナデがなされる。色調はにぶい褐色で焼成不良である。胎土に白色粒が目立つ。

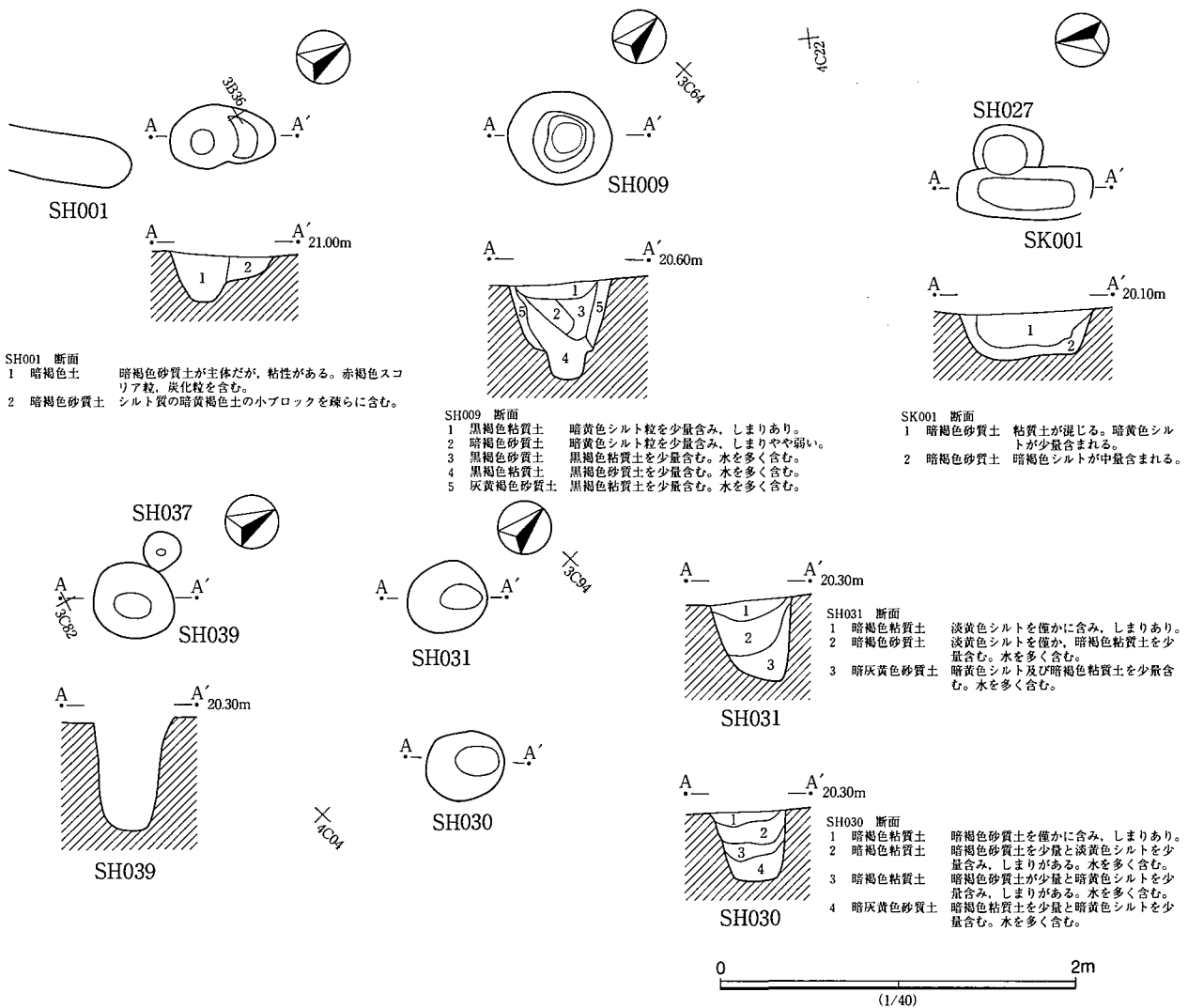
2) ピット

SH001 (第9・10図)

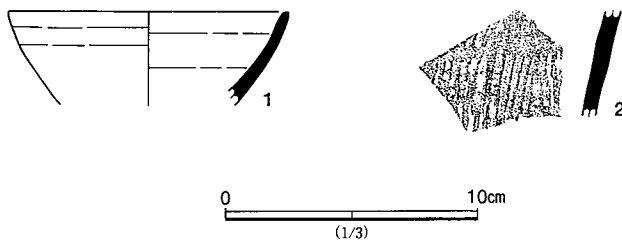
3B-47グリッド, SD002Bの西寄りの溝間に位置するピットである。検出面はIVa層上面である。検出時の平面的な観察や土層断面から2基のピットが重複していることが判明したが遺構番号は一括で扱った。平面的には円形に近いピット(A)が楕円形のピット(B)を切って掘り込まれる。全体の規模は長軸54.5cm, 短軸33.0cmで, Aの深さが29cm, Bの深さが12cmである。覆土はAにIIIa層主体の暗褐色土, BにIIIb層主体の暗褐色砂質土が堆積していることから, Aのピットが第1面から掘り込まれた可能性が高い。遺物は出土していない。



第9図 第2面遺構分布図(2)



第10図 SH001・009・027・030・031・039・SK001



第11図 SD008出土遺物

SH009 (第9・10図, 図版12)

SD008の北側, 3C-63グリッドに位置する。検出面はIVa層上面である。平面形はほぼ円形で長径59cm, 短径53cmである。底面は中央が深く掘り込まれており, 検出面からの深さは55cmである。覆土は, 黒褐色土主体で部分的に炭化粒が混入する。遺物は覆土中から土師器甕の小片が2点出土している。

SH030 (第9・10図)

SD008の北東側, 3C-93グリッドに位置しSH031に隣接する。検出面はIIIb層中である。平面形はやや歪みのある楕円形で長径44cm, 短径38cmである。底面は平坦であるが, 北東側に偏って掘り込まれる。検

表1 第2面ピット一覧表

遺構番号	平面形	規模		断面形	覆土	遺物	備考
		径 cm	深さ cm				
SH006	円形	32~30	34	箱形	黒褐色砂質土に淡黄色シルトが混入	無し	
SH007	円形	25	21	U字形	暗褐色砂質土に淡黄色シルトが少量混入	無し	
SH008	楕円形	30	23	U字形	暗褐色砂質土に粘質土が混入	無し	
SH010	楕円形	30~25	44	U字形	暗褐色砂質土に粘質土と少量の炭化粒が混入	無し	
SH011	円形	32	47	U字形	黒褐色砂質土	無し	
SH012	楕円形	20~18	20	U字形	灰褐色砂質土	無し	
SH013	円形	22~20	40	箱形	暗褐色粘質土に暗黄色シルトが混入	無し	
SH014	楕円形	25	44	U字形	暗褐色粘質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	
SH015	楕円形	25~22	32	U字形	暗褐色粘質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	
SH016	楕円形	30	28	U字形	暗褐色粘質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	
SH017	楕円形	35~30	39	U字形	暗褐色砂質土に暗黄褐色土が混入	土師器小片	SH019と重複
SH018	円形	24~21	36	U字形	暗褐色砂質土に粘質土が混入	土師器小片	
SH019	円形	28~26	18	箱形	暗褐色粘質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	SH017を切る
SH020	円形	20	16	U字形	暗褐色粘質土	無し	
SH021	円形	20	24	U字形	暗褐色粘質土	無し	
SH022	円形	20	22	U字形	暗褐色粘質土	無し	
SH023	円形	20	56	U字形	暗褐色粘質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	
SH024	楕円形	28~18	17	U字形	暗褐色砂質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	
SH025	楕円形	20	33	U字形	暗褐色砂質土に暗黄色シルトが少量混入	土師器小片	
SH026	楕円形	29~24	13	U字形	暗褐色砂質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	
SH028	円形	22	34	U字形	暗褐色砂質土に暗黄色シルトが少量混入	無し	
SH029	(円形)	13	10	U字形	暗褐色砂質土に粘質土が混入	無し	半欠。平面形は推定。
SH032	楕円形	38~31	36	箱形	暗褐色粘質土	無し	
SH033	楕円形	23~20	18	箱形	暗褐色粘質土	無し	
SH034	楕円形	30	15	箱形	黒褐色粘質土	無し	
SH035	ほぼ円形	15	20	箱形	黒褐色粘質土	無し	
SH036	ほぼ円形	21~19	13	箱形	暗褐色粘質土	無し	
SH038	ほぼ円形	43~40	28	箱形	灰黄褐色砂質土	土師器小片	

出面からの深さは39cmである。覆土は粘質の暗褐色土が主体である。遺物は覆土中から壺と思われる土器小片が2点出土している。

SH031 (第9・10図)

SD008の北東側、3C-92・93グリッドに位置しSH030に隣接する。検出面はⅢb層中である。平面形はやや歪みのある楕円形で長径45cm、短径40cmである。底面は030と同様に北東側に偏って、斜めに掘り込まれている。検出面からの深さは47cmである。覆土は粘質及び砂質の暗褐色土が主体である。遺物は覆土中から器種不明の土器小片が2点出土している。

SH039・037 (第9・10図)

3C-71・72グリッドに位置し、SD008北側の畝間溝の一部と重複する。また西端でSH037と接している。IVb層の黒褐色砂質土上面で検出され、畝間溝を切って掘り込まれていることが確認された。平面形はほぼ円形で長径48cm、短径42cmである。底面はほぼ平坦で、しっかりとした掘り方である。検出面からの深さは52cmである。覆土は黒褐色土が主体である。遺物は刷毛目を残す土師器片1点のほか極小片11点が出土している。

隣接するSH037は、平面形がほぼ円形で径22cm、深さ15cmである。覆土は暗褐色粘質土である。

3) 土坑

SK001 (第9・10図)

4C-21グリッドに位置し、SH027及びSD008の中央付近の畝間溝と重複する。IVa層の上面で検出され、SH027及びSD008の畝間溝を切って掘り込まれていることが確認された。平面形は隅がやや丸みを帯びる長方形で長軸87.5cm、短軸30cmである。底面はわずかに起伏が認められ、壁が斜めに立ち上がる。検出面からの深さは25cm～27cmである。覆土は暗黄色シルトが混じる暗褐色砂質土が主体である。遺物は出土していない。

隣接するSH027は、SK001に切られているため全体の形状は定かではないが、径40cm前後のほぼ円形を呈すると考えられる。底面は平坦で、深さ25cmである。覆土は暗褐色砂質土が主体で、遺物は出土していない。

3 第3面の遺構と遺物

概観

第3面の遺構検出面は地山であるVIa層黄白色シルト及びVIb層乳白色シルト上面を基準とした。この地山面は溝SD003の北東側から次第に高さを増して微高地を形成しており、微高地上では地山層の上層に現耕作土あるいは現表土が堆積している。低地部全体の地形は南東から北西方向に延びる溝SD005に沿う面が最も低位であり、この溝を境にして、その北東側と南西側は次第に標高を増している。

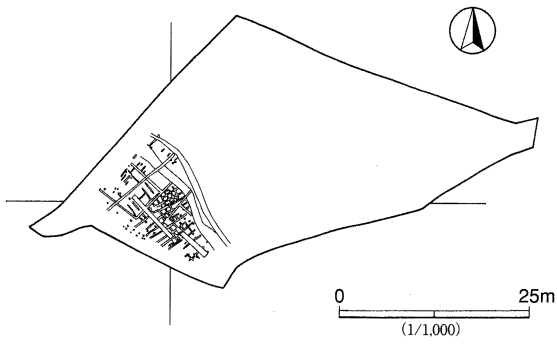
遺構は溝跡3条、畝跡1群、掘立柱建物跡3棟、ピット17基、土坑1基が検出されている。遺構検出面の標高は平均19.80mである。なお、掘立柱建物跡SB001は、土層観察の結果第2面の遺構と考えられるものであるが、前述したように調査時の経緯からこの項で扱うことにした。

1) 溝跡

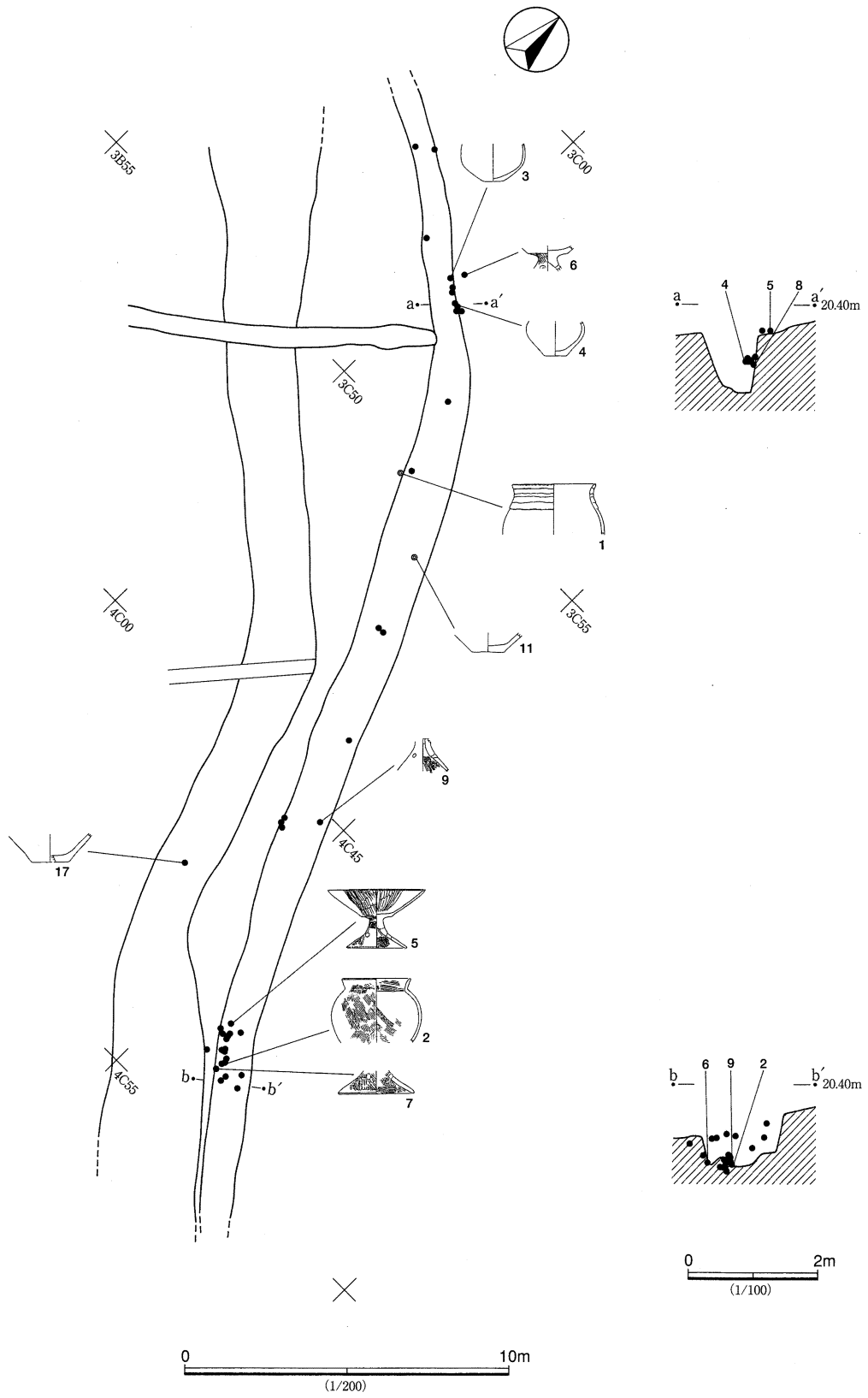
SD003 (第12・13・15・16図, 図版8・16・17)

微高地の縁に位置する溝状遺構で、ちょうど微高地と低地部との境を意識したように北西から南東方向に掘り込まれている。溝の幅は北西端で0.8m、中間部で1.6m、南東端が1.2mで全体的に南東に向かって次第に幅が広がっている。断面は逆台形状で、底面がさらに幅20cm～60cm程の二条の溝になっている。この溝は北西側で一条となるが、この付近では壁の上部で角度をつけ二段に掘り込まれる。検出面からの深さは0.7m～1m前後である。覆土は白色粘土ブロックが斑状に混じる暗褐色粘質土が一様に入っており、一気に埋没したような印象を受ける。

遺物は、合計857点の土器類が出土しているが、その大部分は小破片であり図示できたものは少ない(第



第12図 第3面遺構分布図



第13图 SD003遺物分布图

14図)。土器類の出土層位は、溝底面から上位までまんべんなくあるがどちらかと言えば溝の上位、壁側で出土する傾向にある。また、平面的な分布でみると北西側と南東端にまとまる傾向にある。なお中央部の溝に接した位置から土砂に埋もれたような状況で土師器甕形土器等が出土しているが、これについては次項4のグリッド出土遺物として掲載した。遺構と考えられるような掘り込みは特に検出されていない。

器種の内訳は甕・壺類が全体の約9割を占め、これに高杯など杯類が混じる。これらは、時期的にみると弥生時代終末から古墳時代前期に該当するが、量的には刷毛目調整が施された古墳時代前期のものが圧倒的に多い。図示できた土器は1～11であるが、1の甕は弥生時代後期から引き継がれる形態のもの、5・6、8の高杯類は杯部下端に稜をもつものや脚裾部に加飾されたものなど東海地方の影響を受けた古墳時代前期初頭のものがある。

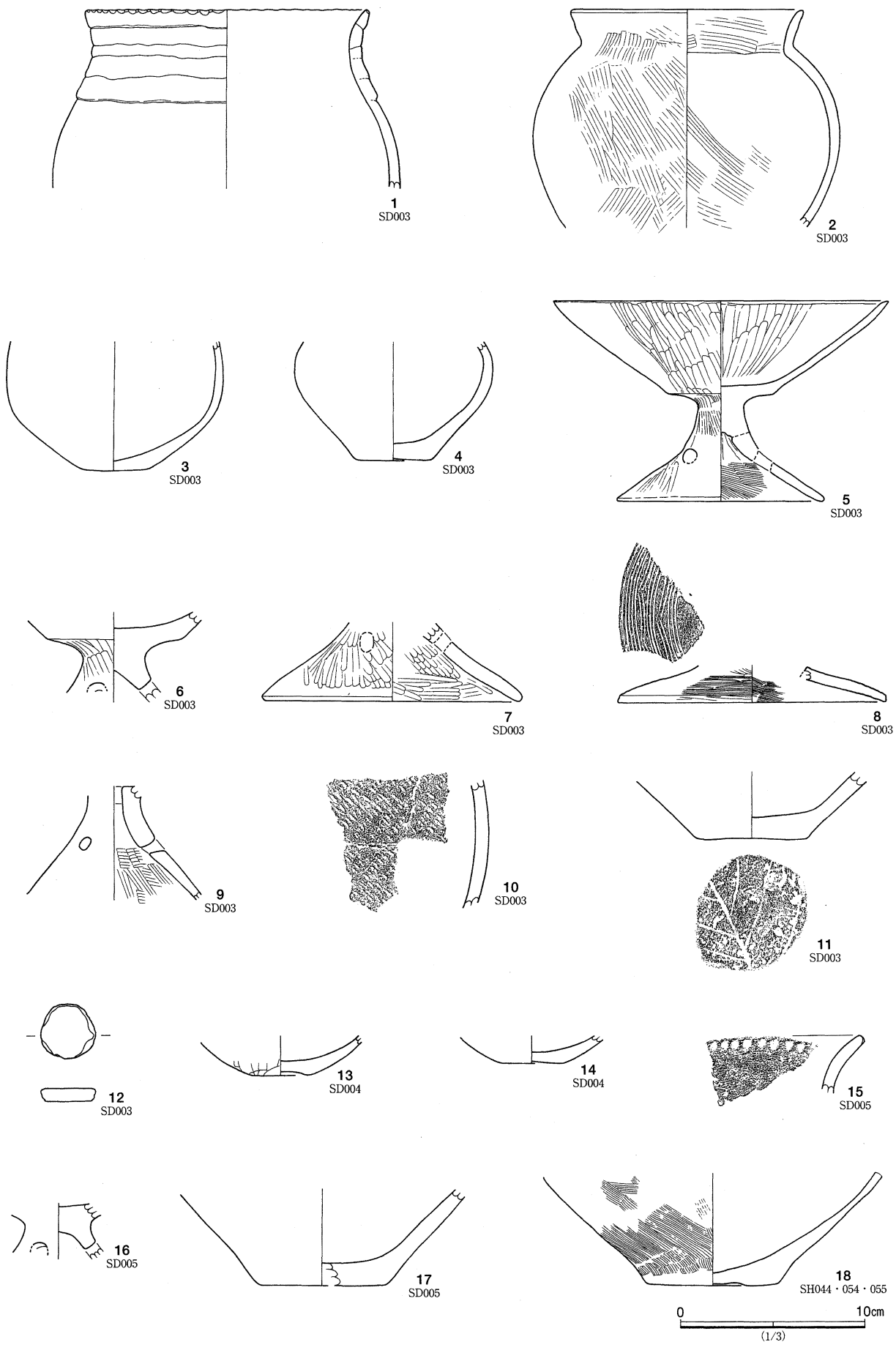
1は口縁部から胴部上位に輪積み痕を残す甕形土器である。全体の約1/4が遺存する。口唇部に浅い押捺を加え、波状口縁を作り出している。器面調整は内外面ともにやや粗いナデがされている。色調はにぶい橙色から橙色で、胎土に砂粒のほかスコリア、白色針状物質をわずかに含む。推定口径15.2cmである。

2は土師器甕で、約1/5が遺存する。球形の張りのある胴部から口頸部がく字状に外反し、口縁部中位はわずかに屈曲する。外面の調整は口唇部をヨコナデ、口縁下端から胴部に粗い縦方向の刷毛目を施し、部分的にナデている。内面は口縁部を横方向の刷毛目胎土は砂粒のほかスコリア、白色粒子を含む。推定口径12.5cmである。

3、4は土師器小型壺である。共に胴部上半を欠く。3は胴部下位に張りを持つ器形で、下膨れ状の胴部から小径の底部に至る。器面調整は、全体に磨滅が著しいためわかりにくいだが、横方向にミガキあるいはナデがなされているような痕跡が認められる。色調は内外面とも赤褐色で、胎土に砂粒のほか雲母を少量含む。現存高6.9cm、底径3.5cmである。4は胴部中位に張りを持ち、緩やかに湾曲して底部へと至る器形である。底部は中央部がわずかに窪む。器面調整は内外面ともヘラナデがなされる。色調は外面が黒色～褐灰色、内面が黒色で、胎土に砂粒が多く含まれる。現存高6.3cm、底径4cmである。

5～8は土師器高杯である。5は全体の約1/2弱が遺存する。体部から口縁部は直線的に大きく開き、底部が強く屈曲する。脚部との境の稜は明瞭である。脚部中位の透かし穴はおそらく3か所になろう。口唇部はそぎ落とされたような平縁が特徴的である。外面の調整は体部全体と脚部下位にヘラミガキ、脚部上位に刷毛目を施し、内面は体部がヘラミガキ、脚部下位に刷毛目が施される。色調はにぶい黄橙色で、胎土に砂粒のほかスコリアが含まれる。推定口径18cm、推定底径11.8cmである。6は体部下端から脚部上位が遺存している。器形は5と同様に体部下端の稜が明瞭に作られている。透かし穴は3か所であろう。脚部との境は丁寧なヘラミガキがなされる。色調はにぶい橙色で、胎土に砂粒のほかスコリア、雲母が少量含まれる。現存高4.8cmである。7は脚部の破片で透かし穴の一部がかろうじて遺存している。裾部端は角頭状に面取りして稜を作り出しており、透かし穴はこれも3か所と思われる。調整は内外面ともに丁寧なヘラミガキがなされる。色調はにぶい黄橙色で、胎土には砂粒が多く含まれる。8は椀型高杯と思われる脚部下端の破片である。大きく広がりを持つ裾部に直線と弧線を組み合わせた文様を加飾する。調整は外面をヘラミガキ、内面は細かな刷毛目が施される。色調は橙色で、胎土に砂粒のほかスコリア、白色針状物が含まれる。

9は器台の脚部破片である。八字状に広がる脚の中段に透かし穴が穿たれる。穴は3か所となろう。調整は器面が荒れていて不明瞭だが、外面裾部と内面に刷毛目がなされている。色調は明褐色から明赤褐色



第14図 SD003 · 004 · 005 · SH054出土遺物

で、胎土に砂粒のほか長石、白色針状物をわずかに含む。現存高6.2cmである。

10は甕の胴部片で、外面調整にタタキ手法が用いられておりこの地域では稀少な例である。タタキ目には繊維を撚った縄文風の痕跡が認められる。色調は外面が明褐色から褐灰色、内面が淡橙色である。胎土は細かい砂粒のほか黒色粒子が目立つ。

11は外面に木葉痕のある甕あるいは壺の底部である。推定底径6.9cmである。12は土器片を丸く整形した土製円板である。直径2.9cm、厚さ6.7mm、重さ6.8gである。

SD004 (第12・14・15図, 図版9・17)

本調査区の北西側を南西方向から北東方向に直線状に延びる溝で、SD003, SD005, SD009の北西側小溝群とそれぞれ重複する。覆土の観察では、交差するいずれの溝よりも後に掘り込まれていることが判明している。北東端はSD003と交わるが、これを横断して微高地端までは延びていない。溝の幅は40cm~62cm、断面は平坦に掘り込まれた底面から壁がほぼ垂直に立ち上がる箱形で、この地域の低地遺跡で多く検出される溝に共通する形態である。検出面からの深さは51cm~69cmで、概ね北東方向に向かって深くなっていく。覆土は白色粘土ブロックを含む暗褐色粘質土が一様に入り、SD003と同様に一気に埋没したような印象を受ける。

遺物は土器片が50点出土している。何れも土師器の壺・甕類の小破片で、部位別に見ると口縁部4、胴部41、底部5点となる。時期的にはすべて古墳時代前期であるが図示できたものは少ない(第14図13・14)。

13, 14は土師器小型埴の底部で、いずれも1/2弱が遺存している。13は、底面の挟りがやや深い形態で周縁に弱いヘラケズリの痕が残る。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が橙色である。胎土は砂粒を多く含む。推定底径2.8cmである。14は磨滅が著しいため調整が不明瞭である。色調はにぶい橙色で、胎土に砂粒を多く含む。推定底径3.4cmである。

SD005 (第12・14・15図, 図版9・17)

本調査区の北東側を北西から南東方向に緩く蛇行して延びる溝である。北西側でSD004に切られている。溝の幅は北西端で3.4m、中央部が1.7m、南東端が3.1mと一定していない。断面は半円状に掘れるが最深部はやや深くなり、北西端で58cm、中央部が45cmである。南東側は端に向かって次第に浅くなり、壁の立ち上がりが不明瞭となる。

覆土は上層に暗褐色粘質土が主体を占め、下層には鉄分が沈着したにぶい暗赤褐色土が堆積している。上層から下層にかけて黒色の未分解質(植物遺体)や帯状に堆積した白色シルト及び鉄分の沈着が観察されたことから、溝全体が流水あるいは滞水していた場所であったことが理解できる。また、前節2項の基本土層図(第5図)で示したように上層にあたるVb層の一部が覆土中に取り込まれていること、溝の幅や深さが一定せず壁面の状況も不明瞭であることなどを考慮すると、この溝が人為的に開削されたものではなく、自然流路であった可能性が高い。なお、後述する畠跡SD009の耕作土Va・Vb層がこの溝の上面を覆うため、SD009より古いものと思われる。

遺物は土器片が37点出土したが小破片が多く図示できたものは少ない(第14図15~17)。器種の内訳は壺・壺類が杯・高杯類より多く全体の約9割を占め、中でも甕・壺類の胴部破片が多い。時期には弥生時代後期から古墳時代前期に該当するが古墳時代前期のものが約8割を占める。

15は甕の口縁部破片である。口唇部に繊維状施文具により押捺を加える。16は高杯の脚部破片で透かし穴の一部が残る。透かし穴は3か所であろう。17の底部は壺であろう。推定底径6.9cmである。

4) 畠跡

SD009 (第12・16図, 図版7・10・11)

本調査区, VIa層上面(第3面)に広がる小溝群で, Va層あるいはVb層の下部からVIa層にかけて掘り込まれている。溝は, 北西から南東方向に並行して延びるものとこれに直交して南西から北東方向に並行に延びるもので構成され, 格子状になっている箇所や部分的に途切れる箇所があり一様な状況ではない。ただSD004の北西側の一角や調査区南東端の一角でも格子状になる箇所があることから, 基本的には格子状に掘り込まれていたと考えられる。これらの小溝群は, 東西方向に延びる一群と南北方向に延びる一群に時期を異にして掘り込まれたものか, 或いは当初から格子状の小区画を意図して掘り込まれたかどうかは, 重複する箇所の土層観察で溝同士の切り合いが認められないため, 判断できない。部分的に途切れる溝も直線的に延びる溝の延長線上にあるとして, つまり1条として換算した場合の溝の条数は, 北西から南東方向のものが9条, これに直交する南西から北東方向のものが23条となる。

溝の間隔は北西から南東方向の溝間が0.9m~1.2m前後, 南西から北東方向の溝間が0.5m~1.4m前後であり概ね溝間1.3m前後の範囲に収まるものが多い。直交する溝で区切られた区画は全体で13箇所あり, 一辺0.9m~1.2mの長方形である。溝の規模は幅20cm~40cm前後, 溝の深さは検出面によって異なるが5cm前後~10cm前後で, 傾向として北東から南西方向の溝の方が掘り込みは深く, 北西から南東方向の溝の方が浅い。底面は場所によって半月状や三日月状の窪みが連続する箇所がある。この窪みは溝の方向に対して直角につけられていて, 耕作に伴う農耕具類の痕跡と認識した。

溝内から出土した遺物は無いが, SD009の覆土を形成するVa及びVb層中からは古墳時代前期に相当する土師器片が出土している。調査区の土層堆積状況の観察ではSD005の覆土を掘り込んでいることが確認されている。SD005は小片ながら古墳時代初頭の土師器が出土しており, SD003とほぼ同じ時期に形成されたと思われる。SD003及びSD005と大差ない時期と考えられる。

5) 掘立柱建物跡

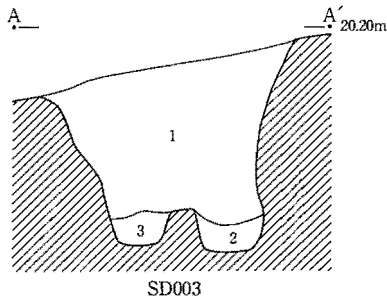
SB001 (第12・17図, 図版7)

調査区南西端の4B-25グリッド付近に位置する。建物は, 桁行3間×梁行2間のやや北に振れる南北棟で, 西側に庇が付く。方位はN-57°-Wである。身舎部分の規模は, 桁行の南側が5.1m, 北側が5.1mである。P2とP3が重複し, P3が後から掘り込まれる。柱間寸法は1.6m~1.8mである。梁行は西側が3.4m, 東側が3.4mで, 柱間寸法は1.65m~1.7mである。柱の通りは梁行西側がやや不揃いであるが, ほかは良好である。庇部分は長さ5.15m, 柱間寸法は1.65m~1.8mである。身舎との柱間寸法は0.8m~1mで, 通りも不揃いである。柱穴は円形状で, 身舎側の柱穴が径38cm~46cm, 深さ19cm~51cmと開きがある。P4とP10は底面が一段窪んでいる。庇側の柱穴は全体に小振りで, 径25cm~33cmである。なお, 庇側の柱穴列の外側にはそれぞれ1基ずつの柱穴が付随する。

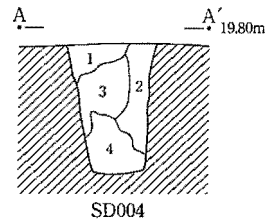
柱穴の覆土は, 暗褐色砂質土あるいは暗黄色砂質土が主体で, 黒褐色粘質土や黄白色シルトが混入する。この覆土は, 第2面の土層に堆積するIIIb層を母体としていることから, この建物を第2面の時期のものと考えたい。なお, 出土した遺物は無い。

SB002 (第12・18図, 図版13)

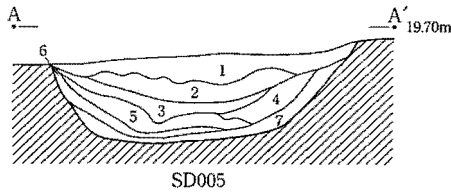
本調査区中央からやや東の4C-12グリッド付近に位置する。建物は桁行3間×梁行2間の南北棟と思わ



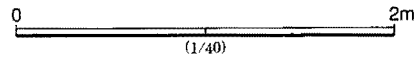
SD003 断面
 1 暗褐色土 粘質土。暗褐色主体の層に径20~30mmの白色粘土ブロックが斑状に入り。鉄分の沈着あり。一気に増え戻したような入り方で分層できない。下半分が暗褐色から褐灰色に変色している。
 2 褐灰色土 粘質土。径30~50mmの白色粘土ブロックが斑状に入る。11トレンチの9b層に当たる。
 3 褐灰色土 粘質土。径50mm内外の白色粘土ブロックが多く入る。11トレンチの9c層に当たる。



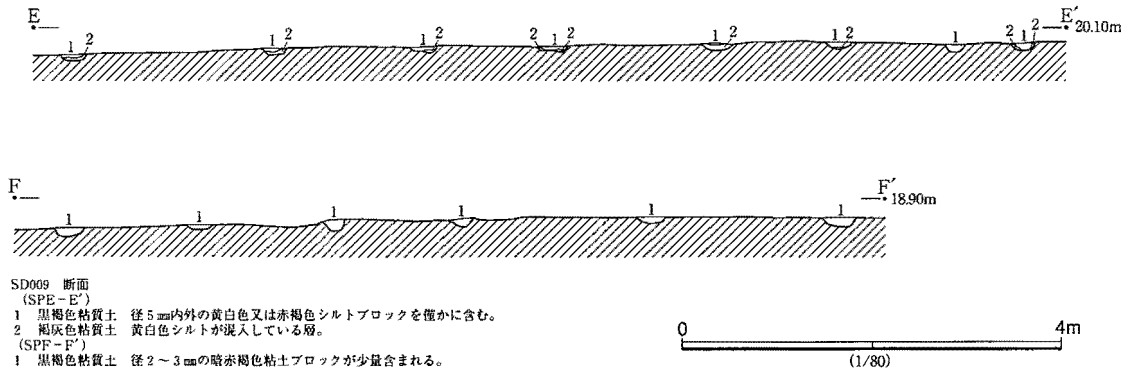
SD004 断面
 1 暗褐色土 粘質土。径10~30mmの白色粘土ブロックが多く含まれる。
 2 暗褐色土 粘質土。径20~30mmの白色粘土ブロックが中量含まれる。
 3 暗褐色土 粘質土。径10mm内外の白色粘土ブロックが僅かに含まれる。
 4 暗褐色土 粘質土。径10~50mmの白色粘土ブロックが多く含まれ。白濁している。
 5 褐色土 粘質土。黄白色シルトが少量含まれ。鉄分の沈着が多い。
 6 白色粘土層 地山。



SD005 断面
 1 暗褐色土 粘質土。径5mm内外の黄白色シルトを少量含み。鉄分の沈着を僅かに認める。
 2 暗褐色土 粘質土。白色シルトが帯状に混入している。黒色の未分解層が少量含まれる。鉄分の沈着が僅かにある。
 3 暗褐色土 粘質土。白色シルトが少量と黒色の未分解層が少量含まれる。鉄分の沈着が増し。やや赤褐色に変色している。
 4 鈍い赤褐色土 白色シルトが多く含まれ。底に鉄分の沈着がある為、赤褐色を帯びる。
 5 暗赤褐色土 白色シルトが帯状に入り。層全体に鉄分が多く沈着している為、粒子が粗く見える。
 6 鈍い赤褐色土 白色粘土が多く入り。粘性が強い。鉄分が沈着して、赤褐色を帯びる。
 7 鈍い赤褐色土 6層に褐灰色粘質土が少量混じる。



第15図 SD003・004・005土層断面図



SD009 断面
 (SPE-E')
 1 黒褐色粘質土 径5mm内外の黄白色又は赤褐色シルトブロックを僅かに含む。
 2 褐灰色粘質土 黄白色シルトが混入している層。
 (SPF-F')
 1 黒褐色粘質土 径2~3mmの暗赤褐色粘土ブロックが少量含まれる。

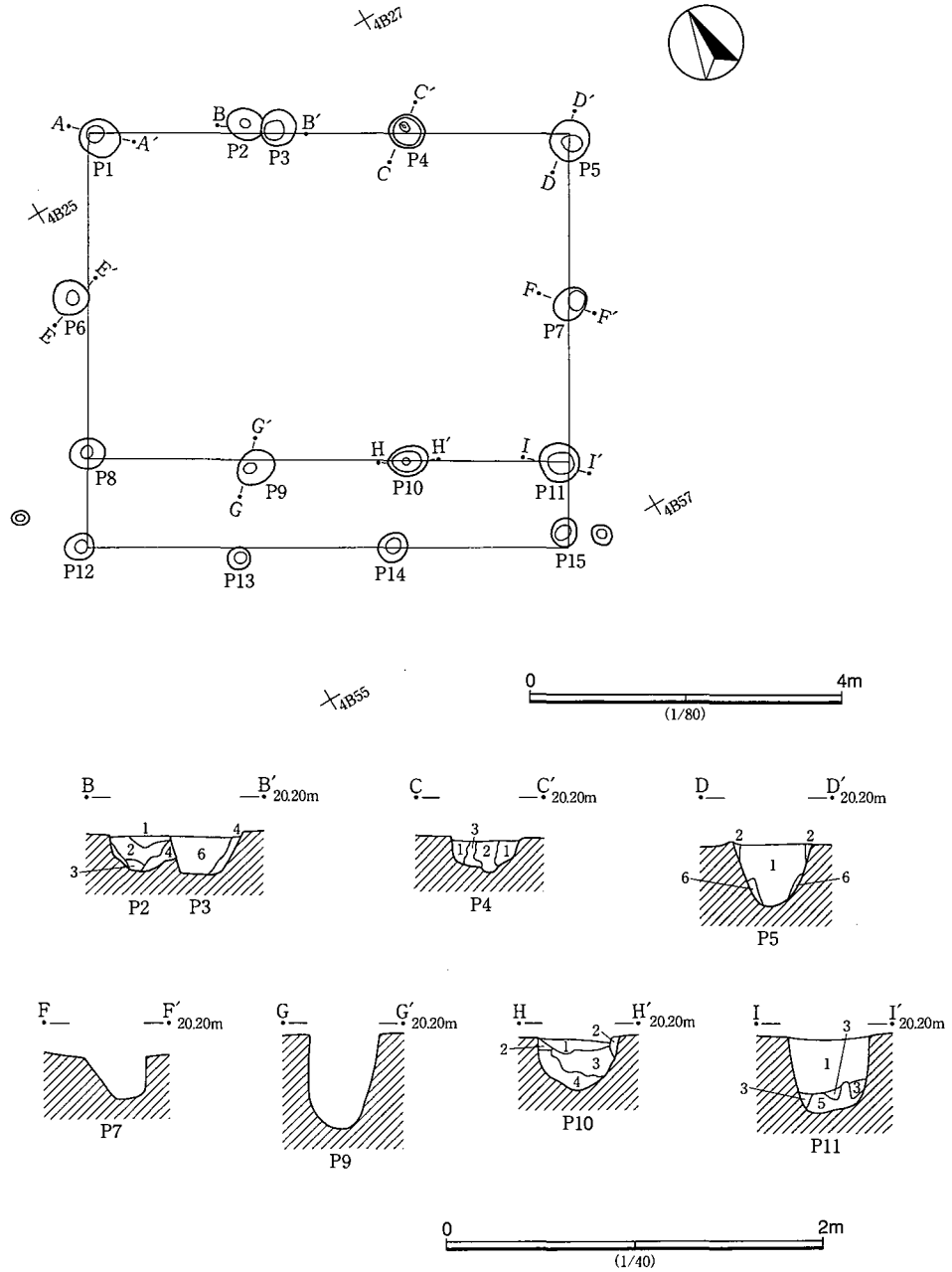
第16図 SD009土層断面図

れる。方位はN-58°-Wである。桁行の北側柱穴列の2基と梁行の東側柱穴列の1基は、SD005と重複しているため認識できなかった。建物の規模は、桁行の南側が4.1m、北側が4.25m、梁行は西側、東側ともに3.5mである。柱間寸法は桁行南側で1.25m~1.5m、梁行西側で1.7m~1.8mである。柱筋は桁行が平行であるが、梁行の西側がわずかに北に振れている。柱穴は円形或いは楕円形状で、径26cm~60cm、深さ26cm~50cmと規模、形状とも一定しない。柱穴の覆土は褐灰色粘質土が主体である。

遺物は、P2とP6の覆土中から1点ずつ土器片が出土しているが、細片のため器種等は不明である。

S B 0 0 3 (第12・18図, 図版13)

本調査区の南東端、4C-54グリッド付近に位置する。SD009よりやや高い、Va層下の鉄分を多く含む



SB001 断面

- (P2・P3)
- 1 暗褐色砂質土 砂質土中に黒褐色粘質土が斑状に混じる。
 - 2 暗褐色砂質土 1層に黄白色シルトを少量含む。
 - 3 暗褐色砂質土 1層に黄白色シルトを中量含む。
 - 4 暗褐色砂質土 1層に黄白色シルトを多く含む。
 - 5 黄白色シルト 地山のシルトが多く混じる。
 - 6 暗褐色砂質土 径10mmの黒褐色粘質土ブロックを僅かに含む。

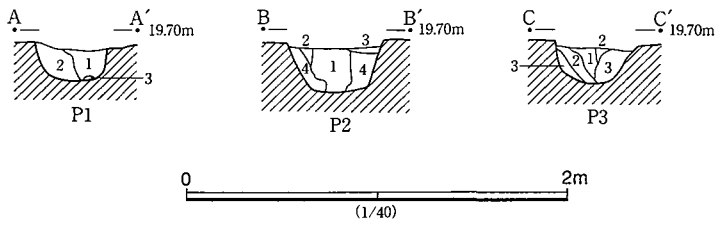
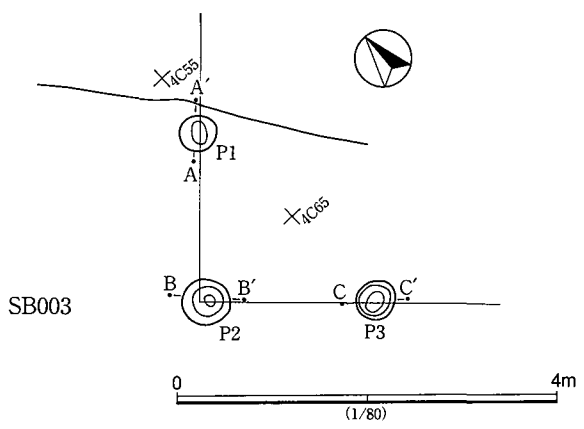
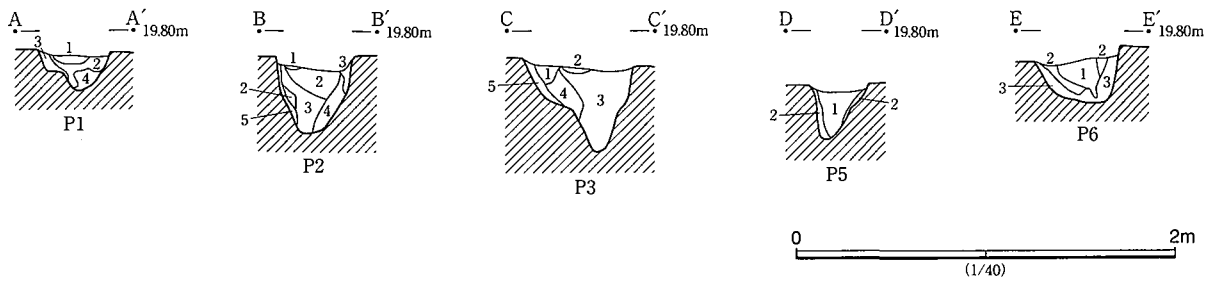
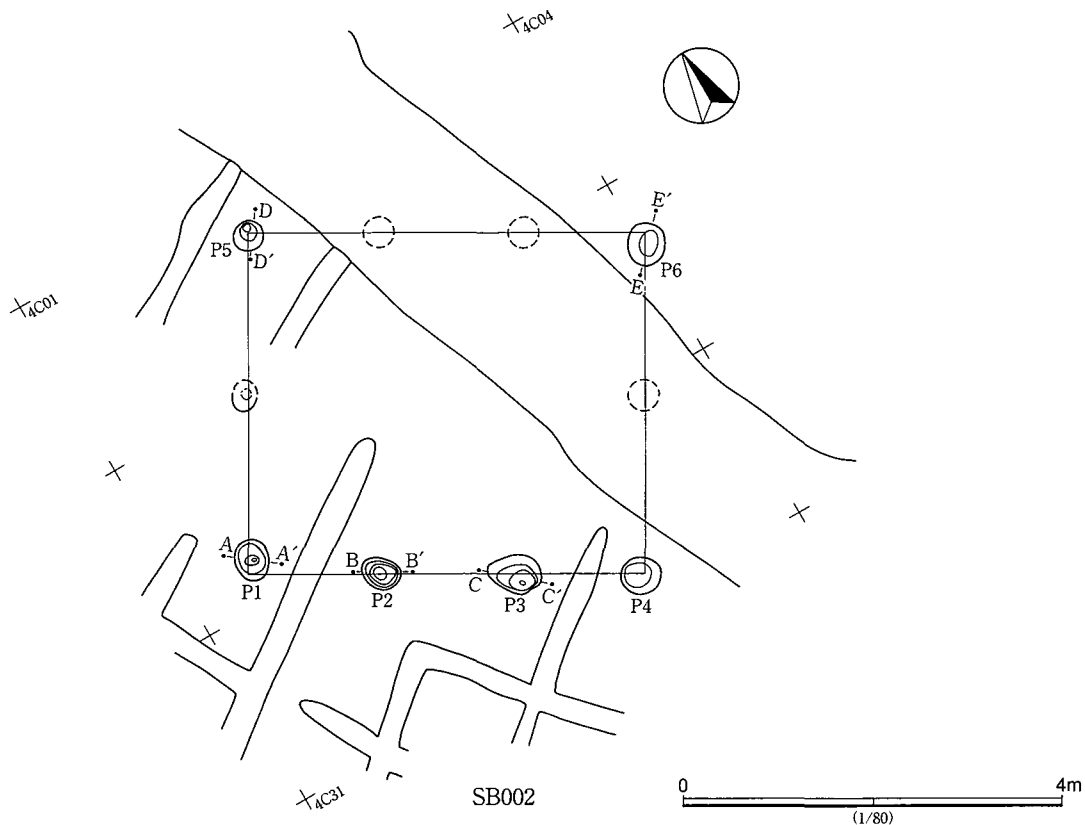
- (P4)
- 1 暗黄色砂質土 黒褐色粘質土、黄白色シルトを僅かに含む。
 - 2 暗褐色砂質土 暗灰黄色粘質土を中量と黄白色シルトを僅かに含む。
 - 3 暗褐色砂質土 暗灰黄色粘質土を多く、乳白色シルトを少量含む。
- (P5)
- 1 暗黄色砂質土 乳白色シルト及び黄白色シルトを少量と黒褐色粘質土を僅かに含む。
 - 2 暗黄色砂質土 黒褐色粘質土を多く含む。
 - 6 暗黄褐色土 乳白色及び黄白色シルトを少量含む。

- (P10)
- 1 暗黄色砂質土 乳白色シルト及び黄白色シルトを少量と黒褐色粘質土を僅かに含む。
 - 2 暗黄色砂質土 黒褐色粘質土を多く含む。
 - 3 暗黄色砂質土 乳白色・黄白色シルトを中量と黒褐色粘質土を少量含む。
 - 4 暗黄色砂質土 乳白色・黄白色シルトを少量と黒褐色粘質土を中量含む。

- (P11)
- 1 暗黄色砂質土 乳白色シルト及び黄白色シルトを少量、黒褐色粘質土を僅かに含む。
 - 3 暗黄色砂質土 乳白色・黄白色シルトを中量、黒褐色粘質土を少量含む。
 - 5 黄白色シルト VIa・VIb層が突起状に出ており、その隙間に暗褐色砂質土と黄褐色粘質土が混入している。

第17図 SB001

面で検出された柱穴群で、柱穴間の位置関係から掘立柱建物跡とした。建物は、北西隅の柱穴が検出されただけで全体の規模、方向は不明である。柱穴はほぼ円形で、径41cm～51cm、深さ21cm～29cmである。柱間寸法はP1-P2間が1.8m、P2-P3間が1.8mである。柱穴の覆土は、IVa層のシルトと思われる黄色シルトが混入している。遺物は、P3の覆土中から土器片1点が出土しているが、細片のため器種等は不明である。



- SB002 断面**
- (P1)
 1 暗黄色シルト
 2 褐灰色粘質土 シルトを少量含む。
 3 暗褐色粘質土 シルトを中量含む。
 4 暗赤褐色粘質土
- (P2)
 1 黄色シルト
 2 暗黄色シルト 褐灰色粘質土を中量含む。
 3 褐灰色粘質土 鉄分の沈着が少量ある。
 4 暗褐色粘質土 鉄分の沈着が多い。
 5 暗赤褐色粘質土 地山の粘土層を斑状に含み、鉄分の沈着が多い。
- (P3)
 1 黄色シルト
 2 暗黄色シルト 白色粘土が斑状に入る
 3 褐灰色粘質土 白色粘土を僅かと黄色シルトを中量含む。
 4 暗褐色粘質土 黄色シルトを多く含む。
 5 暗赤褐色粘質土
- (P5)
 1 褐灰色粘質土 白色粘土を僅かと黄色シルトを中量含む。
 2 暗赤褐色粘質土
- (P6)
 1 暗黄色シルト 褐灰色粘質土を少量と径10mm内外の白色粘土ブロックを僅かに含む。
 2 褐灰色粘質土 径5mm内外の白色粘土ブロックを少量含む。
 3 暗赤褐色粘質土 白色粘土を斑状に含む。
- SB003 断面**
- (P1)
 1 褐灰色粘質土 黄色シルトを微量含む。鉄分の沈着が僅かに見られる。
 2 暗褐色粘質土 2・3層よりしまり弱い。柱痕跡が。
 3 鈍い赤褐色粘質土 1層より灰色が強い。鉄分の沈着が増し、シルトが僅かに含まれる。
 4 鈍い赤褐色粘質土 鉄分の沈着が多い。
- (P2)
 1 褐灰色粘質土 鈍い黄色シルトを少量含む。
 2 暗褐色粘質土 鈍い黄色シルトを中量含む。
 3 鈍い黄色シルト 暗褐色粘質土を少量含む。
 4 鈍い黄色シルト 鈍い赤褐色土を多く含む。
- (P3)
 1 暗褐色粘質土 鈍い黄色シルトに暗褐色粘質土が少量含まれる。柱痕跡が。
 2 鈍い黄色シルト 暗褐色粘質土を僅かに含む。柱痕跡が。
 3 鈍い赤褐色粘質土 鉄分の沈着した黄白色粘土とシルトが混じった層。

第18図 SB002・003

4) ピット

第3面で検出されたピットは、17基を数える。その分布状況は、どちらかと言えば南西から北東方向に延びる溝SD004の付近、本調査区の北西側にまとまる傾向にある。中には建物若しくは柵列を構成するような位置関係にあるピット、例えばSH040～SH044やSH049・SH050・SH052のように列をなすものもあるが、それぞれの規模や掘り方の状況に共通性が少ないことから、そのほとんどが単独に掘り込まれたものであろう。なお、出土した土器片を見ると時期的にもばらつきが認められるため、Ⅲb層或いはⅣa層から掘り込まれたピットも存在する。

SH040 (第19図, 図版12)

SD003の北東側、3C-31グリッドに位置する。平面形はほぼ楕円形で長径39cm, 短径35cmである。底面は平坦で、検出面からの深さは24cmである。覆土は暗褐色粘質土が主体である。遺物は土器片が7点出土している。このうち1点は、外面に粗いヘラナデ痕のある壺の胴部破片で、時期は弥生時代後期と思われる。

SH041 (第19図)

3C-41グリッド, SH040の南西側約1mに位置する。SD003の覆土上面で検出されたピットでSD003より新しい。平面形は円形で、長径31cm, 短径30cmである。底面は中央部が緩やかに窪み、検出面からの深さは13cmである。覆土は粘質の褐灰色土, 暗褐色土である。遺物は土器片3点が出土しているが、器種等は不明である。

SH042 (第19図)

3C-40グリッド, SH041の南西側約1.3mに位置する。平面形はやや歪んだ楕円形で、長径40cm, 短径35cmである。底面の片側に細長い窪みがあり、検出面からの深さは13cmである。覆土は暗褐色粘質土が主体である。遺物は出土していない。

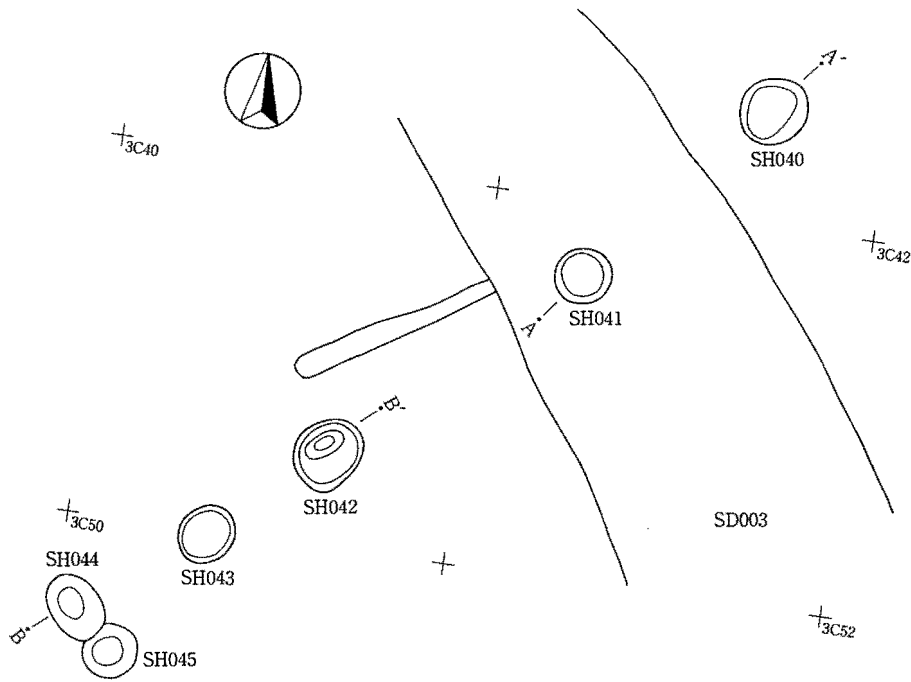
SH043 (第19図)

3C-40・41グリッド, SH042の南西側約0.4mに位置する。平面形はほぼ楕円形で、長径33cm, 短径29cmである。底面は平坦で、検出面からの深さは11cmである。覆土は暗褐色粘質土が主体である。遺物は外面に刷毛目のある土師器甕の胴部小破片が1点出土している。時期的には古墳時代前期である。

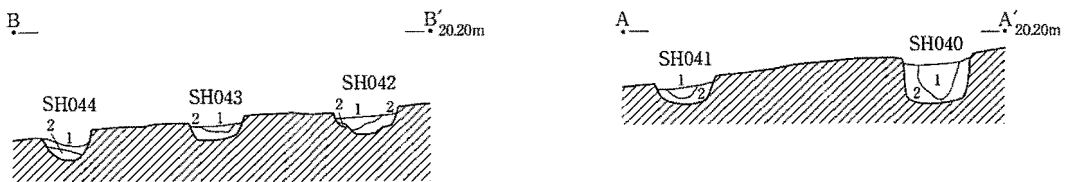
SH044・SH045 (第19図)

3C-50グリッド, SH043の南西側約0.5mに位置し, SH045と重複する。二つのピット共Ⅵa層を掘り込んでおり覆土に差がないため、ほぼ同時期のものと思われる。SH044の平面形はやや長い楕円形で、長径37cm, 短径26cmである。底面は中央で緩やかに窪み、検出面からの深さは15cmである。覆土は粘質の暗褐色土が主体である。覆土中から甕の底部片が1点出土し、これがSH054とSH055出土の土器片とそれぞれ接合した(第14図18)。破片の主要な部位はSH054の壁にへばりつくような状態で出土している(図版12)。SH054は北に約8m, SH055は南に約10mと離れた位置にあり、それぞれ単独のピットである。3基のピットは、規模や形態に共通性が無くそれぞれの関連性は考えにくい。ただ、検出面が同じで、SD003とSD005の2条の溝の間に北から南に溝に沿って位置していることから、あるいはこれらの溝を介在として土砂とともに運ばれた(流れた)土器片がそれぞれのピットの覆土中に混入したのかもしれない。

第15図18の甕底部は、全体的に磨滅しているが外面には斜め方向の刷毛目調整が認められる。器形は胴部が球形に大きく張る形態の甕になろう。残存部上端の破断面の一部が磨滅して丸みを帯びている。色調



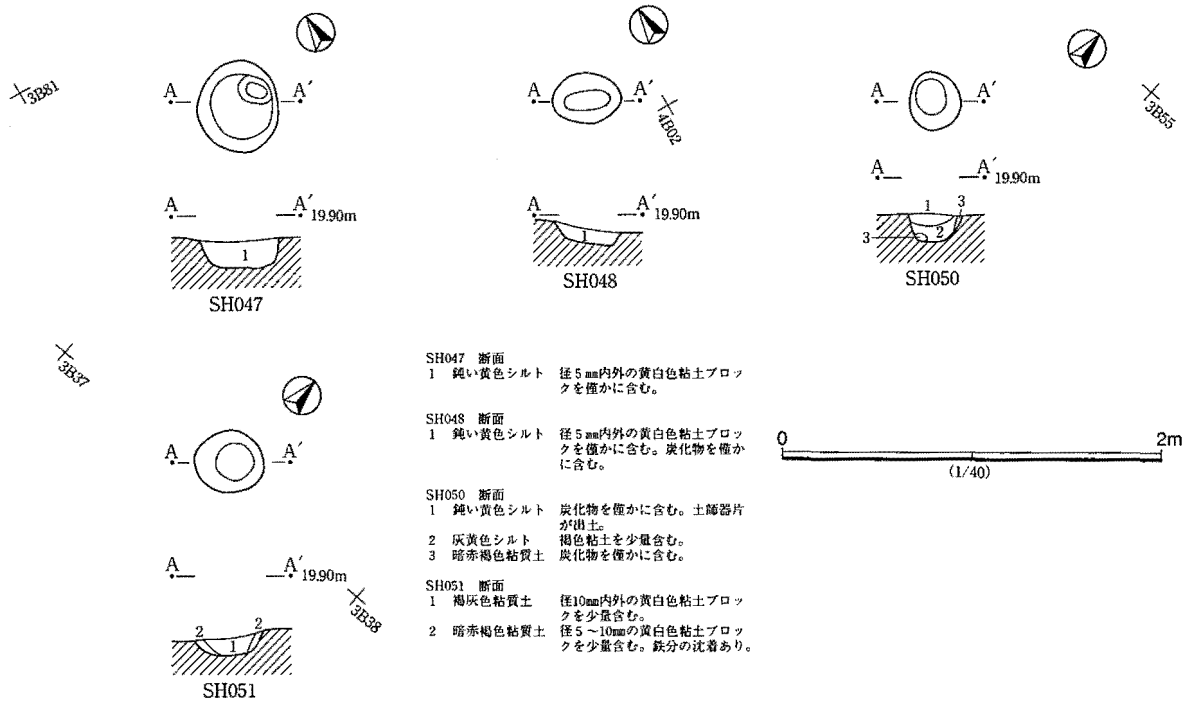
SH040~SH045



- SH044 断面**
 1 暗褐色粘質土 径5mm内外の白色粘土ブロックを僅かに含む。
 2 暗褐色粘質土 径5mm内外の白色粘土ブロックを少量含む。
- SH043 断面**
 1 暗褐色粘質土 白色粘土を僅かに含み、鉄分の沈着あり。
 2 暗褐色粘質土 白色粘土を多く含む。

- SH042 断面**
 1 暗褐色粘質土 暗黄色シルトが少量含まれる。
 2 暗褐色粘質土 地山の白色粘土が多く含まれる。
- SH041 断面**
 1 褐灰色粘質土 鉄分の沈着あり。
 2 暗褐色粘質土 鉄分の沈着あり。

- SH040 断面**
 1 黒褐色粘質土 赤褐色粒を少量含む。
 2 暗褐色粘質土 鉄分の沈着が斑状に入る。



- SH047 断面**
 1 鈍い黄色シルト 径5mm内外の黄白色粘土ブロックを僅かに含む。

- SH048 断面**
 1 鈍い黄色シルト 径5mm内外の黄白色粘土ブロックを僅かに含む。炭化物を僅かに含む。

- SH050 断面**
 1 鈍い黄色シルト 炭化物を僅かに含む。土師器片が出土。
 2 灰黄色シルト 褐色粘土を少量含む。
 3 暗赤褐色粘質土 炭化物を僅かに含む。

- SH051 断面**
 1 褐灰色粘質土 径10mm内外の黄白色粘土ブロックを少量含む。
 2 暗赤褐色粘質土 径5~10mmの黄白色粘土ブロックを少量含む。鉄分の沈着あり。

第19図 SH040・041・042・043・044・045・047・048・050・051

はにぶい橙色で、胎土に砂粒を僅かに含む。現存高6.1cm、底径7.1cmである。なお、SH054覆土内からは同一個体と見られる胴部の破片も60点ほど出土しているが、何れも小片が多く復元できなかった。

SH045は、径30cmのほぼ円形のピットで、検出面からの深さは12cmである。

SH047 (第19図)

SD004の北側、3B-81グリッドに位置する。平面形はやや歪みのある楕円形で、長径49cm、短径43cmである。底面は概ね平坦で、検出面からの深さは16cmである。底面北東隅に長径19cm、深さ8cm程の小ピットが穿たれる。覆土はシルト質のにぶい黄色土が主体である。遺物は出土していない。

SH048 (第19図)

SD004の北側、4B-01グリッドに位置する。平面形は長楕円形で、長径36cm、短径27cmである。底面は南側から北側に緩やかに傾斜する。検出面からの深さは9cm～7cmと浅い。覆土はシルト質のにぶい黄色土が主体で、炭化粒を僅かに含んでいる。遺物は出土していない。

SH050 (第19図)

SD004の北側、3B-54グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長径31cm、短径27cmである。底面は平坦で、検出面からの深さは16cmである。覆土はシルト質のにぶい黄色土、灰黄色土が主体である。遺物は覆土中から土師器甕の小片が2点出土している。うち1点は口縁部破片で、その特徴から古墳時代後期末頃のものと思われる。

SH051 (第19図)

SD005の北東端、3B-27グリッドに位置する。平面形はやや歪みのある円形で、長径37cm、短径34cmである。底面は中央部で緩やかに窪み、検出面からの深さは11cmである。覆土は粘質の褐灰色土、暗赤褐色で、共に黄白色粘土がブロック状に混入する。遺物は出土していない。

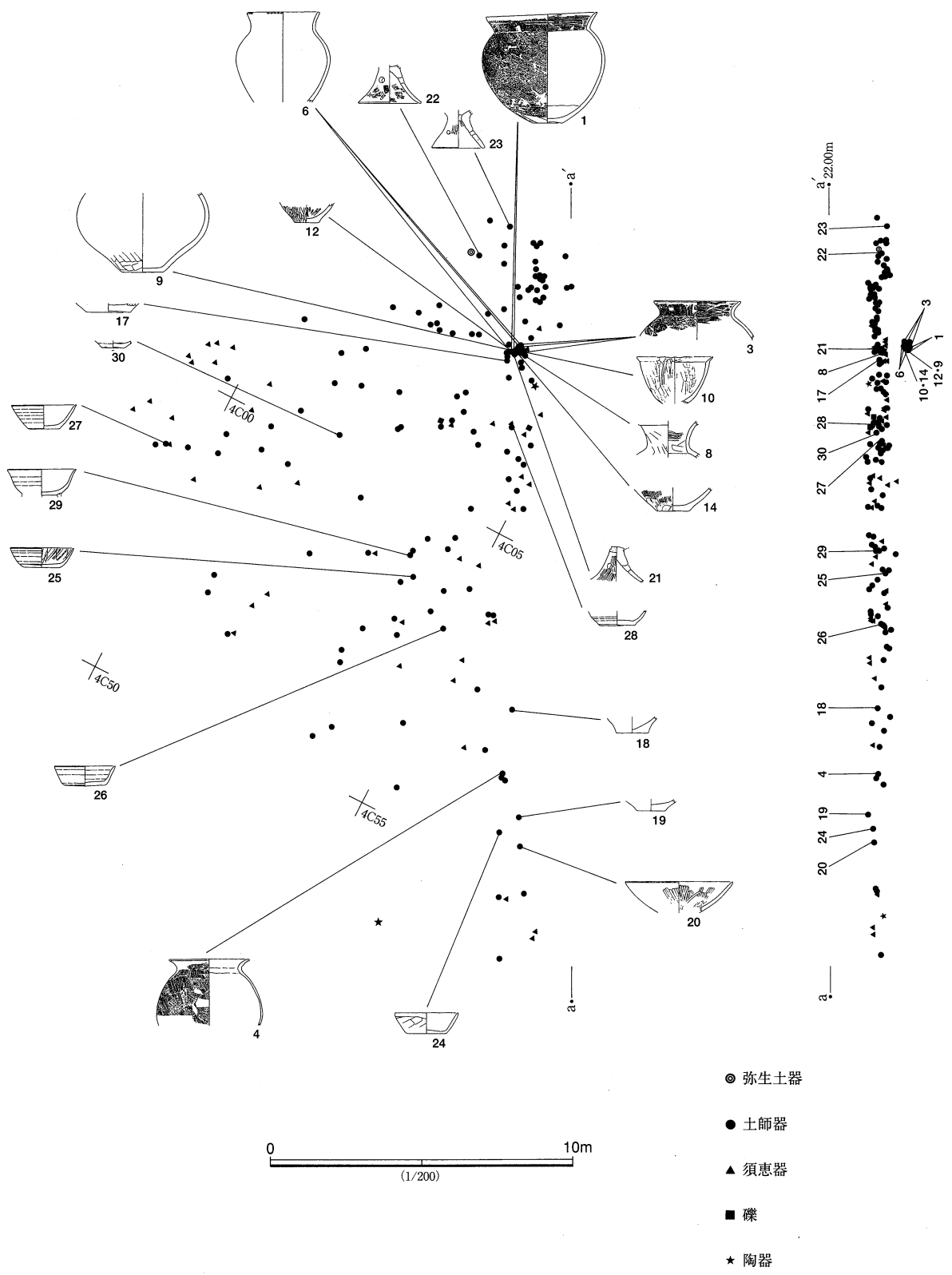
4 遺構外出土の遺物

1) グリッド出土遺物 (第20～23図, 図版17～20)

グリッド出土遺物として扱った遺物は、前項までの既述では第1面から第3面までの間に遺構外から出土した遺物ということになるが、層位から見るとⅡa層からⅤb層(Ⅵa・Ⅵb層上面)出土のものである。中でも主体を占めるのは、第2面上位層にあたるⅢa層～Ⅲb層出土のものである。

これを数量的に見ると全体では2,823点が出土しており、内訳は土器類が2,668点、礫・瓦片・支脚片などその他が155点である。土器類の内訳は弥生土器30点、土師器2,499点、須恵器141点、陶磁器類6点であり、器種別では土師器類、須恵器共に甕・壺類が全体の約7割強を占めている。

遺物のグリッド毎の分布状況では、本調査区中央から東側3C-93グリッド付近を中心に半径7～8mの範囲と本調査区北側3B-28グリッドの付近の大きく二つの分布域が認められる。いずれも場所的には微高地から低地部に下がった辺りで、特に3C-93グリッド付近では東西横断面の地山レベルが最も低い部分にあたっている。また、遺構検出面及び遺構との関係では、3C-93グリッド付近は第2面で見ると畠跡SD008とその北東側のピット群や焼土・炭化材が検出された辺りの上層及び第3面SD003の中央部付近にまとまる傾向にある。一方北側3B-28グリッドの付近では第3面SD003の東側壁沿いにまとまる傾向がある。なお、グリッド出土の遺物については、比較的まとまった出土傾向にあった3C-93・94グリッド付近以外の場所はグリッド及び層毎に一括で取り上げている。



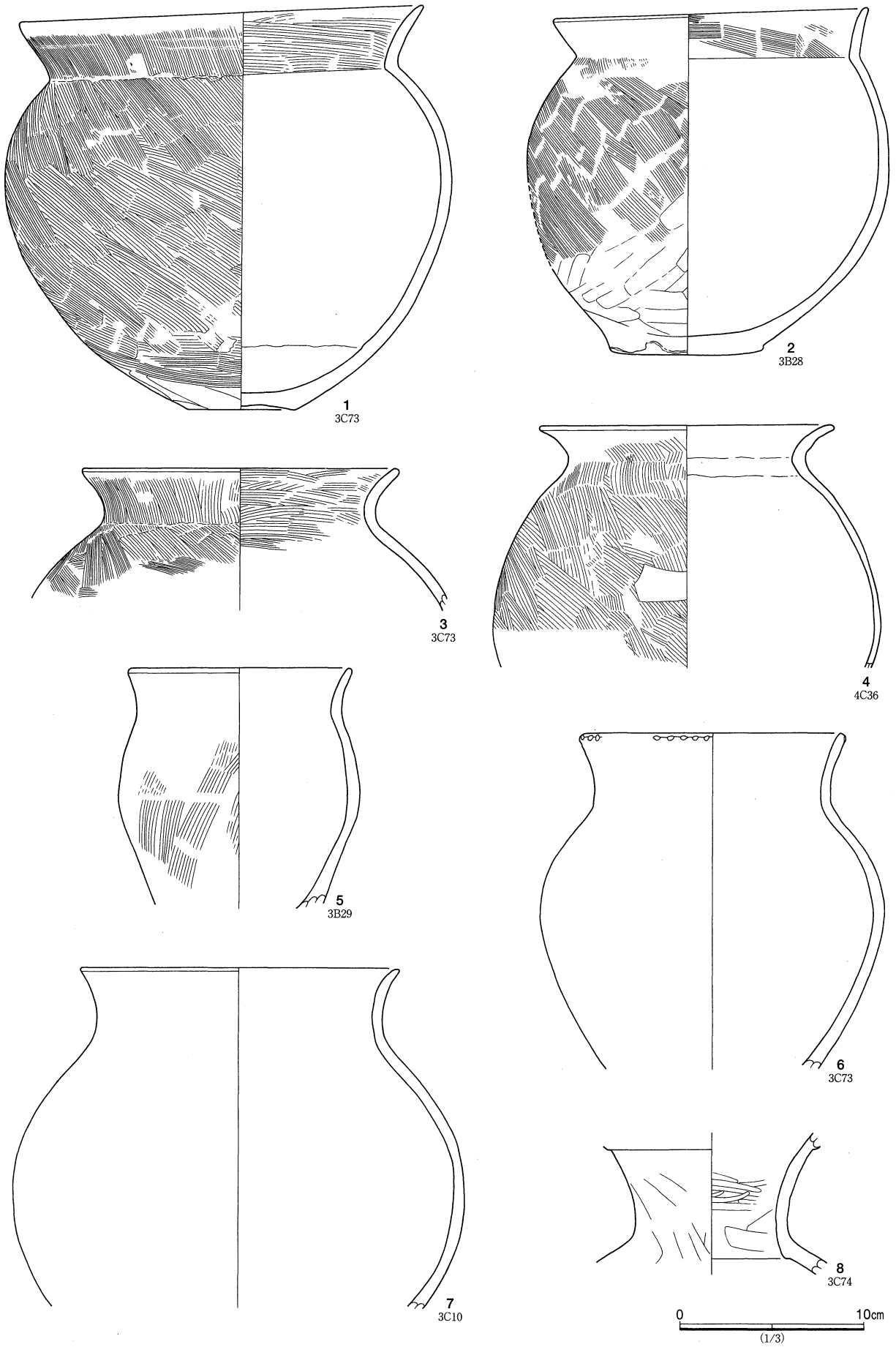
第20図 第2面～3面遺物分布図

図示できたものは第21図～23図に示した30点で、このうち1・3・6・9・10・12・14の7点はⅥb層上面SD003の溝脇から出土し、7・18がⅤa層、4・8・21・22・26がⅣa層、17・25がⅢb層、27・28がⅢa層、29・30がⅡa層でそれぞれ出土した。また、その他10点の土器についてはグリッド一括で取り上げているため正確な出土層位は不明である。

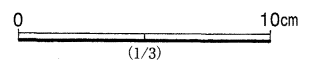
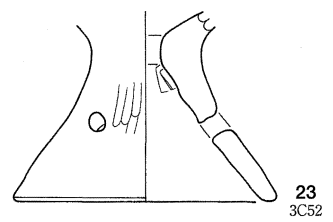
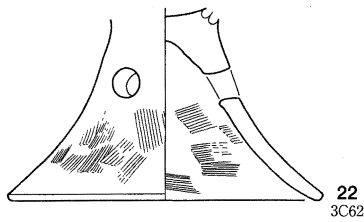
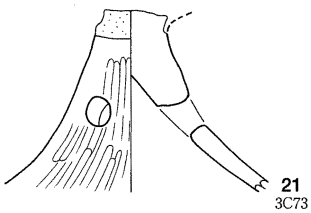
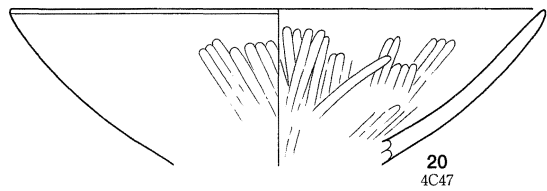
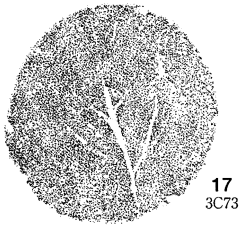
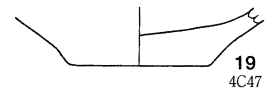
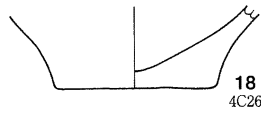
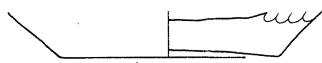
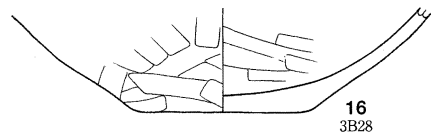
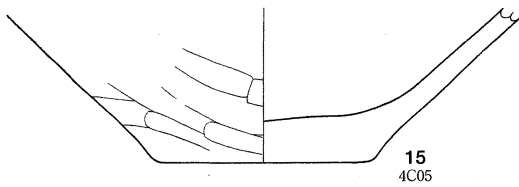
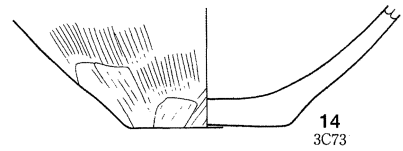
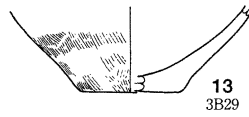
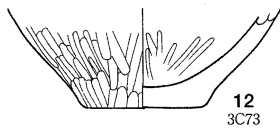
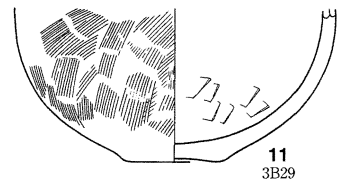
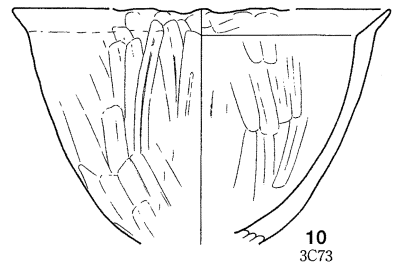
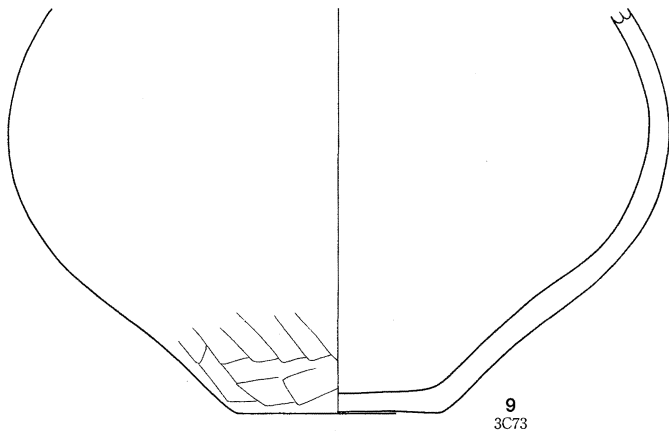
1～7は土師器甕である。1はほぼ完形で、球形の張りのある胴部から口頸部がく字状に外反する。胴部中位に径9mm程の孔が開く。焼成後に穿孔されたものだが、形がいびつで粗く打ち欠かれたように見える。外面の調整は口唇部をヨコナデ、口縁部は縦方向、胴部は斜め方向の刷毛目を施し、部分的にナデている。内面は口縁部を横方向の刷毛目を施し、胴部は全体にナデ調整である。外面の色調はにぶい褐色で、底部付近は黒くなっている。胎土は砂粒を多く含む。口径21.8cm、底径5.8cm、胴部最大径24.0cm、器高21.5cmである。2は口縁部から胴部の約1/2を欠く。口縁部から底部にかけて全体に歪んだ器形で、口縁部や胴部、突出する底部など整形が雑である。器面の調整は外面胴部を斜め方向の刷毛目、下端にヘラナデがなされる。内面は口縁部に横方向の刷毛目を施し、胴部はナデられる。胎土に砂粒の他石英粒を僅かに含む。口径16.9cm、底径8.2cm、器高18.4cmである。3は口縁部から胴部上端が1/4程度遺存している。口縁部は緩やかに外反する。調整は刷毛目が主体で、胴部内面はナデがなされる。外面色調は明晰褐色で、胎土に砂粒を多く含む。推定口径17.1cm、現存高7.7cmである。4は口縁部から胴部の約1/4が遺存している。口縁部は大きく開きぎみに外反する。外面の調整は、口唇部ヨコナデ、口縁下端から胴部に粗い刷毛目を施す。内面はナデ調整されるが、全体に磨滅して調整痕が不明瞭である。色調は全体に灰白色から黄褐色に変色し、胎土に砂粒を含む。推定口径15.8cm、現存高13.1cmである。5は口縁部から胴部の約1/5が遺存している。胴部の張りが少ない器形で、口縁部が直立ぎみに僅かに外反する。調整は全体に磨滅が著しく不明瞭だが、胴部外面に僅かに縦方向の粗い刷毛目が認められる。色調はにぶい橙色で、胎土に砂粒を含む。口径推定12.1cm、現存高12.9cmである。6は口縁部から胴部の約1/3が遺存している。胴部上位に張りを持ち、口縁部は直立ぎみに立ち上がり緩やかに外反する。口唇部には浅い刻み目が施される。調整は器面全体が磨滅して不明瞭だが、口縁部は縦方向、胴部は斜め方向の刷毛目或いはナデが僅かに認められる。色調はにぶい橙色で、胎土に砂粒を多く含む。推定口径14.4cm、現存高18.1cmである。7は口縁部から胴部の約1/3が遺存している。丸みのある胴部から口縁部が緩やかに外反する。調整は内外面共に横或いは斜め方向のナデがなされる。外面の色調は黒褐色及び暗赤褐色で、胎土に細かい砂粒とごく僅かに白色針状物質を含む。推定口径17.2cm、現存高18.3cmである。

8、9は土師器の壺である。8は直立ぎみに外反する口頸部で、ごく僅かに二重口縁の下端が残る。調整は外面をヘラナデ、内面に一部ミガキがなされる。また、内面の胴部との境に接合痕が残る。外面の色調は赤褐色で、胎土に砂粒を含むが白色粒子が目立つ。現存高7.6cmである。9は底部から大きく胴部が膨らむ器形で、約1/2が遺存する。調整は全体に丁寧なナデがなされ、外面底部付近は斜め方向の弱い刷毛目が認められる。外面の色調はにぶい褐色及び赤褐色で、胎土に砂粒を含み、白色粒や黒色粒が目立つ。底径8.0cm、現存高16.0cmである。

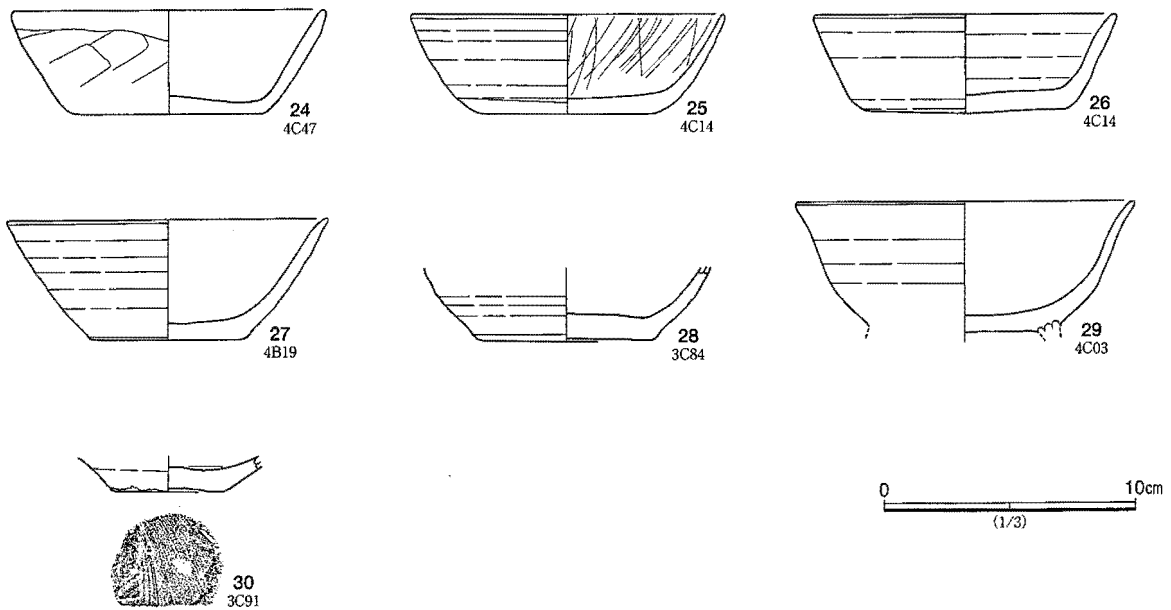
10は鉢である。口縁部から胴部下端の破片で、口縁を手捻りで短く屈曲させ、外面は指頭痕をそのまま残し、内面は強い稜を作り出しているのが特徴的である。体部の調整は全体に縦方向の粗いナデがなされるが、内面は工具痕は残るものの比較的平滑に仕上げられている。外面の色調はにぶい橙色で、胎土に砂粒を僅かに含む。推定口径14.8cm、現存高9.3cmである。



第21図 グリッド出土遺物 (1)



第22図 グリッド出土遺物(2)



第23図 グリッド出土遺物（3）

11～13は小型壺の底部である。11は底部から胴部の約2/3が遺存しており、部分的に器面が剥落している。調整は外面を細かな刷毛目、内面はナデがなされる。外面の色調はにぶい橙色で、胎土に粗目の砂粒が多く含まれる。底径4.0cm、現存高6.0cmである。12は外面、内面とも丁寧にヘラミガキがなされる。外面の色調はにぶい黄橙色で、良く精製された胎土に細かな石英粒が目立つ。底径4.6cm、現存高3.9cmである。13は外面に細かな刷毛目が施される。色調は黒色で、胎土に砂粒のほか白色針状物質を僅かに含む。推定底径4.0cm、現存高3.4cmである。

14～19は壺あるいは甕の底部である。14は甕で、外面に刷毛目と粗いヘラケズリがなされる。底径は6.2cmである。15は壺で、内外面とも丁寧にナデがなされ、胎土に粗目の砂粒を多く含む。底径は8.6cmである。16は縦から横方向のナデがなされる。器壁の厚さ、器形から見て甕と思われる。底径6.8cm。17は分厚い底面に木葉痕が残る壺で、胎土に黒っぽい砂粒が目立つ。底径8.6cm。18は小型で、突出ぎみの底部となる。胎土に砂粒のほか石英粒が多く含まれる。底径は6.2cmである。19は内外面ともに丁寧にナデ調整される。胎土は緻密で黒色粒や灰白色粒が目立つ。底径は5.6cmである。

20～22は高杯である。20は杯の体部破片で、口縁部がやや内湾ぎみに開く。口唇部はヨコナデ、体部は内外面ともに縦方向のヘラミガキがなされる。色調は黒褐色から橙色で、胎土に砂粒を多く含む。推定口径21.6cm、現存高6.1cmである。21は八字状に開く脚部で、3か所に透かし穴が穿孔される。外面は丁寧にヘラミガキ、内面はナデがなされる。色調はにぶい褐色で、胎土に砂粒を多く含む、黒色粒が目立つ。現存高7.2cmである。22も同様の脚部だが、体部との接合部の径が21よりもやや太い。これも透かし穴は3か所であるが、穿孔の位置が上下にズレている。調整は内外面ともに刷毛目、ナデがなされる。外面の色調は黒色及びにぶい黄橙色で、胎土に砂粒が目立つ。推定底径12.4cm、現存高7.5cmである。

23は器台の脚部である。内湾気味に脚裾へと開き、全体に重厚な印象を受ける。透かし穴は3か所で、比較的小さな穿孔である。外面の調整は器面が磨滅していて不明瞭であるが、一部に縦方向のミガキが認められる。内面は丁寧にナデがなされるが、器受け部に貫通する孔の周囲はヘラで削いだような、雑な仕

上げである。色調は内外面ともににぶい橙色で、胎土に砂粒を多く含むほか白色針状物質が僅かに認められる。推定底径10.4cm、現存高7.4cmである。

24～28は土師器杯である。24は全体の約1/2が遺存している。調整は表面が剥落していて不明瞭だが、外面体部はヘラケズリが施される。色調は内外面ともににぶい黄褐色で、胎土に砂粒のほかスコリアを含む。推定口径12.4cm、推定底径7.2cm、器高4.1cmである。25は約2/3が遺存している。ロクロ成形で、底部は回転ヘラ切り離し後無調整、周縁に回転ヘラケズリを加えている。内面に斜格子状暗文が認められる。色調は内外面ともににぶい黄褐色で、胎土に細かい砂粒のほかスコリア、石英粒を含む。推定口径12.3cm、底径7.0cm、器高3.9cmである。26は約1/2が遺存している。ロクロ成形で、底部は回転ヘラ切り離し後無調整で、ざっくりと切り取られている。色調は内外面とも橙色で、胎土に砂粒のほか白色針状物質を僅かに含む。推定口径12.0cm、推定底径8.0cm、器高3.9cmである。27は約1/4が遺存している。ロクロ成形で、底部の切り離し技法は磨滅が著しいため不明である。底部周縁は回転ヘラケズリ調整である。色調は内外面ともに橙色及びにぶい黄橙色で、胎土に白色粒、スコリアを含む。推定口径12.7cm、推定底径6.0cm、器高4.7cmである。28は底部から体部の約2/3が遺存している。全体に磨滅が著しいため、底部の切り離し技法は不明である。色調は内外面ともに明赤褐色で、胎土に砂粒のほかスコリア、白色針状物質を僅かに含む。底径7.0cm、現存高2.9cmである。

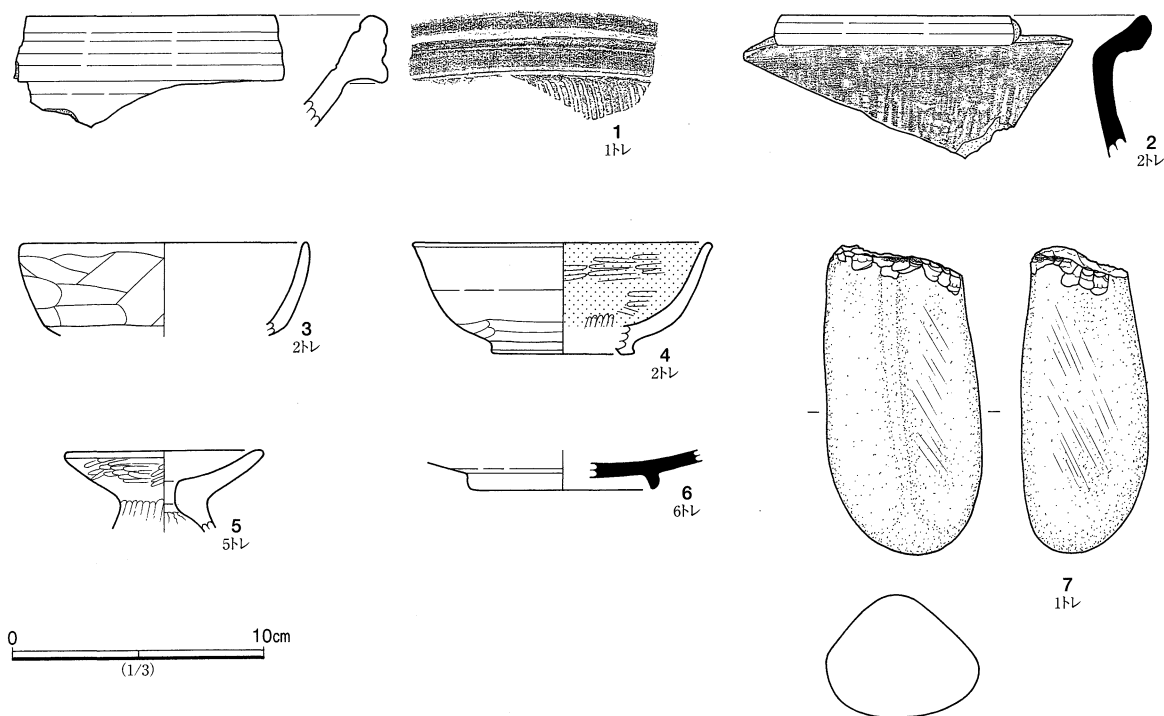
29は高台付椀で約1/3が遺存しているが、高台部を欠く。色調は外面が橙色、内面はにぶい橙色及び灰黄褐色で、胎土に砂粒のほか石英粒、白色針状物質を含む。推定口径13.4cm、現存高5.2cmである。

30はカワラケの底部である。内外面ともヨコナデ、底部は静止糸切り離し無調整である。色調は内外面ともに橙色で、胎土に砂粒のほか白色針状物質を僅かに含む。底径4.4cm、現存高1.7cmである。

2) トレンチ出土遺物 (第24図, 図版20)

確認調査時に設定したトレンチから出土した遺物は平成12年度分が131点、平成15年度分が12点で平成12年度分が圧倒的に多い。これは平成12年度の確認調査範囲がほぼ本調査範囲にかかっていたことによるが、別の見方をすれば、遺跡の主要部は調査区の南西側に存在していることの証でもある。次に遺物の種類別では、そのほとんどが土器類で、陶磁器、瓦、礫等は極少量である。これはグリッド出土遺物と同じ傾向である。また、時期的に見ても中世から近世の陶磁器類が見られるものの、その多くは古墳時代初頭と奈良・平安時代に大別される。

1は陶器の播り鉢口縁部である。内面にやや幅広の櫛目が認められる。色調は外面が明赤褐色、内面ににぶい赤褐色で、胎土は堅く締まっており、きめ細かな砂粒のほか長石粒を少量含む。近世の所産である。2は須恵器甕の口縁部である。外面は口唇部をヨコナデ、胴部は平行タタキがなされる。色調は内外面ともににぶい褐色である。胎土は砂粒が多いほかスコリア、白色粒、石英粒を含む。3は土師器杯で約1/4が遺存している。調整は外面口唇部をヨコナデ、体部はヘラケズリ、内面にヨコナデがなされる。色調は内外面ともににぶい黄橙色で、胎土に少量の砂粒、スコリアを含む。推定口径11.04cm、現存高3.7cmである。4は小型の椀で約1/4が遺存している。体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁が短く外反する。高台は僅かに開き、端部が丸く整えられる。外面は口唇部から体部上半をヨコナデ、体部下半は幅5mmほどの工具によるナデが施され、特に高台との境付近で顕著である。内面は口唇部をヨコナデ、体部はミガキが施される。色調は内外面ともに黒色で、胎土は濃い灰色の色調を示し、きめ細かな砂粒を少量含む。土師質と言うより



第24図 トレンチ出土遺物

むしろ瓦に近い質感と色調である。推定口径10.4cm，推定底径5.6cm，器高4.9cmである。5は器台の器受け部で，約2/3が遺存している。外面は口唇部をヨコナデ，体部と脚上端にヘラミガキが施される。内面は剥落して不明瞭だが一部に光沢面が認められる。色調は内外面ともにぶい黄橙色で，胎土にきめの細かな砂粒のほかスコリアを含む。口径7.8cm，現存高3.2cmである。6は須恵器高台付皿の底部で約1/3が遺存している。回転ヘラ切り離しの後，断面が三日月型の高台を付ける。内面には重ね焼きの痕跡が認められる。色調は内外面とも灰黄色で，胎土にきめ細かな砂粒のほか，ごく僅かに白色粒を含む。推定底径7.3cm，現存高1.5cmである。7は敲き石で，頭部に複数の打撃痕が認められる。側面の一部が磨滅している。長さ12.0cm，厚さ6.0cm，厚さ4.8cmで，石材は砂岩である。

第3章 沢間2遺跡

第1節 調査の概要

1 調査の方法と経過

沢間2遺跡は沢間1遺跡の西、小櫃川を挟んだ標高22m前後の段丘上に位置し、調査地点の周囲は集落や水田、畑地などが隣接している。確認調査面積は調査対象面積3,175㎡のうちの10%にあたる318㎡である。調査は東西に長い調査区内の6か所にトレンチを設定し(第25図)、これを第1トレンチ～第7トレンチと呼称した。なお、西側に設定した第4トレンチと第5トレンチの南側は、第6トレンチ設定の際に試掘を行った結果、遺構確認面が削平され盛土が厚く堆積していることが判明したため、トレンチによる調査は行わなかった。

その結果、調査区東側に設定した第1トレンチ～第3トレンチ、第7トレンチでは溝状遺構4条、土坑5基、ピット10基及び少量の土師器や陶磁器等が検出された。一方、西側の第4、第5トレンチでは遺構確認面が削平を受け遺構・遺物は検出されなかった。

検出された遺構はいずれも遺存状況が悪いものや、形が不定型で企画性のないものであり、時期的にも近世の所産と思われるものと判断されたため、トレンチでの確認調査をもって本地点の調査を終了した。

2 基本層序

本遺跡の基本層序は第 図に示したとおりである。上層のⅠ、Ⅱ層は現代の耕作土及びその鋤床で、暗灰色砂質土で覆われている。Ⅲ層に洪水起源と思われる黄灰色粘質土が堆積し、Ⅳ層褐灰色砂層が基本的に遺構確認面となる。以下Ⅶ層まで雲状斑鉄や管状斑鉄など酸化鉄を含んだ粘質土と砂質土が交互に堆積しており、Ⅷ層以下はシルト質の堆積土に変化していく。Ⅷ層は暗灰褐色砂層を挟んで3層に区分される洪水起源と思われる層である。Ⅹ層以下のシルトは、泥炭質など湿地痕跡を残す自然堆積層である。

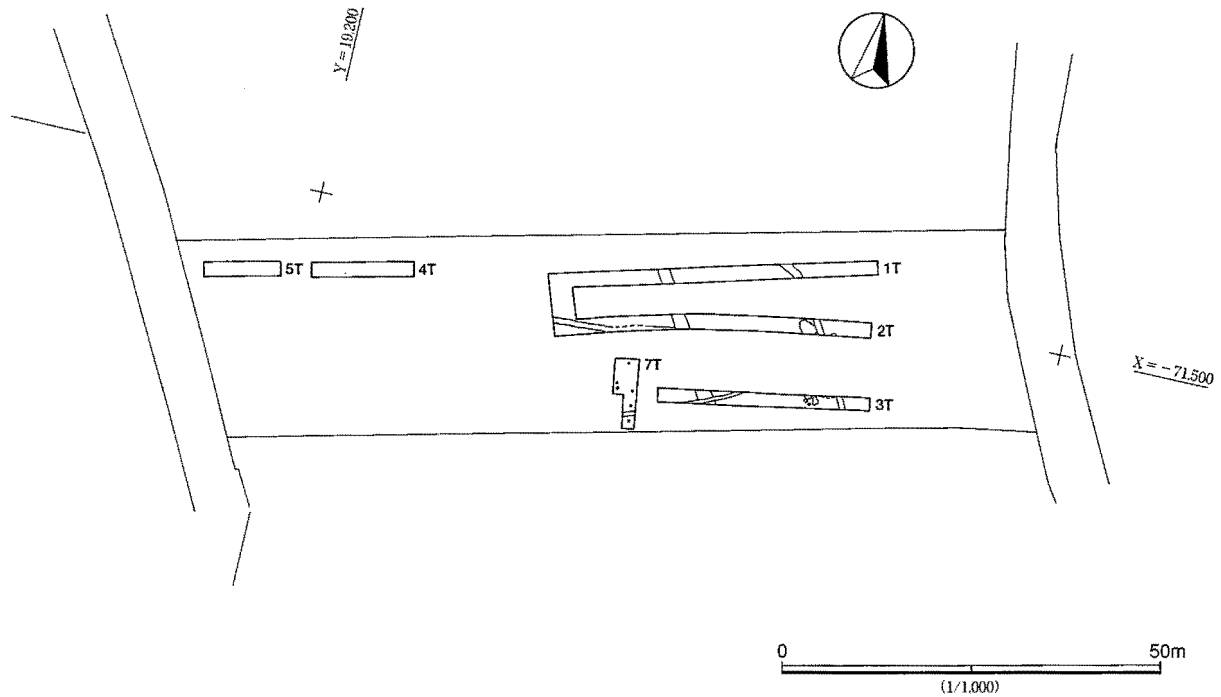
3 トレンチ

第1トレンチ

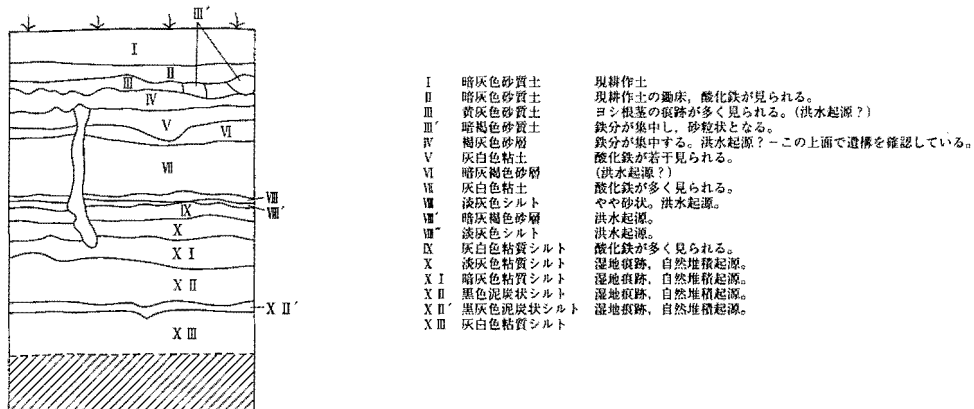
トレンチの東側と西側で南北方向に延びるそれぞれ1条ずつの溝状遺構を検出した。このうち東側の溝状遺構は幅1m前後、西側は幅2m前後である。ただ両者とも遺存状況は悪く、掘り方も深さ2cm～3cmと非常に浅いものであった。この2条は南側の第2、第3トレンチに続く。遺物は出土していない。

第2トレンチ

遺構は第1トレンチから続く2条の溝状遺構のほか、東側の溝状遺構に接して土坑1基を、さらに西側で東西方向に延びる溝状遺構1条を検出し、土坑をSK001、溝状遺構をSD001とした。遺物はトレンチ内から土師器片1点、SK001から土師器片4点、SD001から陶磁器片3点、須恵器片1点、砥石片1点が出土した。



第25図 沢間2遺跡トレンチ配置図



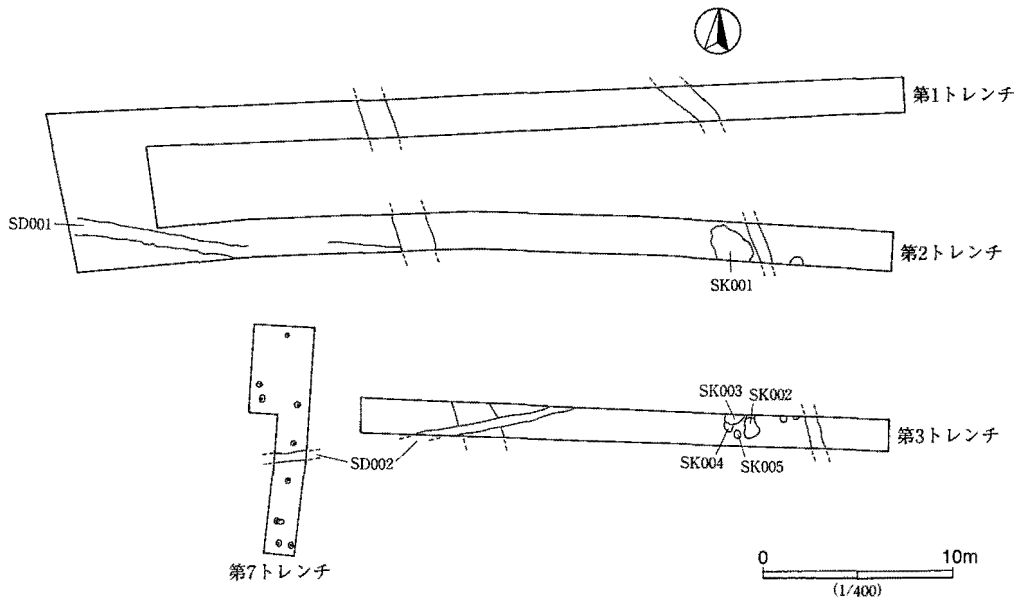
第26図 沢間2遺跡基本層序

第3トレンチ

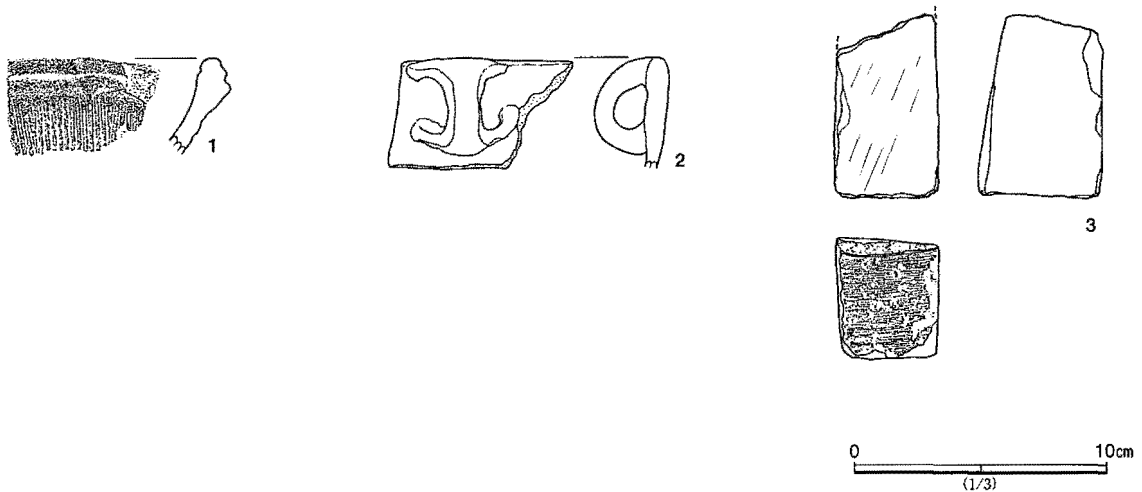
遺構は第1トレンチから続く2条の溝状遺構のほか、トレンチ中央付近で土坑4基を、さらに西側で東西方向に延びる溝状遺構1条を検出した。この溝状遺構は第7トレンチに続く。4基の土坑をそれぞれSK002~SK005、溝状遺構をSD002とした。トレンチ内からは土師器片2点、陶磁器片2点が出土した。SD002は幅40cm~50cm、深さ24cm前後で直線状に延びる。

第7トレンチ

遺構では、第3トレンチから東西方向に延びる溝状遺構SD002のほか、ピット10基を検出した。ピットの平面形は概ね円形を呈し、径30cm前後~40cm前後、深さ20cm~50cmである。このうち中央付近から南側のピット4基は、SD002を挟んで約2m間隔で直線上に並ぶが、深さは一定していない。遺物はトレンチ内から土師器片1点と陶器片1点が出土したのみである。



第27図 沢間2遺跡トレンチ内遺構検出状況



第28図 沢間2遺跡出土遺物

4 出土遺物

本遺跡から出土した遺物は非常に少なく、僅か16点である。内訳は土師器8点、須恵器1点、陶磁器6点、砥石1点であり、また、土師器、陶磁器類は何れも小破片で器種を特定できたものはごく僅かで、土師器では平安時代と思われる甕や杯類、陶磁器では中世の青磁椀、近世の播鉢、椀類類などがある。これらは遺構が散見される調査区東側に偏っている。

図示できたものはすべてSD001から出土した。1～3は近世の所産である。1は播鉢の口縁部で、内面に12本単位の櫛目が入る。色調は内外面とも赤褐色で、胎土に砂粒、長石粒を含む。2は内耳鍋である。色調は内外面ともぶい黄橙色で、胎土にきめの細かな砂粒のほか雲母、白色針状物質を僅かに含む。3

は凝灰岩製の砥石で、表面はかなり風化して剥落したり、酸化鉄が付着して赤茶色に変色している。現存長73.1mm、幅41.1mm、厚さ45.6mm、重さ228gである。

5 小結

沢間2遺跡は、調査区東側に設定した第1トレンチ～第3トレンチ・第7トレンチで溝状遺構4条、土坑5基、ピット10基及び少量の土師器や陶磁器等が検出された。出土した遺物は非常に少なく、何れも小破片で器種を特定できたものはごく僅かであった。これらは遺構が散見される調査区東側に偏っている。沢間2遺跡の位置する地点は、現在の集落域内にあつて屋敷地周辺にあたる畑地或いは空閑地となっていたのであろう。

第4章 ま と め

沢間1遺跡の調査では、調査区南西側の低位面から竪穴住居跡と畠跡、溝跡など数時期にわたる生活面及び生産跡が第1面から第3面まで重層的に検出された。特に平行する小溝群で構成された一群は畠の畝間溝と考えてよく¹⁾、これらが小規模ではあるがある程度まとまった面積で検出されていることも、本遺跡の特色の一つとなろう。なお、今回の発掘調査に伴い各面の畠から採取した土壌についてプラント・オパール分析と花粉分析を行った。その詳細は後述する付章「沢間1遺跡の自然科学分析」に譲ることにするが、以下、検出された畠跡と分析から得られた成果を中心に各面毎の様相を概観し、まとめとしたい。

1 各面の概観

第1面 第1面は、Ⅲa層上面のレベルで遺構を検出した。竪穴住居跡1軒、溝跡1条、畠跡2群、ピット1基である。竪穴住居跡SI001は低地部の端に位置し、その東に畠跡SD002Aが、さらにその南に畠跡SD006が位置する。畝間溝はⅡa層中からⅢa層上位に掘削されている。

SD002AとSD006の二つの畠跡は、畝間溝の方向・規模が共通する。畝間溝の方向は北東から南東方向で、この向きはちょうど微高地の縁辺のラインに、言い換えれば等高線にほぼ直交する向きである。また、SD006と直交する溝SD001の壁面でも畝間溝の痕跡が確認されていることから、本来はSD002Aの西側も畝溝群が広がっており、一面の畠を形成していた可能性が高く、これを含めると畠の面積は約600㎡以上の範囲となろう。

竪穴住居跡SI001はSD002Aとはわずか1.4mの距離に位置する小型の住居跡で、本遺跡で検出された唯一の住居跡である。年代的には出土した土師器杯の形態から8世紀後半に相当すると思われる。調査区北東側の微高地部には遺構が存在していないが、低地部に遺物が多いことや微高地上面を削平・整地した形跡があることから、本来この微高地に集落が存在した可能性が充分考えられる。

ここで問題となるのは、住居跡と畠跡つまり集落と生産跡が近接して営まれていた—住居跡と畠の同時性である。遺構間の位置関係から見ると、住居跡と畝間溝との切り合いは確認されていないが、その間隔は決して広いとは言えない。古代の村落景観を具体的に示す遺跡として群馬県黒井峰遺跡や西組遺跡、中筋遺跡などが著名であるが、その例では、屋敷地を土手或いは溝で囲い、その外側に畠が作られる²⁾。竪穴住居跡は当然のごとく壁から外側に屋根が葺き下ろされるため、たとえ住居に接して畠を作ったにしても、壁と畠の間は適度の空地が必要であろうことは言うまでもない。ただ、住居跡と畠跡が同レベルで検出されていること、畠跡から出土した土師器類が8世紀後半から9世紀代と年代的にはやや幅がある様相を示しているものの、住居跡とほぼ同時期の杯が出土していることなど、この住居跡と畠跡或いは集落と生産跡が同時存在していた可能性が大きいと考えられる。

溝SD001は、SD006の畝間溝群を切って南東—北西方向に掘られている。この方向は、旧地形でみると蛇行する小櫃川の川筋と川筋に挟まれた耕地の水路の向きに符合しており、取排水のための水路の一つとみることができる。

第2面 遺構検出面の標高は20.0m～20.4mで、概ね北から南に緩やかに傾斜している。遺構は第一面と

同様に調査区南西側の低地部に集中しており、平行する畝間溝群からなる畝跡SD002BとSD008の他土坑1基、ピット34基が検出されている。また、掘立柱建物跡SB001は、第3面で検出されたが柱穴の掘り込まれた層位から第2面の遺構とした。

検出された2群の畝間溝は、IVa層上面に掘り込まれている。方向こそ一定方向に平行するが、第1面に比べると各小溝間の幅が狭く、小溝毎が切り合う。畝立てなど起耕が繰り返し行われたような状況が考えられる。なお、各小溝毎の重複の新旧関係は、平面上からも土層断面（第5図）からも観察できず不明確である。出土遺物は古墳時代後期後半や古墳時代前期の土器類を含むものの、第1面と同様8世紀後半から9世紀代前半の奈良・平安時代のものが最も多く認められる。この状況は、第2面の畝床であるIVa層から第1面の畝床Ⅲa層までが比較的短い期間で堆積した結果と考えられる。堆積土の状況や土器類の混在状況、磨滅の度合いは、小櫃川の氾濫など河川的作用による堆積を裏付けるものである。ただし層位的には第1面よりは幾分古い時期に耕作が行われていたと考えられる。

土坑とピットの多くは畝間溝を切って掘り込まれることから、新旧関係の上では一応畝跡より新しいものであるがこれも時期的には大差のないものと判断した。また、低地部と微高地部との境付近では焼土・炭化物、炭化材が出土している。Ⅲb層中からIVa層及びIVb層上面の低地部平坦面での遺物出土量は他の層に比べ多量であり、焼土や炭化物等の生活痕跡とを考えると第1面と同様微高地部での集落の存在を想定できよう。

第3面 第3面の遺構は、基盤層であるVIa層上面で検出された溝跡2条、自然流路1条、畝跡1群、掘立柱建物跡2棟、ピット17基、土坑1基である。低地部全体の地形は南東から北西方向に延びる自然流路SD005に沿う面が最も低位であり、VIa層上面には部分的にこの覆土が堆積している。この間の年代は各遺構の覆土中及びVa層中の土器類の特徴から弥生時代終末から古墳時代前期に相当する。

畝跡SD009は第1面、第2面でみられたような連続した平行する畝溝群とは異なり、格子状の小溝からなる一群である。平面的には一見小区画水田を思わせるような細かな区画や平行する溝間の距離が広い箇所もあり一様ではない。格子状に交差する溝の覆土の観察からは、新旧の時期差を示すような状況が認められないため、基本的には格子状に掘り込まれたものと理解した。このような例は、沼津市北神馬土手遺跡のように、溝が基盤目状に交差しその溝の内側がやや高まる形態の畑状遺構に認められ、神奈川県秦野市鶴巻上ノ窪遺跡、富山市任海宮田遺跡なども類似した例のひとつである³⁾。本遺跡で検出されたSD009の溝は、第1面、2面の畝間溝とは異なり、畝の区画として溝に囲まれた内側で耕作が行われた可能性が高い。また、一部の溝中で検出された窪みは、平面形が三日月状、半月状を呈し、溝幅に対して直交して掘り込まれていた。こうした窪みは仙台下ノ浦遺跡⁴⁾で検出された鋤先痕や近隣の木更津市四宝塚遺跡⁵⁾など多数の遺跡で検出例があり、起耕に伴う鋤・鍬など農具の痕跡として認識されており、本遺跡の例もこれらに類似したものと考えられる。

SD003とSD004の2条は水路として開削された溝で、土層観察の結果SD004がSD003より後に開削されたことが確認されている。VIa層、VIb層を基盤とする第3面での耕地化の過程を推定すると、第1段階では、まず最も窪んだ部分を自然流路SD005が小櫃川上流の南東方向から下流の北西方向に向かって形成され、次第に土砂を堆積させた。次の段階ではこの流路に沿った北東の微高地側にSD003が開削され低地部の耕地化が進められた。その後SD003埋没後にSD004が開削され、しばらくの間耕作が続けられたと思われる。

2 自然科学分析からみた栽培作物

自然科学分析は、プラント・オパールと花粉分析を行った。プラント・オパールは、イネ・イネ穎破片をはじめキビ族・ネザサ節型・クマザサ属・ウシクサ族などが検出されている。イネは第1面SD006と第3面SD009の溝内から比較的高い密度で検出され、とりわけSD006ではイネの籾殻に形成される珪酸体も観察されていることから、本地点において稲作、陸稲の栽培が行われていた可能性を裏づける結果となった。なお、第2面SD008はイネ、キビともに少量に留まっており、栽培種の推定には至らなかった。

花粉分析ではスギ・ハンノキ属・コナラ属などの樹木花粉とイネ科・アカザ科-ヒユ科・ヨモギ属などの草本花粉及びシダ植物の花粉化石が得られている。しかし全体的には非常に少ない量であり、遺跡周辺の古植生を復元するまでには至らなかった。その理由としては、本地点が河川に沿った低位な土地環境にありながら常時水にさらされた環境ではなく、土壌化が進んだ比較的乾燥した陸域であったため、ここに供給された花粉が分解・消失してしまったと考えられている。

3 まとめ

古代の畠・畑跡は、全国的にみるとかなりの事例が報告されており、県内でも類例が増しつつある⁶⁾。近隣の例では、本遺跡と同じ小櫃川流域に位置する木更津市菅生遺跡⁷⁾、芝野遺跡⁸⁾のほか、前出の四宝塚遺跡、小糸川流域の君津市常代遺跡⁹⁾などがある。こうした畠跡あるいは畑跡の遺構は、群馬県有馬条里遺跡¹⁰⁾のように火山灰に埋もれた畝と畝間溝が良好な状態で保存された例を除くと、何れも細長い平行する小溝群として発見される例が多く、本遺跡も例外ではない。ただ、第3面で検出された一見小区画水田のような格子状を呈する一群は類例に乏しく、これを畠跡としてみるかどうかは今後の課題となろう。ただ、花粉分析の結果でも指摘されたように、本地点の立地が「比較的乾燥した陸域」であったとすれば、ある意味では水田よりむしろ畠としての環境を備えていたといえるかもしれない。

畠の栽培種に関しては、前述したように高い密度でイネのプラント・オパールが検出されていることから稲作・陸稲栽培が行われていた可能性が高いと思われるが、前出の菅生遺跡と同様に肥料または他の作物の保護として稲藁が利用されたとする指摘もある。イネの陸稲栽培は、各地の分析例でも早くからその可能性が報告されてはいるが、水稲耕作ほどの解明はまだ進んでいないのが現状であろう。

今回の発見例は、小規模ながらも古代の畠の事例や陸稲栽培の可能性を探る上での資料を追加したことになる。

注1 佐藤甲二「畑跡の畝間と耕作痕について-仙台市域の考古学的事例から-」『人類誌集報1998』東京都立大学考古学報告3 漆利用の人類誌調査・飛騨山峡の人類誌調査グループ 1998

2 大塚昌彦「火山灰下の家屋」『考古学による日本歴史15 家族と住まい』雄山閣出版 1996

石井克己「八、東国の村と生活-日本のポンペイ黒井峯・西組遺跡は語る」『古代を考える東国と大和王権』吉川弘文館 1994

3 『シンポジウム「はたけの考古学」日本考古学協会2000年度鹿児島大会資料集 第1集』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編 2000

4 注1に同じ。

5 鈴木良正・笹生 衛・高梨友子『木更津市四宝塚遺跡』(財)千葉県文化財センター 2001

- 6 城田義友「第2章農耕関連遺構の分析」『千葉県文化財センター研究紀要23』（財）千葉県文化財センター 2002
- 7 酒巻忠史ほか「菅生遺跡の発掘調査」『木更津市文化財調査集報7』木更津市教育委員会 2002
- 8 笹生 衛『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書7－木更津市芝野遺跡－』（財）千葉県文化財センター 2001
- 9 甲斐博幸ほか『千葉県君津市常代遺跡群』君津郡市考古資料刊行会 1996
- 10 坂口 一，中 隆之ほか『有馬条里遺跡Ⅰ－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財調査報告書第29集－』群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989

付章 沢間 1 遺跡の自然科学分析

鈴木 茂 (パレオ・ラボ)

第1節 沢間 1 遺跡のプラント・オパール

イネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、珪酸分を多量に吸収することが知られている。プラント・オパールとは、根より吸収されたこの珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壤中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原（1976）や藤原・佐々木（1978）など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている（藤原 1984）。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。

小櫃川中流域右岸の標高20m前後の自然堤防上に立地している沢間 1 遺跡において、畝跡と思われる畝溝などの遺構が検出されている。こうした遺構より採取された土壌試料を用いて畑作あるいは水田稲作について機動細胞珪酸体由来するプラント・オパールから検討し、あわせて沢間 1 遺跡におけるイネ科植物の変遷についても検討した。

1. 試料と分析方法

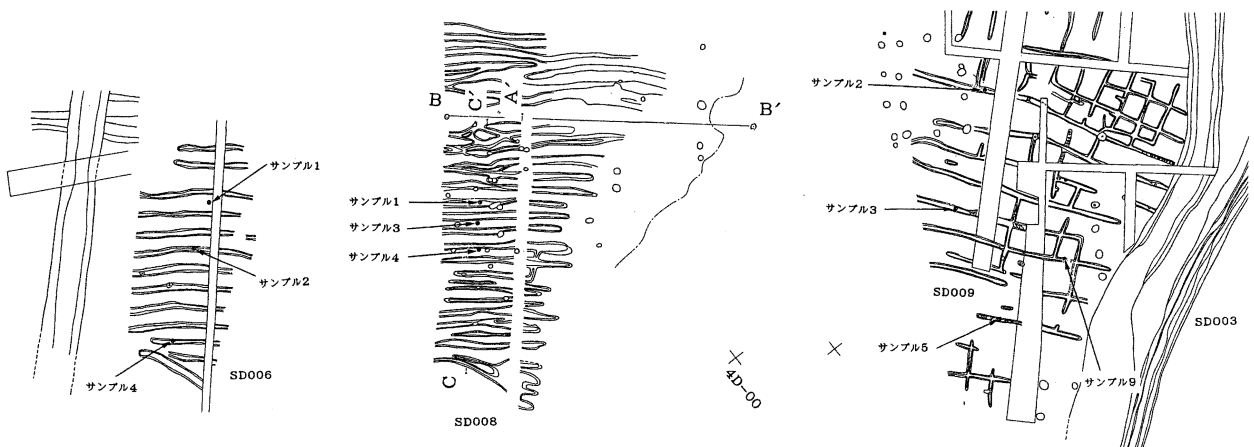
分析用試料は地点①、地点②、地点③の畝、畝溝より採取された10試料である（図1）。

地点①：SD006地点第1面（Ⅱb層～Ⅲa層）

試料番号 6-1（畝）は暗褐色の砂質シルト、6-2（畝溝）はローム質の黒褐色粘土、6-4（畝溝）は黒褐色の粘土質シルトである。これらの時代は奈良時代～平安時代と考えられている。

地点②：SD008地点第2面（Ⅳ層）

試料番号 8-1（畝）は暗黄褐色シルト、8-3（畝）は暗黄褐色粘土で、黄褐色粘土（ローム？）小塊が点在している。8-4（畝溝）はやや粘土質の黒褐色～暗褐色シルトである。時代は奈良時代～平安時代と考えられている。



第29図 試料採取地点位置図

地点③：SD009地点第3面（V層およびV'層）

試料番号9-2, 9-3, 9-9（いずれも畝溝）は黒色粘土, 9-5（畝溝）は黒色の粘土質シレトである。また各試料には黄褐色～褐色のローム小塊が散在～点在している。これらの時代は古墳時代前期と考えられている。

プラント・オパール分析はこれら10試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する（絶対乾燥重量測定）。別に試料約1g（秤量）をトールビーカールにとり、約0.02gのガラスビーズ（直径約40 μ m）を加える。これに30%の過酸化水素水を約20～30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

2. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求め（表2）、それらの分布を第30図（SD006地点）、第31図（SD008地点）、第32図（SD009地点）に示した。以下に示す各試料のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

地点①（SD006）：全試料からイネのプラント・オパールが検出された。個数としては、6-2で1,200個と少ないが他の2試料では5,000個を越え、6-1ではイネの穎部（籾殻）に形成される珪酸体の一部破片も観察されている。

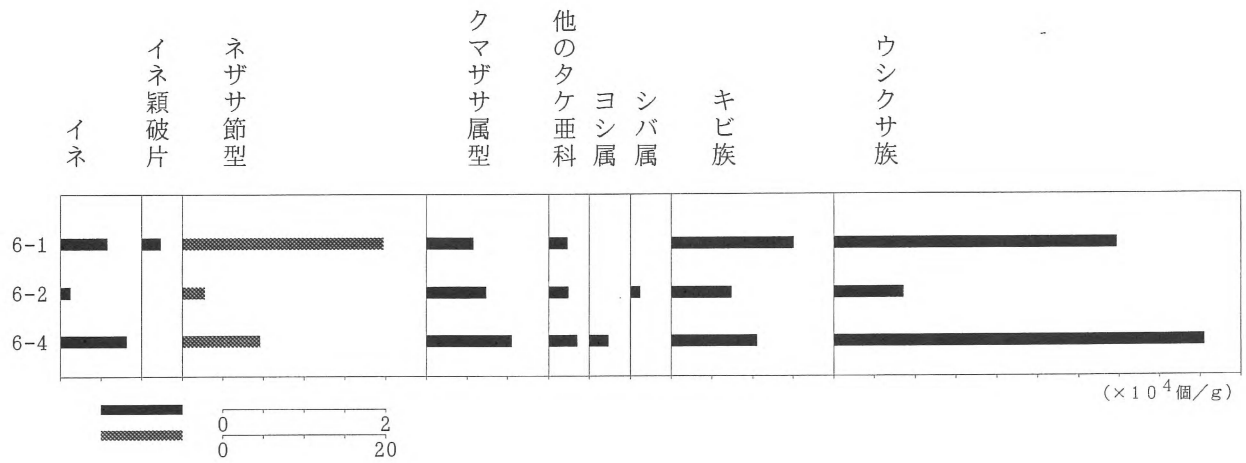
イネ以外では、ネザサ節型とウシクサ族が多く、6-1においてネザサ節型は約250,000個と非常に多く検出されている。キビ族も10,000個前後と生産量の少ないキビ族としては比較的高い数値を示している。その他、クマザサ属型、ヨシ属、シバ属などが検出されている。

地点②（SD008）：8-1, 8-4の2試料からイネのプラント・オパールが若干検出されている。イネ以外ではネザサ節型がやはり最も多く、個数としては45,000個前後である。他の分類群で10,000個を越えるものは無く、地点①で比較的多く検出されたキビ族も多くて1,000個やっと越える程度である。

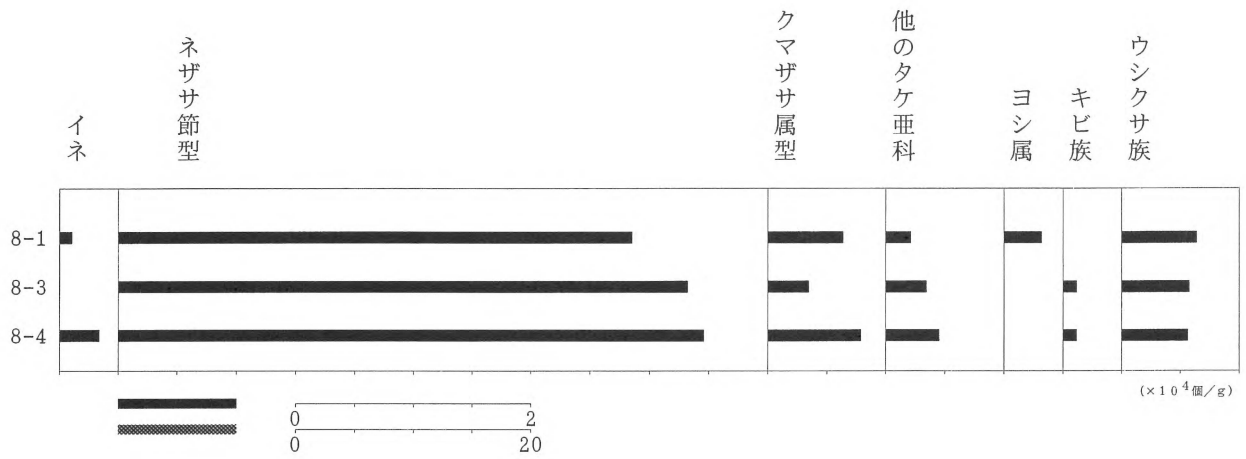
地点③（SD009）：全試料からイネのプラント・オパールが検出され、2,600個の9-5を除き5,000個以上を示している。イネ以外ではネザサ節型とウシクサ族が多く、いずれも全試料10,000以上で、9-2では20,000個を越えている。ヨシ属も全試料から得られ、9-3, 9-5では10,000個を越えている。キビ族も比較的多く検出されており、その他クマザサ属型も全試料で観察されている。

表2 試料1g当たりのプラント・オパール個数

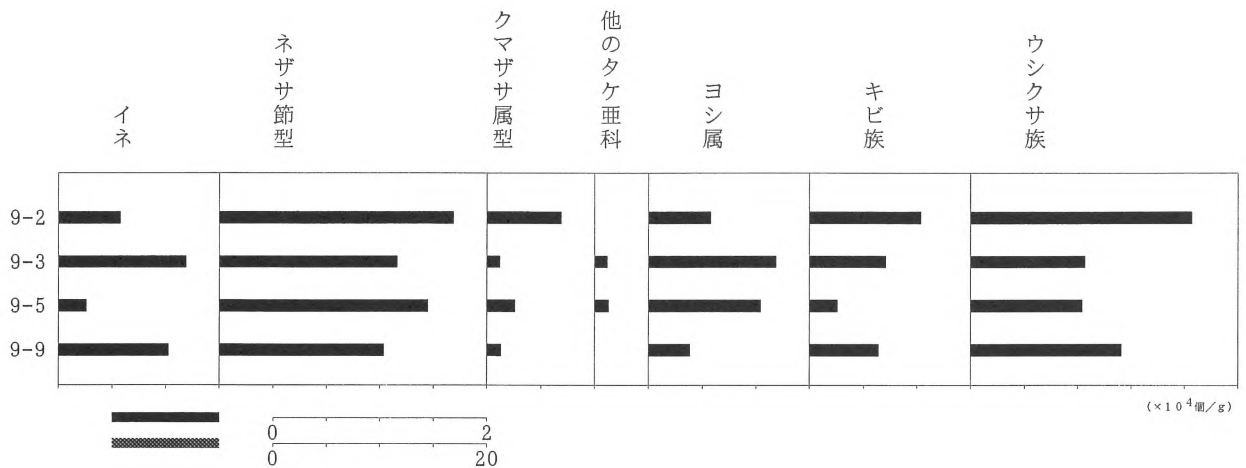
試料番号	イネ (個/g)	イネ穎破片 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のタケ亜科 (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ族 (個/g)	ウシクサ族 (個/g)	不明 (個/g)
6-1	5,800	2,300	247,300	5,800	2,300	0	0	15,000	34,700	25,400
6-2	1,200	0	28,100	7,300	2,400	0	1,200	7,300	8,600	14,700
6-4	8,200	0	95,600	10,500	3,500	2,300	0	10,500	45,500	37,300
8-1	1,100	0	43,500	6,400	2,100	3,200	0	0	6,400	8,500
8-3	0	0	48,200	3,400	3,400	0	0	1,100	5,700	9,200
8-4	3,400	0	49,600	7,900	4,500	0	0	1,100	5,600	1,100
9-2	5,800	0	21,900	6,900	0	5,800	0	10,400	20,700	10,400
9-3	11,900	0	16,600	1,200	1,200	11,900	0	7,100	10,700	14,200
9-5	2,600	0	19,500	2,600	1,300	10,400	0	2,600	10,400	6,500
9-9	10,200	0	15,400	1,300	0	3,800	0	6,400	14,100	11,500



第30図 地点① (SD006) のプラント・オパール分布図



第31図 地点② (SD008) のプラント・オパール分布図



第32図 地点③ (SD009) のプラント・オパール分布図

3. 稲作について

上記したように、8-3を除く9試料でイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として水田址の検証例を示すと、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上という高密度で検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。これに従うと沢間1遺跡においては、地点①および地点③で5,000個を越える個数が得られており、検出個数からは稲作が行われていた可能性は高いと判断される。しかしながら地点①は遺構的には畠と考えられており、ここでの稲作とすれば陸稲栽培が推察される。またキビ族も地点①では比較的多く検出されており、アワ・ヒエ・キビといったものが栽培されていた可能性もあるが、現時点ではこれら栽培種とエノコログサやイヌビエなどの雑草類とを区別することは難しい状況である。以上のように地点①においては稲作やキビ族の栽培が畑作として行われていた可能性も考えられるが、これについてはさらに検討が必要であろう。なおキビ族や他の作物の栽培が行われていたとすると肥料などで稲藁が使われることによりイネのプラント・オパールが供給されたことが考えられよう。

地点③においても検出個数のみから判断すると稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。遺構的には小区画水田を思わせる溝遺構が検出されているが、現時点では畠の畝溝と考えられている。同じ木更津市の菅生遺跡(小櫃川左岸)では少なくとも弥生時代後期前後頃には稲作が行われるようになったと推測されている(木更津市2002)。地点③の時代は古墳時代前期と考えられており、時代的には本地域において水田稲作が行われていても問題は無いと思われるが、先にも記したが現時点では畠と考えられており地点③の水田稲作についてもさらに検討が必要であろう。なお菅生遺跡においても古代の畝立溝が50~60cm間隔で何条も検出されており、形状から畑遺構ではないかと考えられている(木更津市2002)。その自然科学分析においては沢間1遺跡と同様にイネのプラント・オパールが多いなどの結果が得られている(鈴木2002)。

地点②でもイネのプラント・オパールは検出されているが個数的には少なく、稲作についてその可能性は低いと判断される。またキビ族についても同様であり、本地点における畑作についてプラント・オパール分析からは言及できないと考える。なお少量ながらイネのプラント・オパールが検出されており、これは攪乱など上位層からの落ち込みなどで供給されたと推測されよう。

4. 遺跡周辺のイネ科植物

地点③においてヨシ属が多く検出されており、古墳時代前期にはヨシやツルヨシといったヨシ属が多く生育していたとみられる。このヨシ属は湿地や池沼などの比較的浅い水域や地下水位の高いところに分布している。同試料を用いて行われた花粉分析結果をみると花粉化石はほとんど得られず、乾いた環境での堆積が推測されている。こうしたことから試料を採取した畝溝について、地下水位は高かったものの地表部は比較的乾いた環境であったのではないかとと思われる。その後地点①や②ではほとんどヨシ属は得られず、奈良時代~平安時代にはさらに乾いた環境になっていったと推察される。

全体を通してネザサ節型が最も多く検出されており、アズマネザサと考えられるネザサ節型のササ類が遺跡周辺の開けた日のあたるところに多く生育していたのであろう。またススキやチガヤなどのウシクサ族も同じようなところでの生育が考えられ、一部にアズマネザサーススキ群集といった草地を形成してい

たとみられる。なお、先にも記したがキビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものか現時点では分類できず不明であり、今後の課題としたい。

引用文献

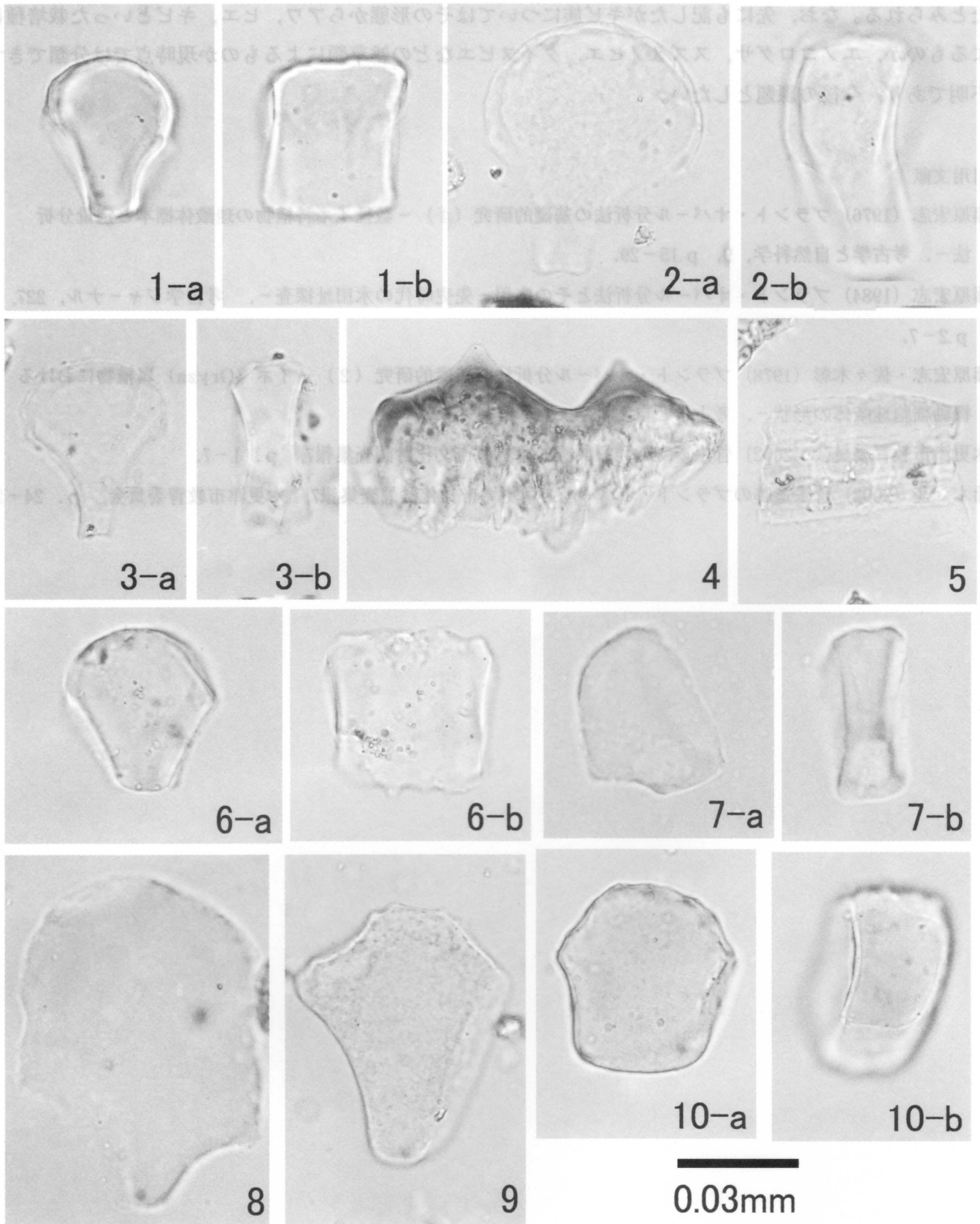
藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 - . 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志 (1984) プラント・オパール分析法とその応用 - 先史時代の水田址探査 - . 考古学ジャーナル, 227, p.2-7.

藤原宏志・佐々木彰 (1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (2) - イネ (*Oryza*) 属植物における機動細胞珪酸体の形状 - . 考古学と自然科学, 11, p.9-20.

木更津市教育委員会 (2002) 菅生遺跡の発掘調査. 木更津市文化財調査集報7, p. 1-7.

鈴木 茂 (2002) 菅生遺跡のプラント・オパール. 木更津市文化財調査集報7, 木更津市教育委員会, p. 24-27.



図版21 沢間1遺跡のプラント・オパール

- 1～3：イネ（a：断面，b：側面） 1：6-1， 2：8-4， 3：9-3
 4：イネ穎部破片 6-1
 5：イネ型単細胞珪酸体列 6-1 8：ヨシ属（断面） 9-5
 6：ネザサ節型（a：断面，b：側面） 6-1 9：ウシクサ族（断面） 8-4
 7：クマザサ属型（a：断面，b：側面） 6-1 10：キビ族（a：断面，b：側面） 6-1

第2節 沢間1遺跡の花粉化石

小櫃川中流域右岸の自然堤防上（標高20m前後）に立地している沢間1遺跡において発掘調査が行われ、畑跡と思われる畝溝等が検出されている。こうした畝溝等から採取された土壌試料について花粉分析を行い、畑作物や遺跡周辺の古植生についての検討を試みた。

1. 試料と分析方法

試料は地点①（SD006）、地点②（SD008）、地点③（SD009）の3地点より採取された10試料である。これら10試料の採取位置や土相についてはプラント・オパールの節を参照して頂きたいが、土相はおおむね黒～黒褐色の粘土やシルトである。また時代は地点①（第1面）、地点②（第2面）が奈良時代～平安時代、地点③（第3面）が古墳時代前期と考えられている。花粉分析はこれら10試料について以下のような手順にしたがって行った。

試料（湿重約4～5g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

2. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉7、草本花粉5、形態分類を含むシダ植物胞子3の総計15である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表3に示したが、得られた花粉化石数が非常に少なく分布図として示すことができなかった。

検鏡の結果、樹木花粉はマツ属複維管束亜属、スギ、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、シイノキ属-マテバシイ属、ニレ属-ケヤキ属の7分類群が、また草本花粉はイネ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属、ヨモギ属を除く他のキク亜科、タンポポ亜科の5分類群がわずかに観察された。またシダ植物ではヒカゲノカズラ属のほか単条型胞子、三条型胞子が得られている。

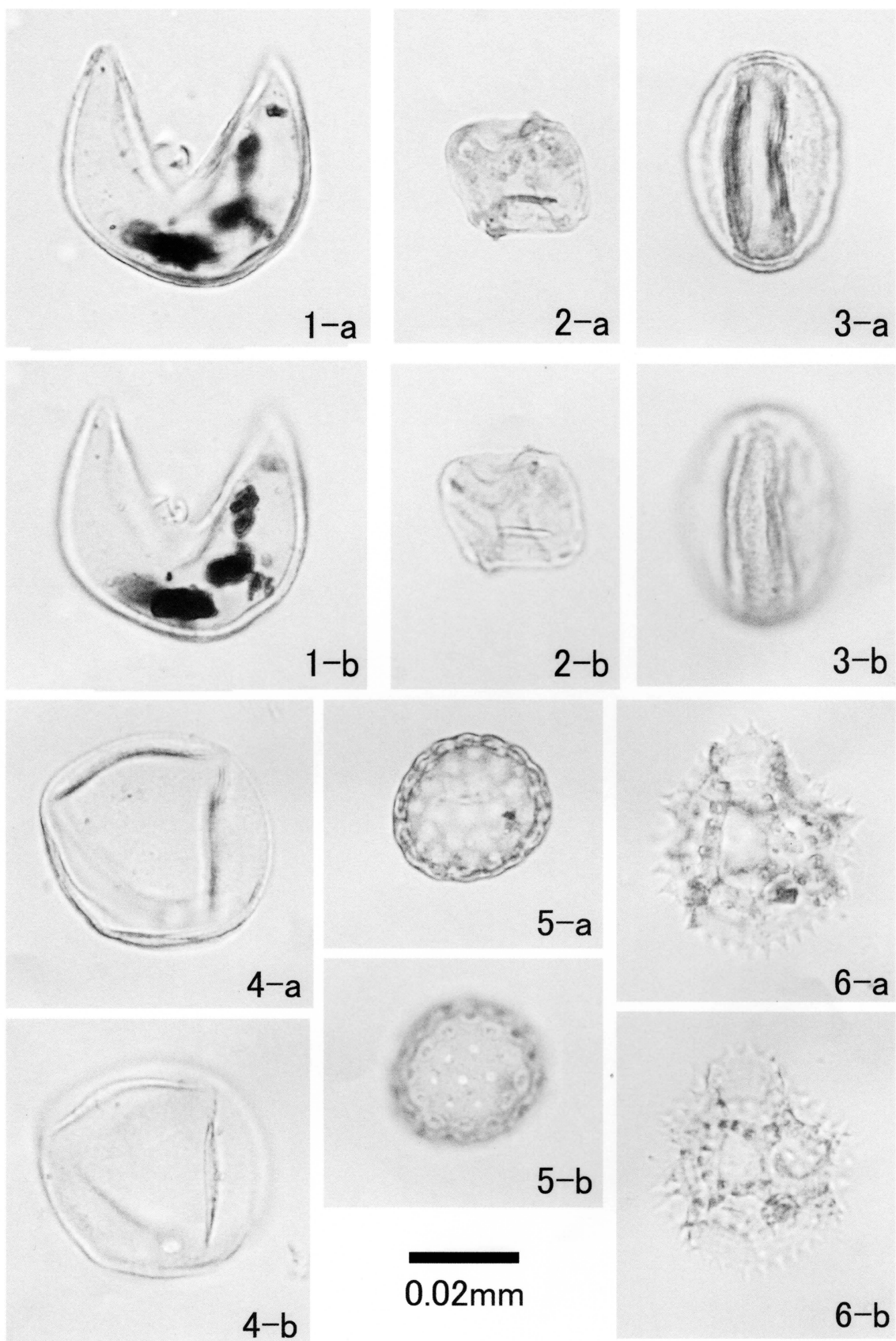
3. 考察

上記したような分類群が遺跡周辺に生育していたと思われるがその様相については言及できず、遺跡周辺の古植生については不明である。また栽培植物を含む分類群もイネ科以外は検出されていない。

こうした花粉分析結果について、土相は土壌化が進んでいる様相がみられ、そうしたことで多くの花粉は分解・消失してしまったものと推察される。花粉は強固な外幕を持つことから一般に丈夫であるといわれており、溝や池沼、湿地などの水域（水成堆積物中）では良好な状態で保存される。しかしながら陸域に落下した花粉はバクテリアなどの土壌微生物や紫外線などで容易に分解されてしまう。今回試料を採取した畝溝は水がたった環境ではなく、こうした陸域に供給された花粉は容易に分解・消失してしまったと考えられよう。

表3 産出花粉化石一覧表

和名	学名	6-1	6-2	6-4	8-1	8-3	8-4	9-2	9-3	9-5	9-9
樹木											
マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	-	-	-	-	1	-	-	3	2	-
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-
シイノキ属マテバシイ属	<i>Castanopsis</i> - <i>Pasania</i>	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ニレ属ケヤキ属	<i>Ulmus</i> - <i>Zeltova</i>	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
草本											
イネ科	Gramineae	1	1	-	-	-	2	3	2	7	-
アカサ科-ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	1	1	-	1	-	-	3	2	-	3
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
タンポポ科	Liguliflorae	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
シダ植物											
ヒカゲノカズラ属	<i>Lycopodium</i>	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-
単条型胞子	Monolete spore	6	5	1	1	1	-	6	6	2	-
三条型胞子	Trilete spore	2	2	2	-	-	-	1	-	-	-
樹木花粉	Arboreal pollen	1	0	0	2	0	1	0	6	5	0
草本花粉	Nonarboreal pollen	2	3	0	2	0	2	6	5	7	4
シダ植物胞子	Spores	9	8	4	1	1	0	7	6	2	0
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	12	11	4	5	1	3	13	17	14	4
不明花粉	Unknown pollen	1	1	1	2	1	1	1	2	0	0



図版22 沢間1遺跡の花粉化石

1: スギ PLC.SS 3758 8-1

2: ハンノキ属 PLC.SS 3756 8-1

3: コナラ属アカガシ亜属 PLC.SS 3760 9-3

4: イネ科 PLC.SS 3759 8-1

5: アカザ科-ヒユ科 PLC.SS 3757 8-1

6: タンポポ亜科 PLC.SS 3761 9-5

写 真 图 版



沢間2遺跡

沢間1遺跡

沢間1・沢間2遺跡周辺航空写真（昭和45年4月撮影）



沢間1 遺跡調査
前全景 (西から)



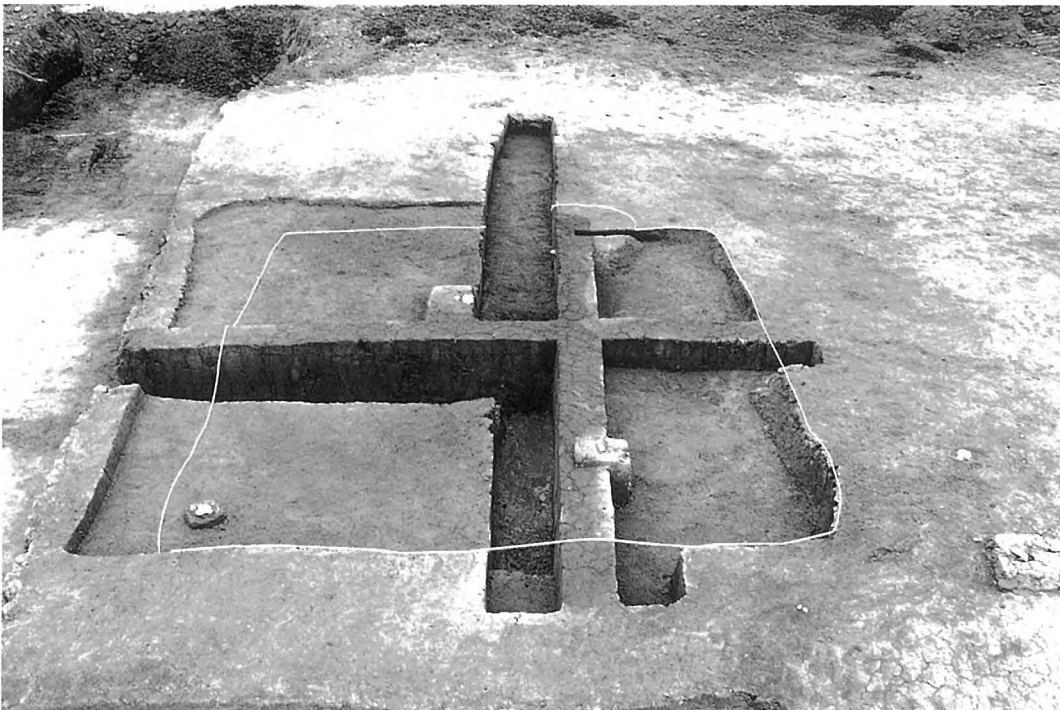
沢間1 遺跡調査
前全景 (北東から)



調査後全景
(平成13年度・北東上空から)



調査後全景
(平成14年度・
南西上空から)



SI001
(南から)



SI001
SD002A・B
(南から)



SD002A (奥)
002B (手前)
(南から)



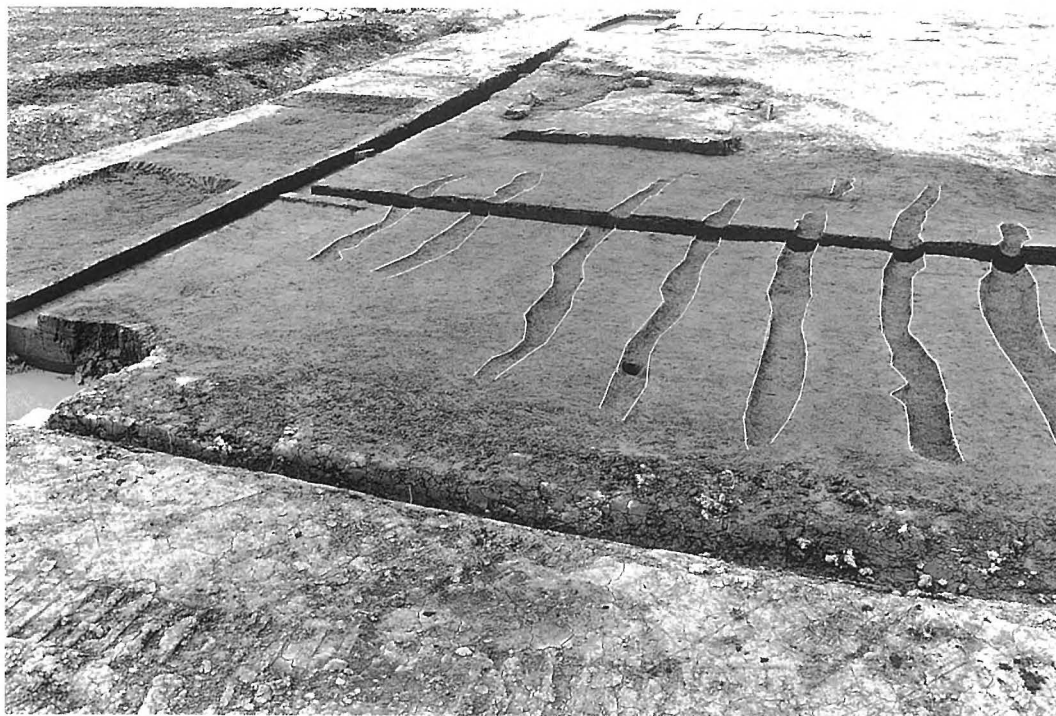
SD001
(南東から)



SD006検出状況
(北西から)



SD006
(北西から)



SD006西側部分
(南から)



SD006東側部分
及びSD007 (南から)



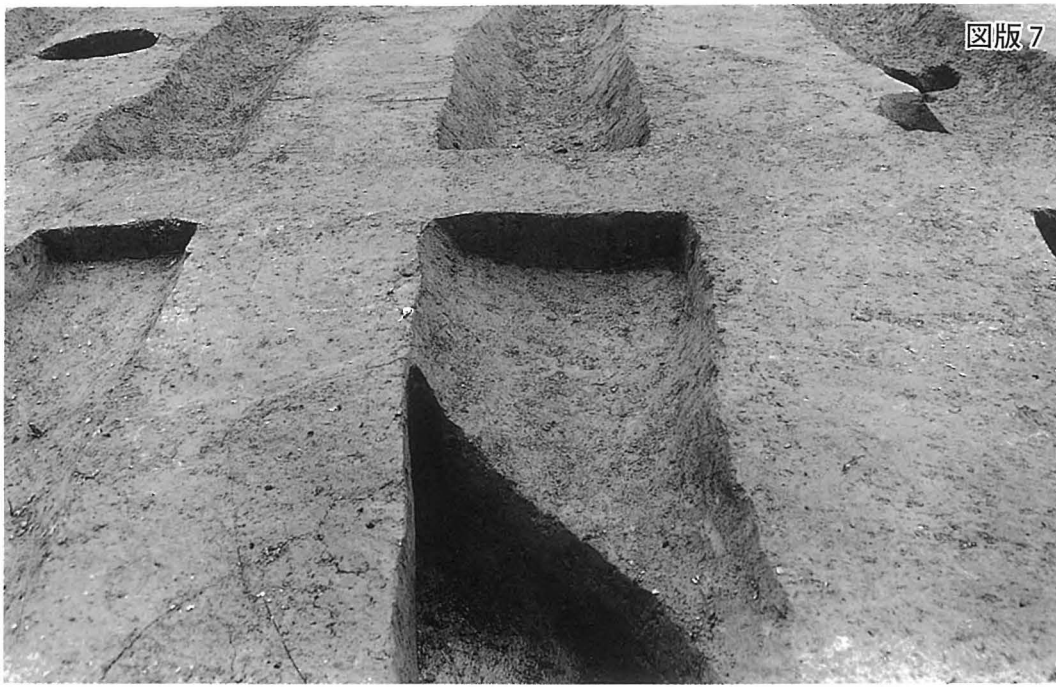
SD008検出状況
及び第2面のピット
(南から)



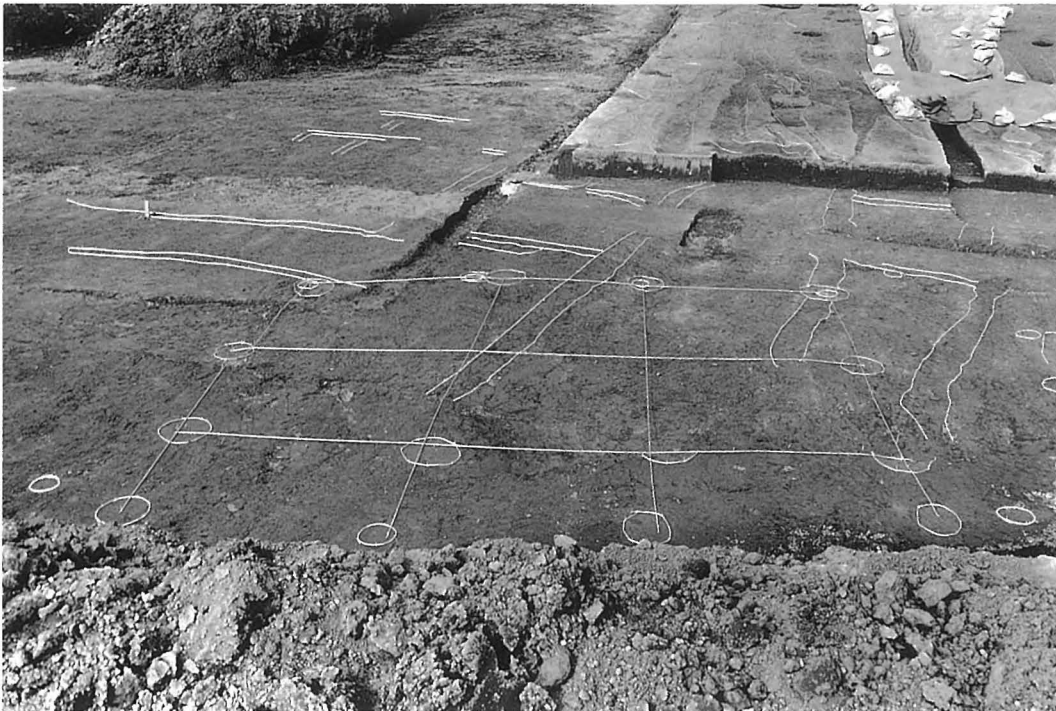
SD008西側部分
(南から)



SD008東側部分
(南から)



SD008断面



第3面遺構群検出状況
(南西から)



SB001 (手前) と
第3面の遺構群 (西から)



SD003
(北西から)



SD003断面



SD003
遺物出土状況



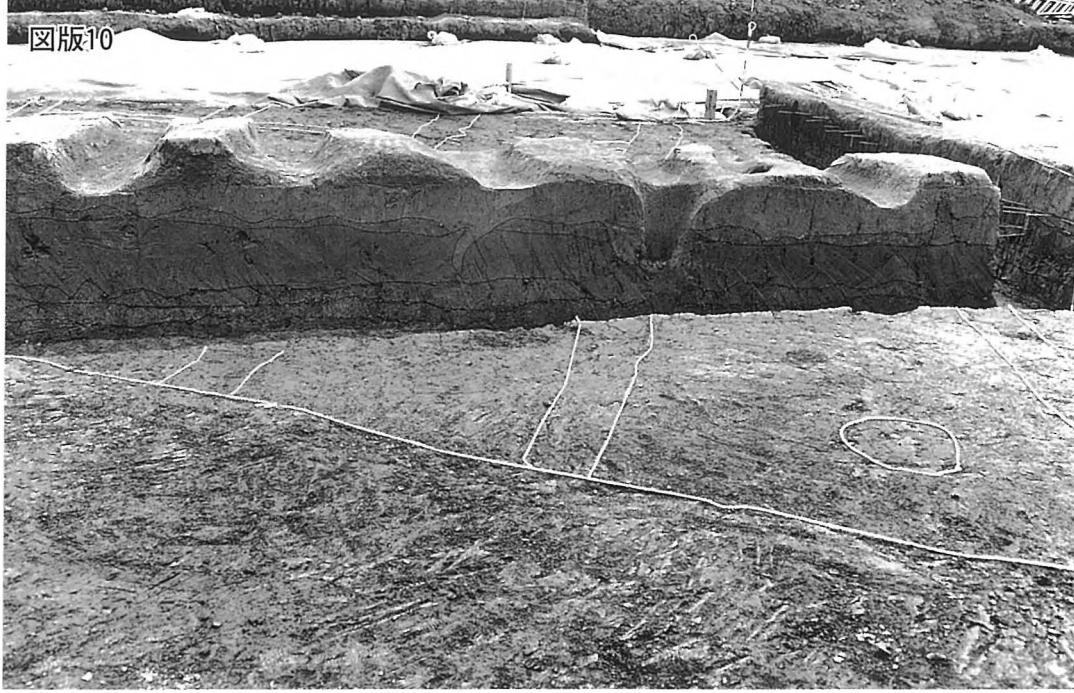
SD004 (中央)と
第3面の遺構群
(南西から)



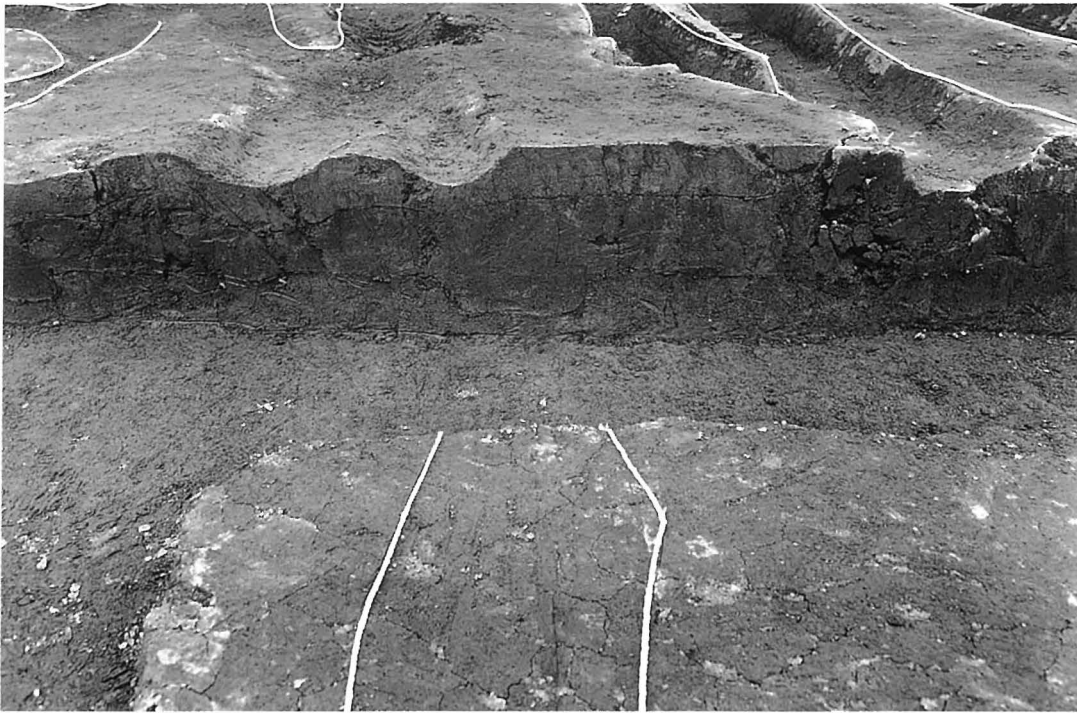
SD005
(北西から)



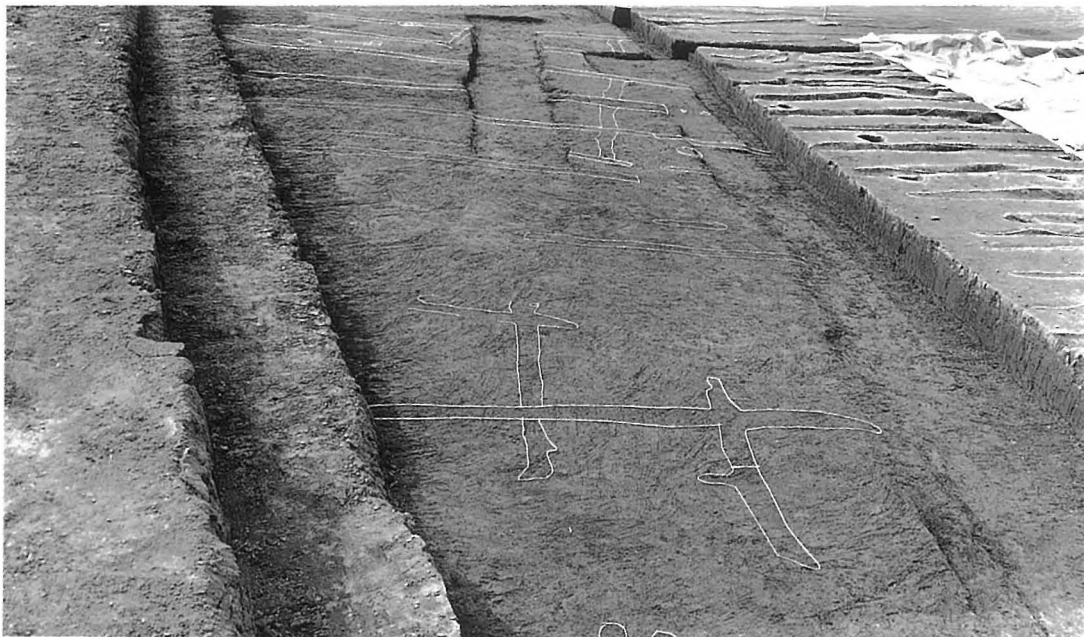
SD005断面



12トレンチ断面 (部分)
上: 第2面SD008
下: 第3面SD009



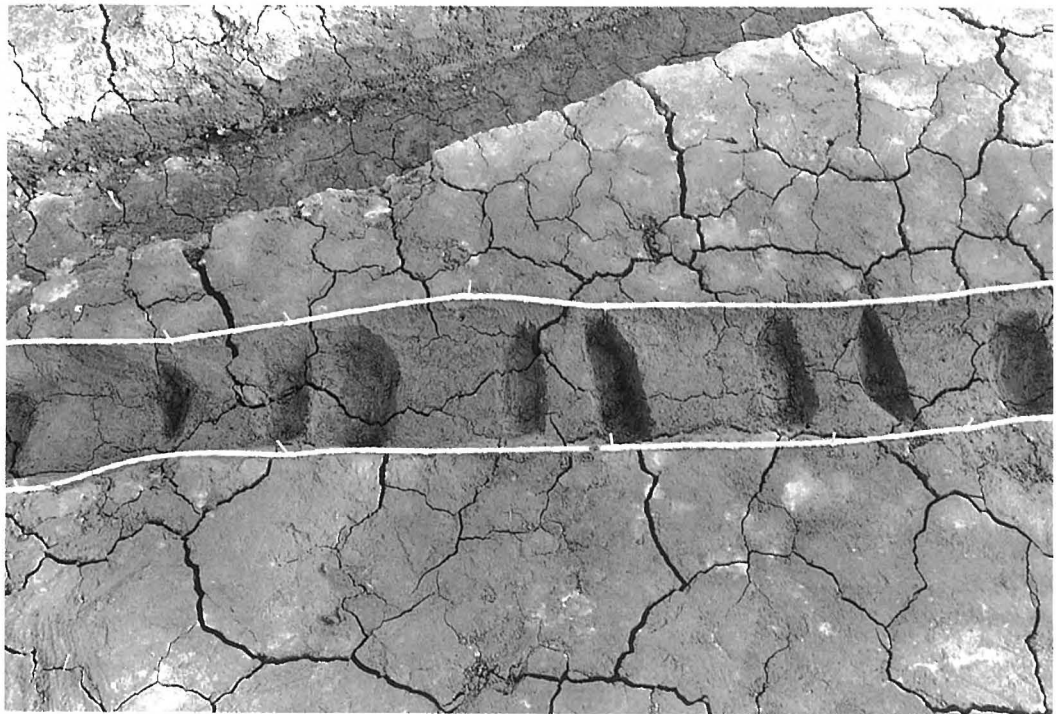
12トレンチ断面 (部分)



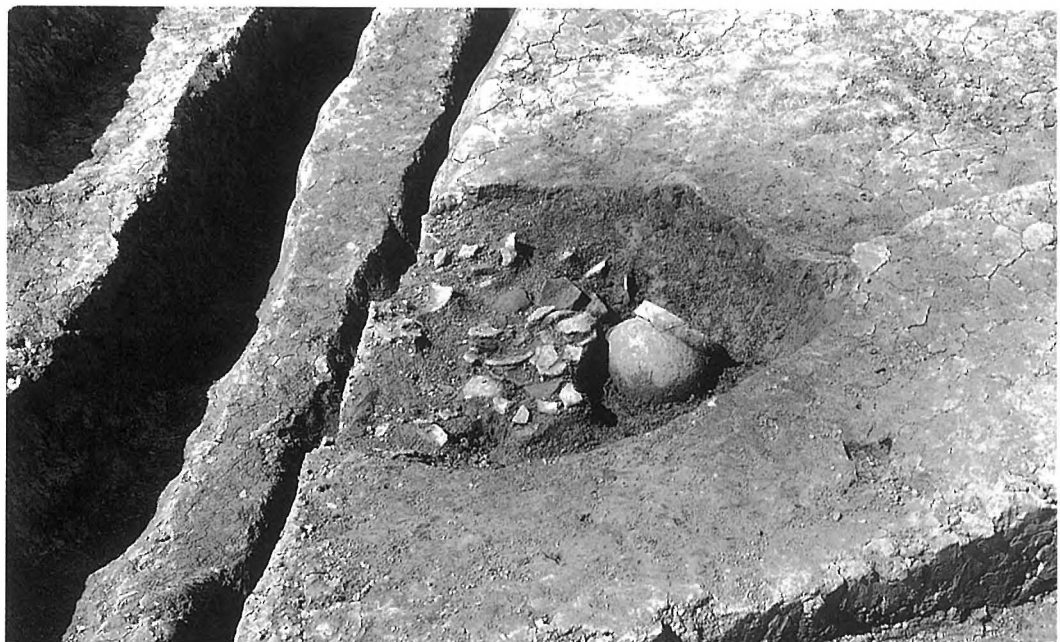
SD009検出状況
(南東から)



SD009南東部分
(北東から)



SD009構内の耕作痕



3 C73グリッド
遺物出土状況



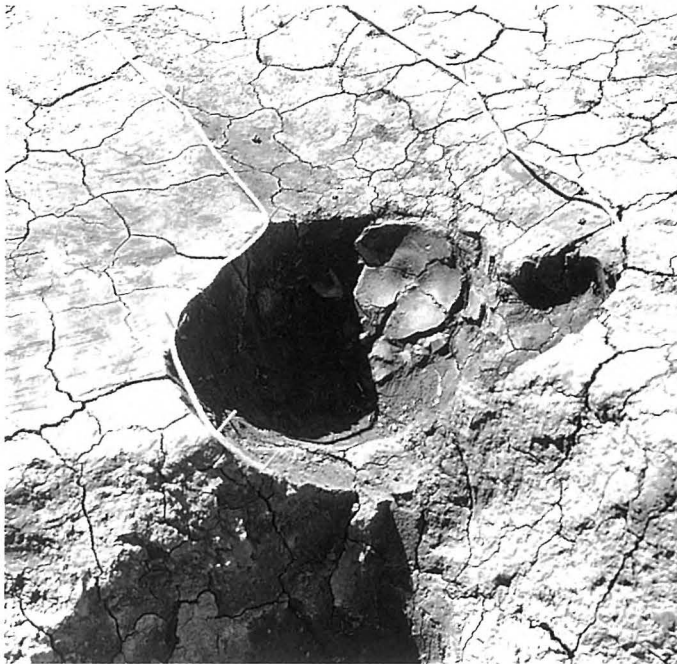
SB001 - P11断面



SH009



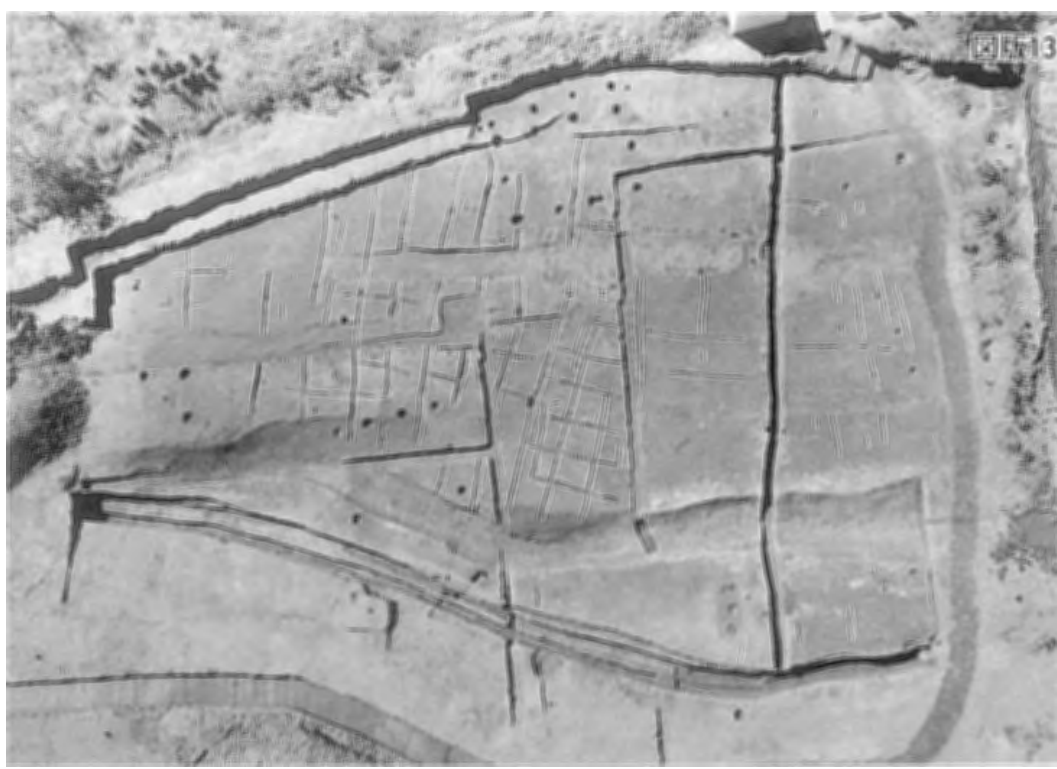
SH040



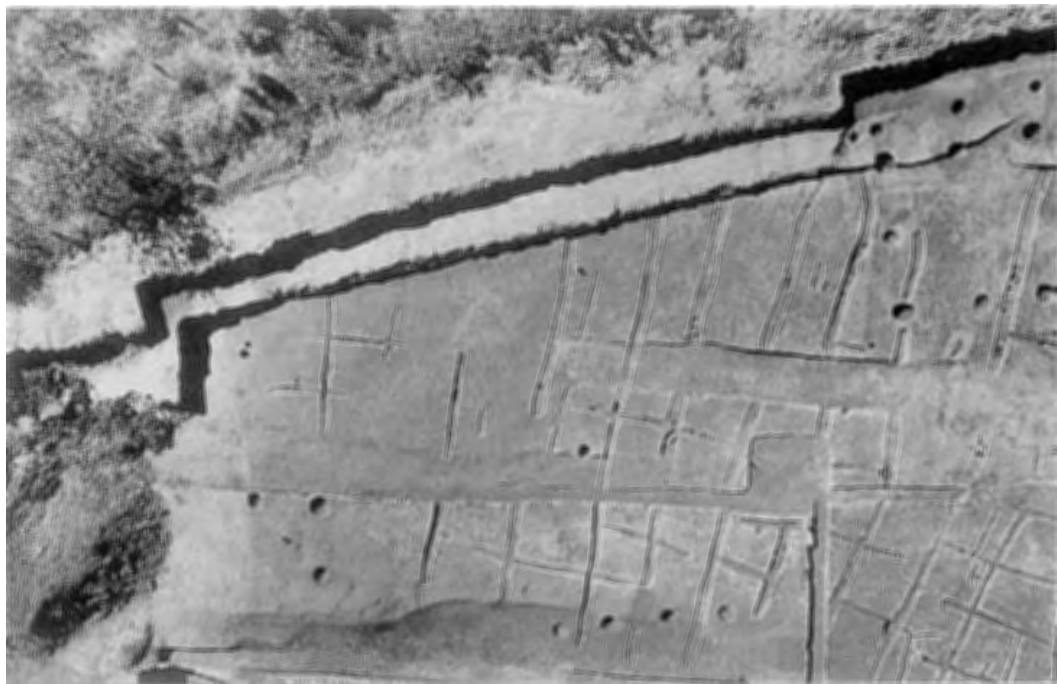
SH054遺物出土状況



第3面西側部分
(北西上空から)



第3面全景
(上空から)



第3面南側部分
(上空から)



第3面北東側部分
(上空から)



沢間2 遺跡遠景
(北東から)



第3トレンチ



第1トレンチ断面



第2トレンチ
西側部分



第2トレンチ
中央部分



第7トレンチ



SI001-1

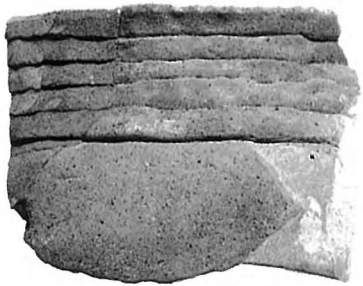


SI001-2·3



SD002A·B-1~4

SD008-1·2



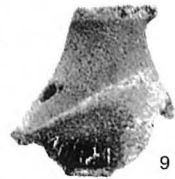
1



2



6



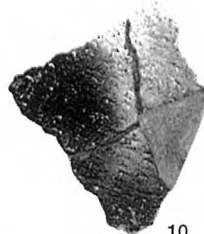
9



7



8



10



11



12

SD003出土遺物



SD003-3



SD003-4



SD003-5



SD004-1・2



SD005-1・2



SD005-3



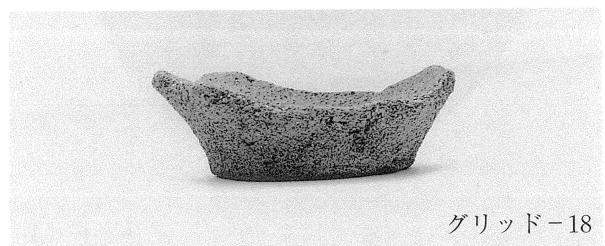
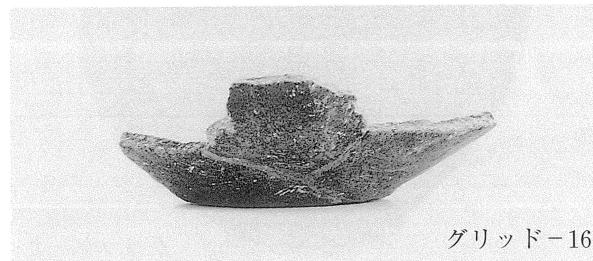
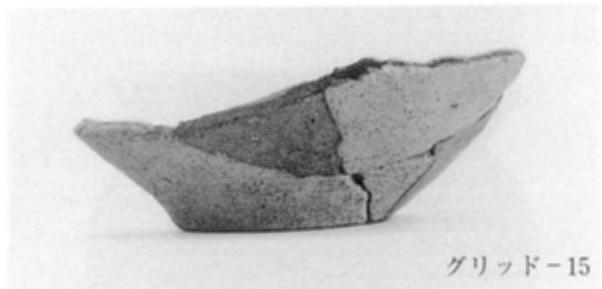
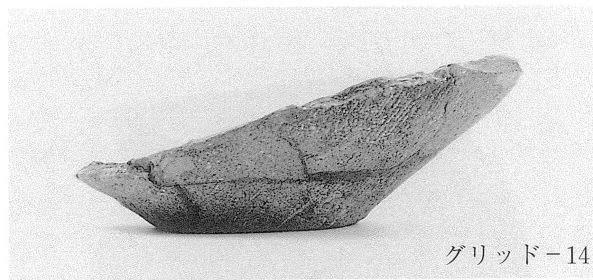
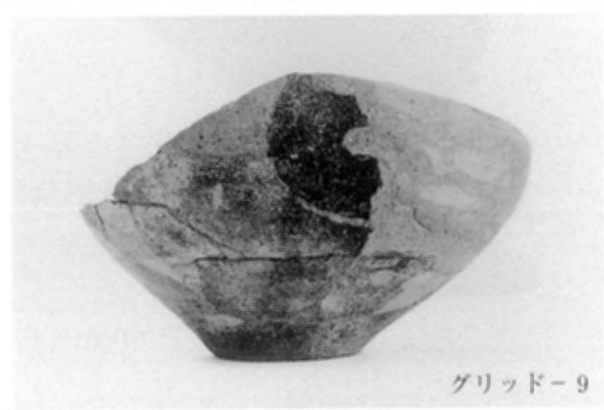
SD003-4



グリッド-1



グリッド-2





グリッド-21



グリッド-22



グリッド-23



グリッド-24



グリッド-25



グリッド-26



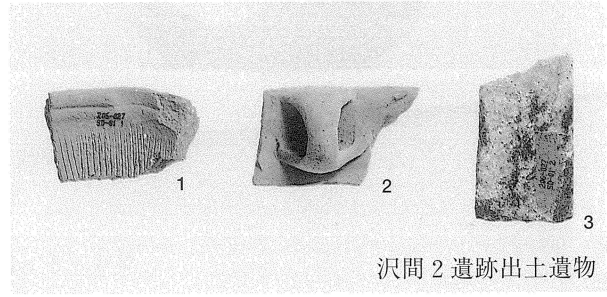
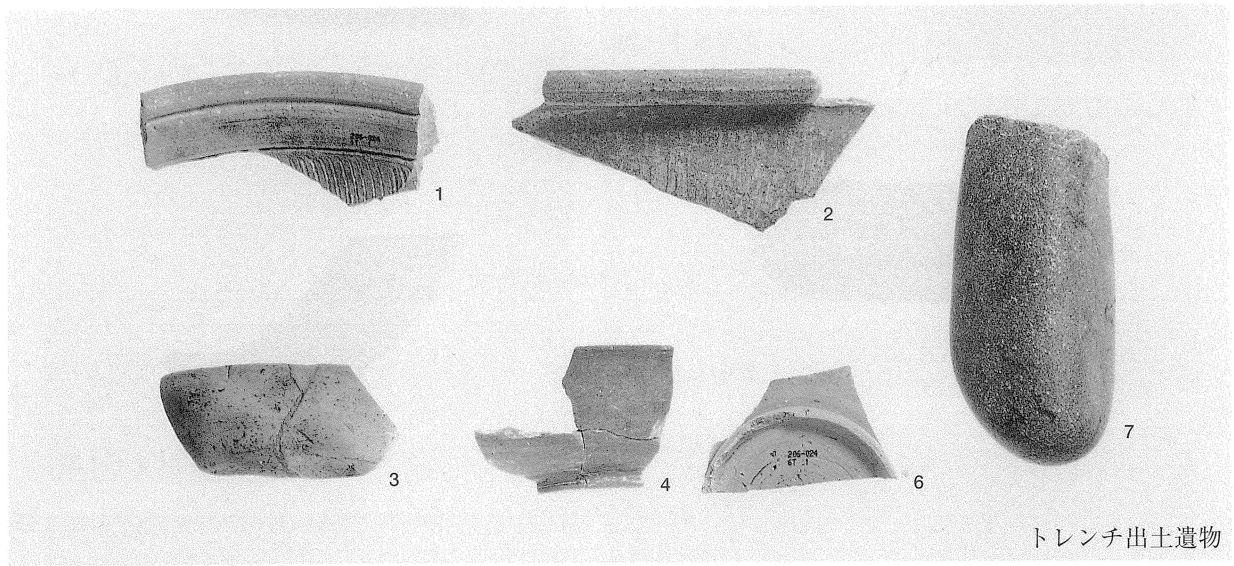
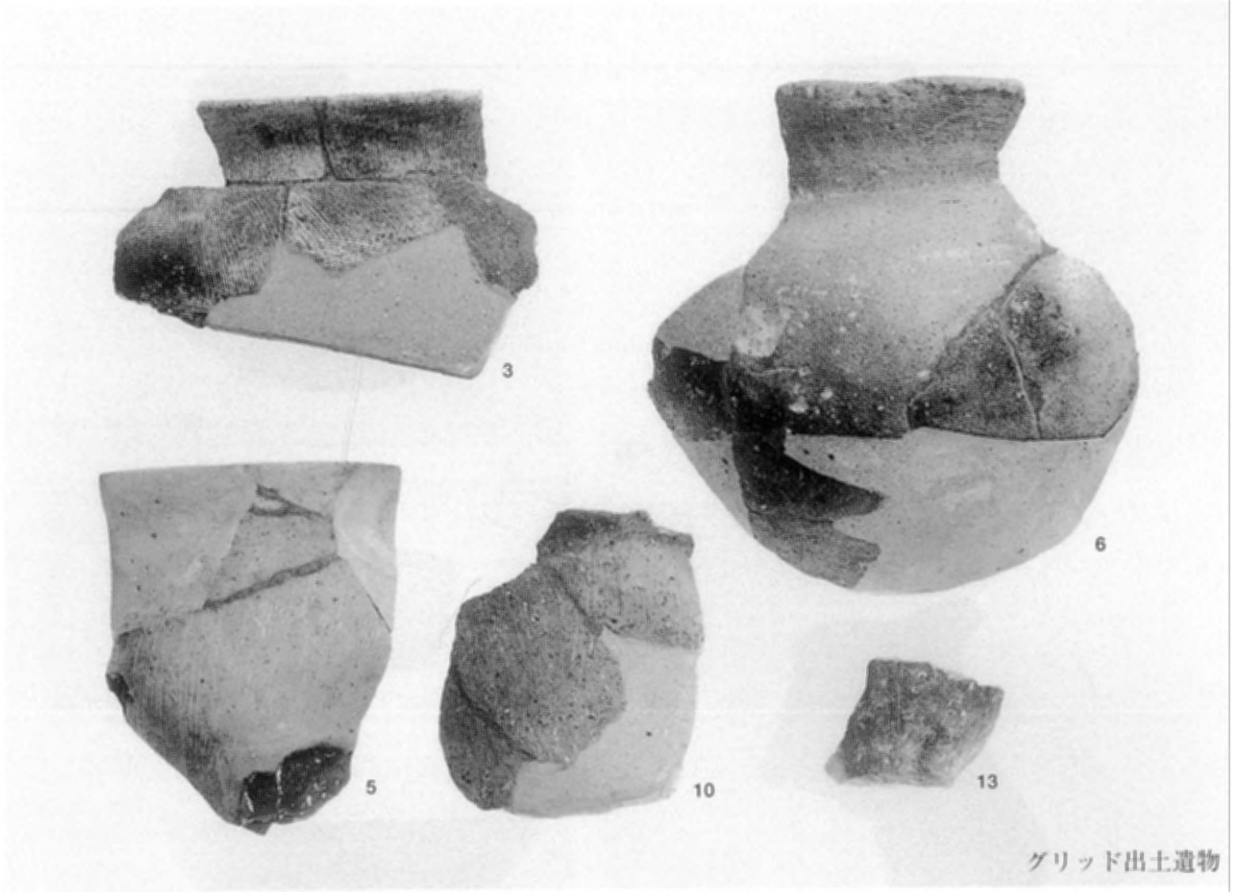
グリッド-27



グリッド-29



グリッド-28



報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゆうおうれんらくじどうしゃどうまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書							
副書名	木更津市沢間1・沢間2遺跡							
巻次	2							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第511集							
編著者名	伊藤智樹							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811							
発行年月日	西暦2005年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沢間1遺跡	千葉県木更津市下郡 字立ノ台1533ほか	206	024	35度 21分 31秒	140度 02分 52秒	20000616～ 20000831	3,833㎡	道路建設
沢間2遺跡	千葉県木更津市下郡 字山王方前1762-2 ほか	206	027	35度 21分 28秒	140度 02分 31秒	20020401～ 20020430	3,175㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
沢間1遺跡	散布地 生産跡	古墳時代 奈良・平安時代	溝跡 2 掘立柱建物跡 2 畠跡 1 自然流路 1 竪穴住居跡 1 掘立柱建物跡 1 溝跡 1 畠跡 4	2	土師器, 須恵器		低地部に3面の生活面が存在し, 各面から畠跡を検出した。第1面, 第2面は奈良時代から平安時代に, 最下層第3面は古墳時代前期初頭に相当する。	
沢間2遺跡	散布地	中・近世	溝跡 4 ピット 10	4	陶磁器			

千葉県文化財センター調査報告第511集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書2

— 木更津市沢間1・沢間2遺跡 —

平成17年3月25日発行

編	集	財団法人 千葉県文化財センター
発	行	国土交通省関東地方整備局 千葉県国道事務所 千葉県稲毛区天台5丁目27番1号
		財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809番地2
印	刷	株式会社 正文社 千葉県中央区都町1丁目10番6号
